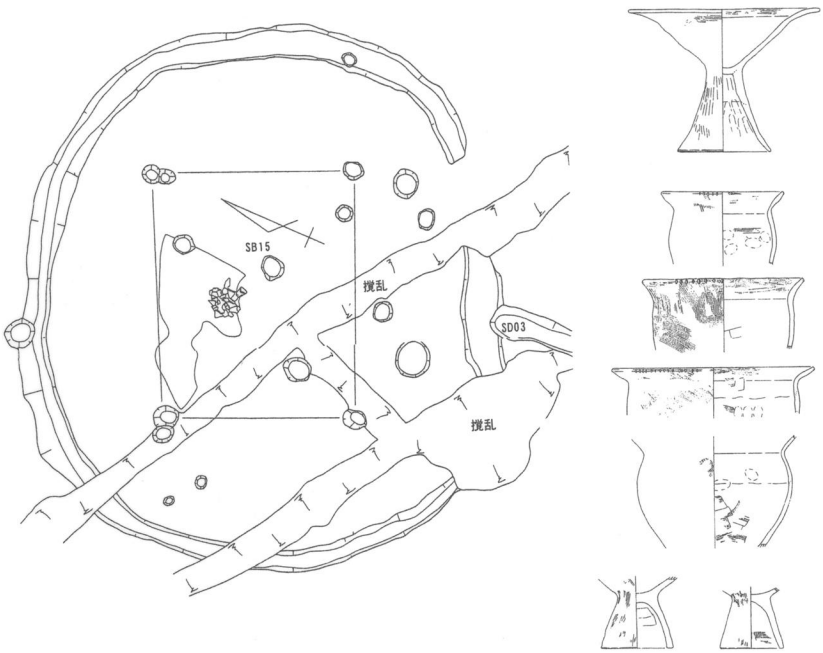
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第153集

蒲ヶ谷原遺跡
大溝遺跡

平成13年度（国）150号線道路改良（地域連携２Ｂ）（地域高規格）
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

－静岡県榛原郡相良町内－



２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第153集

蒲ヶ谷原遺跡
大溝遺跡

平成13年度（国）150号線道路改良（地域連携２Ｂ）（地域高規格）
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

－静岡県榛原郡相良町内－

２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

１　蒲ヶ谷原遺跡遠景（西より）

２　蒲ヶ谷原遺跡全景（東より）

巻頭図版２　蒲ヶ谷原遺跡

１　蒲ヶ谷原遺跡７・８号竪穴住居完掘状況（東より）

２　蒲ヶ谷原遺跡15号竪穴住居出土弥生土器

序

静岡県の中西部に位置する榛原郡の南部、相良町や榛原町においては、開発事業に伴う調査は少なく、遺跡の様相は専ら採集資料や小規模に行われた発掘調査による資料により明らかにされてきた。しかし、近年、静岡空港建設事業が広域的に実施され、また国道150号線バイパス、国道473号線バイパスの建設が推進されるなど、大規模開発の増加とともに、消え行く遺跡の発掘調査も増加傾向にある。

このような状況の中で今回の発掘調査が行われた相良町では本格的に調査された遺跡は少ないが、相良城、小堤山横穴墓群、大寄横穴墓群、花ノ木遺跡、天ノ川遺跡、金山遺跡などに対して調査が実施され、いずれも相良町を含めた榛原郡域、ひいては静岡県の歴史を解明するにあたっても欠かすことのできない重要な遺跡が多い。

今回調査の行われた蒲ヶ谷原遺跡、大溝遺跡の調査においても多くの新知見を加えることができた。

まず、蒲ヶ谷原遺跡では、平地部分からやや奥まった尾根上に立地するなどこれまで遺跡があるとは考えられていなかった場所に集落が確認された意義は大きい。遺跡は茶樹の改植により残存状況は決して良好であるとはいえないが、弥生時代の掘立柱建物、竪穴住居などをはじめとする遺構群や縄文時代早期・中期、弥生時代中期～後期の土器と石器が出土した。このように丘陵地上が古くから人々の生活の場であったことを明らかにできたことは重要である。さらに、出土した遺物を検討すると、弥生時代には遠江と駿河両地域の影響を受けていることがわかった。今後は遠江南部地域だけではなく東海地方全域とのかかわりの中で、蒲ヶ谷原遺跡の評価を考えなければならない。

一方、大溝遺跡では、蒲ヶ谷原遺跡同様遺跡の存在が想定できない場所で掘立柱建物が発見された意義は大きい。出土遺物は古墳時代終末期から奈良・平安時代、鎌倉時代に及ぶことから、大規模ではないにせよ断続的に集落が営まれていたことが判明し、駿河湾や萩間川を臨まない地域の集落として、その評価を考える必要があろう。

最後になるが、今回の調査が相良町をはじめとする榛原郡域の地域史を解明する一助となれば幸いである。また、調査および報告書作成にあたり、ご協力を頂いた静岡県御前崎土木事務所、相良町役場、相良町教育委員会にお礼申し上げるとともに、現地作業および資料整理に尽力した調査員・作業員の労苦を労いたい。

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎藤　忠

例　　言

1．本書は静岡県榛原郡相良町地頭方745－１他に所在する蒲ヶ谷原遺跡と、相良町須々木字大溝地内に所在する大溝遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、(国) 150号線道路改良（地域連携２Ｂ）（地域高規格）事業に伴う発掘調査として実施され、静岡県御前崎土木事務所から委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに相良町教育委員会の協力を得て、財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3．調査は№６、９～13、21・22地点の確認調査を平成13（2001）年４月１日～６月30日、№８地点の確認調査を平成13年10月１日～10月31日に実施した。蒲ヶ谷原遺跡の本調査は、平成13年７月26・27日および平成13年11月１日～２月28日に実施した。また、大溝遺跡の本調査を平成13年11月16・17日に実施した。

資料整理および報告書作成は平成16年７月１日～９月30日まで実施した。

4．調査体制は以下のとおりである。

	所　長	副所長	常務理事	調査部長	調査部次長	調査課長	総　務　部	担　当　者
確認調査 (平成13)	斎藤　忠	山下　晃	粂田徳幸	佐藤達雄	及川　司	篠原修二	本杉昭一（課長） 山本広子（係長）	大谷　宏治 丸杉俊一郎 深田　雅一
発掘調査 (平成13)	斎藤　忠	山下　晃	粂田徳幸	佐藤達雄	及川　司	篠原修二	本杉昭一（課長） 山本広子（係長）	深田　雅一
資料整理 (平成16)	斎藤　忠	飯田英夫	平松公夫	山本昇平	栗野　克巳 佐野五十三	足立順司	鎌田英巳（次長） 鈴木訓生	大谷　宏治

5．蒲ヶ谷原遺跡の現地の基準点測量、空中写真撮影ならびに空中写真測量は玉野総合コンサルタント株式会社に委託し、それ以外は当研究所職員が実施した。また、報告書の作成にあたって、蒲ヶ谷原遺跡の全体図トレースおよび石器の実測・トレースは株式会社フジヤマに委託した。また、蒲ヶ谷原遺跡から出土した炭化材の年代測定と樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託し、分析を進めた。

6．№９～13地点ならびに№21・22地点の確認調査の写真撮影は調査研究員　大谷宏治、丸杉俊一郎が行った。また、№８地点および蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の本調査における遺構の写真撮影は、調査三課長　篠原修二、調査研究員　深田雅一が実施した。また、遺物の写真撮影は、調査研究員　大谷宏治、研究所写真室技術員が実施した。

7．本書は、調査にあたった研究所職員の所見をもとに執筆した。執筆分担は下記の通りである。

第Ⅲ章第２節４以外　大谷宏治

第Ⅲ章第２節４　自然科学分析　山形秀樹（パレオ・ラボ）　植田弥生（パレオ・ラボ）

8．本書の編集は財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

9．発掘調査の資料ならびに出土遺物は静岡県教育委員会文化課で保管している。

凡　　例

1．本書で使用する記号は、下記のとおりである。

SB　竪穴住居　　SH　掘立柱建物　　SF　土坑　　SD　溝　　SP　柱穴

Tr　試掘溝（試掘坑）

2．本書の土器の種類は下記の網掛けで区別した

□　縄文土器・弥生土器・土師器・かわらけ　　■　須恵器　　▨　山茶碗

3．遺構番号について

蒲ヶ谷原遺跡の発掘調査において遺構番号は遺構の種類に関係なく、１番から順次付加したが、報告に当たって竪穴住居および掘立柱建物、土坑、溝はそれぞれ１番から振り直した。一方、竪穴住居や掘立柱建物の柱穴の番号などは、調査時のままとした。なお、調査前と調査後の遺構名の対応表を第１表に記載する。

第１表　蒲ヶ谷原遺跡新旧遺構番号対応表

旧遺構名	正式遺構名	旧遺構名	正式遺構名	旧遺構名	正式遺構名
SB01	SB01	SB40	SB11	SH81	SH06
SB02	SB02	SB97	SB12	SH82	SH07
SB17	SB03	SB98	SB13	SH83	SH08
SB93	SB04	SB99	SB14	SF04	SF01
SB94	SB05	SB55	SB15	SP62	SF02
SB95	SB06	SH96	SH01	SP63	SF03
SB19（古）	SB07	SH86	SH02	SF92	SF04
SB19（新）	SB08	SH90	SH03	SD99	SD01
SB87	SB09	SH89	SH04	SD54	SD02
SB88	SB10	SH80	SH05	SD77	SD03

SB16～18は新規

謝　　辞

現地調査および本書の作成に当たっては、静岡県御前崎土木事務所、相良町教育委員会、相良町役場、相良町中央公民館にご協力頂いた。また、相良町大沢地区自治会にプレハブの設置等においてご理解とご協力を頂いた。銘記して深謝します。

また、向坂鋼二先生には縄文土器に関してご指導賜り、伊藤通玄先生には石材の材質に関してご指導いただいた。また、竹内直文氏には弥生土器について、松井一明氏には山茶碗について懇切なご教示を頂いた。銘記して深謝します。

さらに、下記の個人・機関にご指導・助言ならびにご協力いただいた。銘記して深謝します（敬称略、五十音順）。

加藤理文　　河合　修　　佐藤由紀男　　柴田　稔　　白澤　崇　　菅原雄一　　鈴木一有

鈴木　源　　塚本和弘　　中川律子　　松下善和　　溝口彰啓

㈱フジヤマ　　㈱村松商会

目　　次

序 …… 斎藤　忠
例言 …… i
凡例 …… ii
謝辞 …… ii
目次 …… 1
挿図目次 …… 2
挿表目次 …… 3
巻頭図版目次 …… 3
図版目次 …… 3
写真目次 …… 4
第Ⅰ章　調査に至る経緯・経過と調査の方法 …… 5
　第１節　調査に至る経緯 …… 5
　第２節　調査の方法 …… 6
　第３節　調査の経過 …… 7
第Ⅱ章　確認調査の結果 …… 11
　第１節　No.８地点 …… 11
　第２節　No.９地点 …… 13
　第３節　No.10地点 …… 14
　第４節　No.11地点 …… 15
　第５節　No.12地点 …… 16
　第６節　No.13地点 …… 17
　第７節　No.21地点 …… 18
　第８節　No.22地点 …… 20
第Ⅲ章　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の調査成果 …… 21
　第１節　遺跡の位置と地理的・歴史的環境 …… 21
　第２節　蒲ヶ谷原遺跡 …… 26
　第３節　大溝遺跡 …… 68
第Ⅳ章　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の評価 …… 72
　第１節　蒲ヶ谷原遺跡の評価 …… 72
　第２節　大溝遺跡の評価 …… 79
第Ⅴ章　結語 …… 80
註 …… 81
参考文献 …… 81
図版
抄録
奥付

挿　図　目　次

1　確認調査各地点の位置
2　No.８地点の調査対象範囲と試掘坑・試掘溝配置図
3　No.８地点試掘坑・試掘溝配置図
4　No.８地点試掘坑・試掘溝出土遺物実測図
5　No.９・10地点の調査対象範囲と試掘溝配置図
6　No.９地点試掘溝配置図
7　No.10地点試掘溝配置図
8　No.11地点の調査対象範囲と試掘溝配置図
9　No.11地点試掘溝配置図
10　No.12・13地点の調査対象範囲と試掘溝配置図
11　No.12地点試掘溝配置図
12　No.13地点試掘溝配置図
13　No.21地点の調査対象範囲と試掘溝配置図
14　No.21地点試掘溝配置図
15　No.22地点の調査対象範囲と試掘溝配置図
16　No.22地点試掘溝配置図
17　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の位置①
18　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の位置②
19　相良町付近の地質分類図
20　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡周辺の遺跡
21　蒲ヶ谷原遺跡の本調査対象範囲
22　蒲ヶ谷原遺跡基本土層図
23　蒲ヶ谷原遺跡出土縄文土器・石棒実測図
24　蒲ヶ谷原遺跡全体図
25　蒲ヶ谷原遺跡SB02出土遺物実測図
26　蒲ヶ谷原遺跡SB01～03実測図①
27　蒲ヶ谷原遺跡SB01～03実測図②
28　蒲ヶ谷原遺跡SB04実測図
29　蒲ヶ谷原遺跡SB05実測図
30　蒲ヶ谷原遺跡SB06実測図
31　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08実測図
32　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08遺物出土状況詳細図
33　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08出土遺物実測図
34　蒲ヶ谷原遺跡SB09実測図
35　蒲ヶ谷原遺跡SB10実測図
36　蒲ヶ谷原遺跡SB11実測図
37　蒲ヶ谷原遺跡SB11出土土器実測図
38　蒲ヶ谷原遺跡SB12実測図
39　蒲ヶ谷原遺跡SB13・14実測図
40　蒲ヶ谷原遺跡SB15実測図および遺物出土状況詳細図
41　蒲ヶ谷原遺跡SB15出土遺物実測図
42　蒲ヶ谷原遺跡SB16実測図
43　蒲ヶ谷原遺跡SB17実測図
44　蒲ヶ谷原遺跡SB18実測図
45　蒲ヶ谷原遺跡SH01実測図
46　蒲ヶ谷原遺跡SH02実測図
47　蒲ヶ谷原遺跡SH03・04実測図
48　蒲ヶ谷原遺跡SH04実測図
49　蒲ヶ谷原遺跡SH05・06実測図
50　蒲ヶ谷原遺跡SH07・08実測図
51　蒲ヶ谷原遺跡SD01実測図
52　蒲ヶ谷原遺跡SD02実測図
53　蒲ヶ谷原遺跡SD02出土遺物実測図
54　蒲ヶ谷原遺跡SD03実測図
55　蒲ヶ谷原遺跡SF04実測図
56　蒲ヶ谷原遺跡SD03出土遺物実測図
57　蒲ヶ谷原遺跡柱穴出土遺物実測図
58　蒲ヶ谷原遺跡遺構外出土遺物実測図
59　大溝遺跡基本土層図
60　大溝遺跡の本調査対象範囲
61　大溝遺跡全体図
62　大溝遺跡SH01実測図
63　大溝遺跡SH02実測図
64　蒲ヶ谷原遺跡竪穴住居柱間と住居規模の関係
65　蒲ヶ谷原遺跡竪穴住居柱間規模比較図
66　蒲ヶ谷原遺跡掘立柱建物規模比較図
67　蒲ヶ谷原遺跡竪穴住居復元配置図
68　蒲ヶ谷原遺跡遺構変遷図
69　蒲ヶ谷原遺跡出土弥生土器比較図
70　南遠地域東部における主な遺跡の変遷

挿　表　目　次

1　蒲ヶ谷原遺跡新旧遺構番号対応表
2　調査地点の確認調査対象面積と確認調査実掘面積
3　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡周辺の遺跡地名表
4　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果
5　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材樹種同定結果一覧
6　蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居の概要
7　蒲ヶ谷原遺跡の掘立柱建物の概要
8　蒲ヶ谷原遺跡出土土器観察表
9　蒲ヶ谷原遺跡出土石器観察表
10　大溝遺跡の掘立柱建物の概要
11　大溝遺跡出土土器観察表

巻頭図版目次

1　1　蒲ヶ谷原遺跡遠景（西より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡全景（東より）
2　1　蒲ヶ谷原遺跡７・８号竪穴住居完掘状況（東より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡15号竪穴住居出土弥生土器

図　版　目　次

表紙　蒲ヶ谷原遺跡調査前の状況
1　1　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（南より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（東より）
2　1　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（東南より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（西より）
3　1　蒲ヶ谷原遺跡SB01・02完掘状況（東より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB04～SB06，SH01完掘状況（東より）
4　1　蒲ヶ谷原遺跡SB06完掘状況（西より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB09完掘状況（東より）
5　1　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08完掘状況（南より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08完掘状況（東より）
6　1　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08遺物出土状況①（東より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08遺物出土状況②（東より）
7　1　蒲ヶ谷原遺跡SB10完掘状況（南より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB10完掘状況（西より）
8　1　蒲ヶ谷原遺跡SB11完掘状況（西より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB15完掘状況（北より）
9　1　蒲ヶ谷原遺跡SB15遺物出土状況遠景（北東より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SB15遺物出土状況近景（東より）
10　1　蒲ヶ谷原遺跡SH01完掘状況（南より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SH02完掘状況（東より）
11　1　蒲ヶ谷原遺跡SH03・04完掘状況（西より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SH04完掘状況（西より）
12　1　蒲ヶ谷原遺跡SH05・06完掘状況（東より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SH07・08完掘状況（西より）
13　1　蒲ヶ谷原遺跡SD02完掘状況（北より）
　　2　蒲ヶ谷原遺跡SF04完掘状況（南より）
14　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物①（縄文時代・SB02・SB11）
15　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物②（SB02，SB07・08）
16　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物③（SB07・08）
17　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物④（SB07・08）
18　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑤（SB15）
19　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑥（SB15・SD03）
20　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑦（SD03・SP50ほか）
21　蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑧（SP60・遺構外ほか）・大溝遺跡出土遺物
22　1　大溝遺跡調査前の状況（南西より）
　　2　大溝遺跡完掘状況（北より）
23　1　大溝遺跡SH01・02近景（北東より）
　　2　大溝遺跡SH02近景（北東より）

写　真　目　次

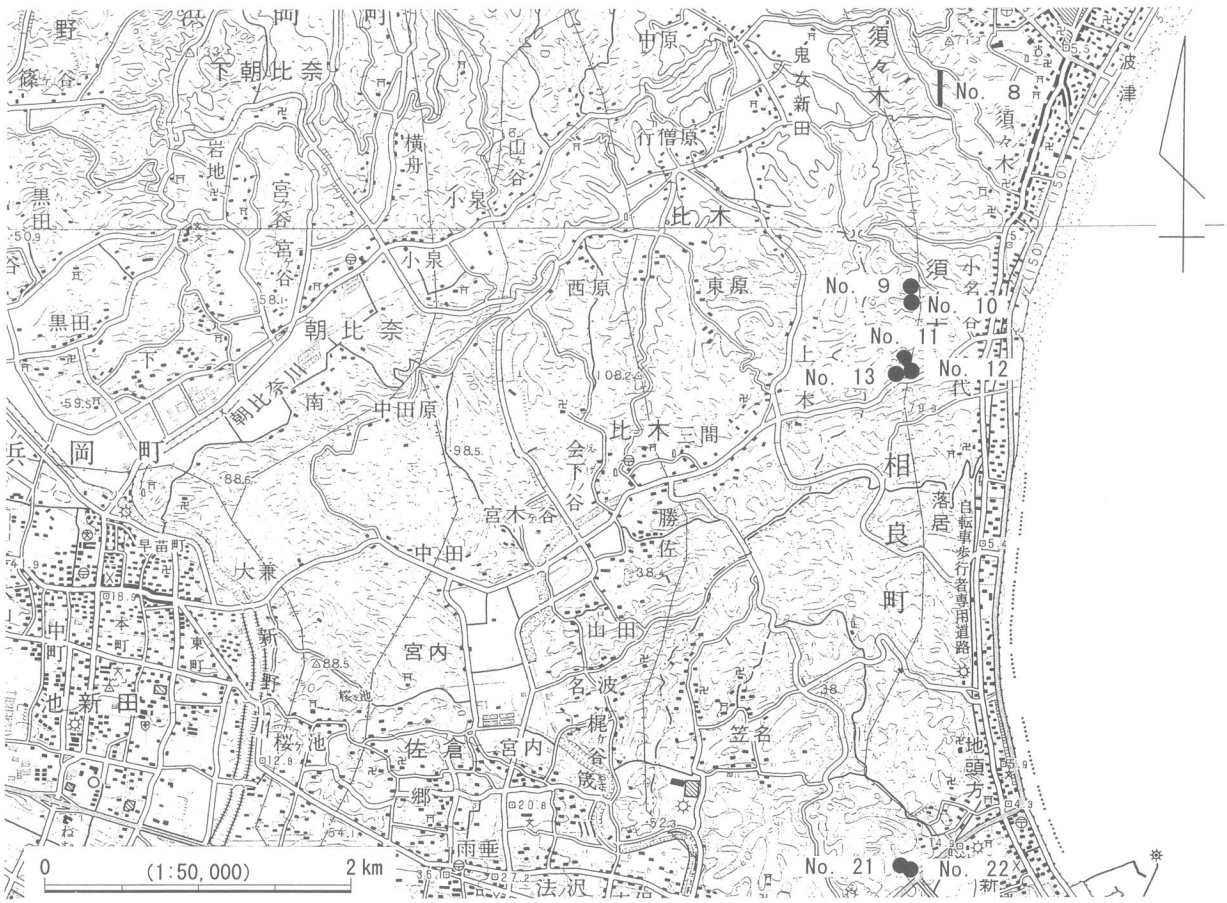
1　委託者との現地協議
2　確認調査の作業①
3　確認調査の作業②
4　大溝遺跡の重機による表土除去作業
5　大溝遺跡の発掘調査作業
6　蒲ヶ谷原遺跡の精査作業①
7　蒲ヶ谷原遺跡の精査作業②
8　蒲ヶ谷原遺跡の空中写真撮影作業
9　蒲ヶ谷原遺跡現地説明会の様子
10　基礎整理（土器注記）作業
11　土器接合作業
12　土器復元作業
13　図面整理作業
14　トレース作業
15　写真撮影作業
16　No.８地点試掘坑の状況
17　No.８地点試掘坑（Tr.６）内遺構検出状況
18　No.９地点試掘溝の状況①
19　No.９地点試掘溝の状況②
20　No.９地点試掘溝の状況③
21　No.10地点試掘溝の状況
22　No.11地点試掘溝の状況①
23　No.11地点試掘溝の状況②
24　No.12地点試掘溝の状況
25　No.13地点試掘溝の状況
26　No.21地点試掘溝内遺構検出状況①
27　No.21地点試掘溝内遺構検出状況②
28　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真①
29　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真②
30　蒲ヶ谷原遺跡出土叩石

第Ⅰ章　調査に至る経緯・経過と調査の方法

第１節　調査に至る経緯

（国）150号線は太平洋の海岸線に沿って静岡県内を東西に横断する主要幹線である。しかし、一部片側複線化が進められているものの、大部分が片側一車線で、かつ交差点での右折路の設置が少なく、榛原町内や相良町内では慢性的な渋滞が引き起こされている。この渋滞緩和を計るため（国）150号線バイパスの建設が計画された。一方、（国）473号線は、東名高速道路相良牧之原インターと（国）150号線を結ぶ主要道路であり、静岡空港の開港とともに御前崎方面へ向かう交通量の増加や、大型車の増加が想定される。しかし、（国）473号道路は道幅が狭く、坂道が多い上に、九十九折れであることから（国）473号線バイパスの建設が計画された。既に一部が着工され、残りの箇所に対しても建設が推進されている。

両国道バイパスは、海岸や平野に面する尾根上や緩斜面を通過することから、既知の遺跡は少ないものの未知の遺跡が存在することが想定された。このため静岡県教育委員会文化課と相良町教育委員会が現地にて協議を行い、立地状況を考慮して、（国）473号線バイパス建設地内に５地点（№１～５地点）、（国）150号線バイパス建設地内に18地点（№６～23地点）を設定し、遺跡の有無および遺跡の内容を確認するため確認調査を実施することとした。また、このうち幾つかの地点は、工事立会いとした。確認調査において遺跡の存在が確認された場合には、順次本調査を実施することとした。



第１図　確認調査各地点の位置（国土地理院発行１：25,000地形図「掛川」「御前崎」を複写して加筆。）

第２節　調査の方法

１　確認調査の方法

（国）150号線バイパスは、海岸線に沿って吉田町、榛原町から相良町へと続き、相良町内でやや海岸線から離れ、内陸を通過する。相良町大沢地区で（国）473号線バイパスと合流し、海岸線から一つの尾根を挟んだ内陸側を通り、相良町地頭方で（国）150号線の現道と合流する路線が計画された。確認調査対象範囲は静岡県教育委員会文化課と相良町教育委員会の協議により、周知の遺跡として認定されていないが、遺跡の存在が想定される箇所とし、（国）473号線バイパス建設範囲における対象地点を№１～５地点とし、（国）150号線バイパス建設範囲における対象地点を№６～23地点とした。

今回は静岡県御前崎土木事務所と静岡県教育委員会文化課との協議により土地の取得状況や道路建設の進行程度に応じて、№６（一部）、８～13、21・22地点に対して確認調査を実施することとした。

確認調査は、立地状況に応じて、調査対象地に適度な試掘溝あるいは試掘坑を設定した後、実際に掘削を進め、遺構・遺物の有無を確認する方法を採用した。まず、重機あるいは人力により表土除去を行った後、遺構の有無を確認する。遺構が確認できない場合には、試掘溝の写真を撮影し、配置図を作成した後、埋め戻し、調査を終了する。一方、遺構や遺物が存在する場合には、基本土層および試掘溝内の遺構概略図を作成し、写真を撮影した後、埋め戻し、本調査に備える。

なお、№６地点の確認調査の結果は、調査を引き継いだ相良町教育委員会により本調査（天ノ川（てんのがわ）遺跡）とともに報告されることとなった。

第２表　調査地点の確認調査対象面積と確認調査実掘面積

地点名	場所	確認調査対象面積	実掘調査面積	確認調査期間
№８地点	相良町須々木	7,700㎡	240㎡	平成13年10月９～25日
№９地点	相良町須々木	1,000㎡	80㎡	平成13年４月17～18日
№10地点	相良町須々木	370㎡	40㎡	平成13年４月19日
№11地点	相良町須々木	1,280㎡	80㎡	平成13年４月12～16日
№12地点	相良町須々木	600㎡	60㎡	平成13年４月９～11日
№13地点	相良町須々木	430㎡	50㎡	平成13年４月９～11日
№21地点	相良町地頭方	2,980㎡	160㎡	平成13年６月４～８日
№22地点	相良町地頭方	1,900㎡	140㎡	平成13年６月11～13日

２　本調査の方法

蒲ヶ谷原遺跡の本調査は、国土座標（旧日本測地系，日本測地系と表記）に準拠したグリッド杭を設定し、南北にアルファベットを付け、北からＡ、Ｂ、Ｃ‥で、東西にアラビア数字で番号を振り、西から１、２、３‥とし、北西杭の名称をもってグリッド名とする。

まず、重機により表土除去を行う。その後、人力により遺構の検出を行い、確認した遺構を順次掘削する。遺構は竪穴住居や大型の土坑は四分割し、対称となる２区画に対し土層を確認しながら掘削を進め、土層図等を作成した後、残りの２区画を掘削する。小型の土坑や柱穴は二分割し、まず土層を確認しながら半分を掘削した後、必要なものは土層図を作成し、残りの半分を掘削する。

遺構が掘り上がった段階で、ラジコンヘリコプターによる遺跡全体の空中写真撮影および空中写真測量を実施する。空中写真撮影終了後、空中写真測量図の補正を行うとともに、竪穴住居の貼床の調査を実施し、それらが終了した後埋め戻しを実施する。

大溝遺跡の本調査は、確認調査において遺構の存在が確認された試掘溝№６を中心に200㎡を対象とし、発掘調査を行う。まず、重機により表土除去を行った後、遺構の検出を行い、順次掘削を進める。遺構

は大型のものは四分割し、小型のものは二分割して土層を確認しながら掘削を進める。掘り上がった遺構から実測、写真撮影を実施し、すべての遺構が掘り上がった段階で全体写真を撮影する。最後に、埋め戻して調査を終了する。

なお、両遺跡ともに遺構の写真撮影には６×７判カメラ（白黒ネガフィルム）、35㎜判カメラ（カラーポジフィルム、カラーネガフィルム）を用いた。また、空中写真撮影および空中写真測量には６×4.5判カメラ（カラーポジフィルム、白黒ネガフィルム）を用いた。

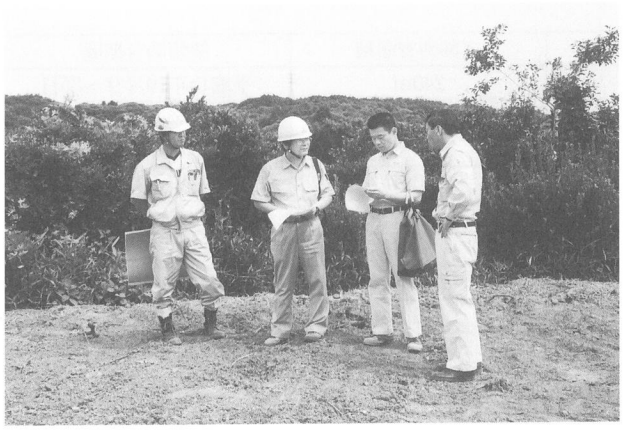
３　資料整理・報告書作成の方法

資料整理は、まず遺構図台帳の作成後、図面の修正を行う。つづいて、遺構図の報告書用版下原図の作成、トレース、貼り込みを行う。同時に遺構写真図版版下作成を行う。また、全体図はトレース委託とし、デジタルトレースを行う。

一方、遺物に関しては出土土器の洗浄・注記・台帳の作成を行った後、出土遺構ごとに器種分類を行い、接合・復元を実施する。復元が終了した段階で実測・トレース、観察表の作成を行うとともに、写真撮影を実施し、版下を作成する。また、金属製品はＸ線写真撮影を実施した後で保存処理を行う。自然遺物（炭化材）は放射性炭素14分析および樹種同定を実施する。

また、遺物は写真撮影が終了した段階で、梱包を行うとともに、各種台帳を作成し、報告書の印刷終了後、静岡県教育委員会文化課へ引渡しを行う。

上記の作業とともに、文章の作成を行い、最終的に報告書の編集を行い、入稿し、刊行する。



１　委託者との現地協議

２　確認調査の作業①

第３節　調査の経過

１　第１次確認調査

確認調査は、平成13年４月１日～６月30日（第１次）と、平成13年10月１日～10月31日（第２次）に実施した。

第１次確認調査は平成13年４月１日よりプレハブの設置を開始した。プレハブが完成した後、４月９日より相良町須々木地区にて№12・13地点の確認調査を開始した。両地点ともに、尾根上に幅約１ｍの試掘溝を設定し、人力にて掘削および精査を実施した。その結果、両地点ともに遺構・遺物を確認できなかったことから埋め戻し、調査を終了した。

つづいて、４月12日より、№11地点の確認調査を開始した。№12・13地点と同様に幅約１ｍの試掘溝を16本設定し、人力にて掘削・精査した。その結果、遺構・遺物ともに確認できなかったため埋め戻しを行い、調査を終了した。

№11地点の確認調査終了後の４月17日より、№９地点の確認調査を開始した。幅１ｍの試掘溝を設定し、人力掘削を実施した。遺構・遺物は出土

しなかったため調査を終了した。つづく４月19日にNo.10地点の確認調査を実施した。幅１ｍの試掘溝を設定し、人力掘削を進めたが遺構・遺物ともに出土しなかったため、埋め戻し、調査を終了した。

上記の５地点が終了した５月10日より、相良町大沢地区にてNo.６地点の確認調査を開始した。No.６地点は広範囲に及び、平坦地であることから、５×５ｍの試掘坑（以下，Trと表記）を16箇所設定し、南側から順次0.7㎥バックフォーにて掘削し、人力にて精査を行った。Tr.１より順次掘削を進め、Tr.９～13で遺構・遺物を確認した。遺構面は一部２面の可能性があるものの、おおよそ１面であり、溝や水田が存在する可能性が高いことが判明した。遺物には、古墳時代の土師器・須恵器・石製模造品・建築材のほか、奈良時代の須恵器・土師器、平安時代の灰釉陶器、鎌倉時代の山茶碗などがあり、これらにより遺跡が古墳時代～鎌倉時代に至ることが判明した。

No.６地点の確認調査が終了した６月４日よりNo.21地点の確認調査を開始した。確認調査は、試掘溝を0.7㎥バックフォーにて掘削し、人力にて精査を実施した。調査対象地の北西側で竪穴住居や柱穴を確認するとともに、弥生土器が出土した。この部分（約1,000㎡）には遺跡が存在することが判明したため、養生を行い、埋め戻しを行った。一方、東側、南東側は茶樹の改植が行われており、土器小片が数点出土したものの遺構は確認できなかった。

No.21地点の調査終了後、No.22地点の調査を開始した。No.21地点と同様の方法で行い、数点遺物片は出土したものの、茶樹の改植のため遺構は全く確認できなかった。

No.22地点の確認調査終了後、結果報告等を作成し県教育委員会文化課に報告し、プレハブを撤収し、第１次調査を終了した。

確認調査終了後、この結果を基に、県教育委員会文化課は遺構・遺物ともに出土したNo.６地点の一部およびNo.21地点の一部を本調査対応に決定した。遺跡名は、県教育委員会文化課と相良町教育委員会の協議により、No.６地点は天ノ川（てんのがわ）遺跡、No.

3　確認調査の作業②

4　大溝遺跡の重機による表土除去作業

5　大溝遺跡の発掘調査作業

6　蒲ヶ谷原遺跡の精査作業①

7　蒲ヶ谷原遺跡の精査作業②

8　蒲ヶ谷原遺跡の空中写真撮影作業

9　蒲ヶ谷原遺跡現地説明会の様子

10　基礎整理（土器注記）作業

21地点は蒲ヶ谷原（かばがやはら）遺跡とされた。

なお、№6地点は現在相良町教育委員会が発掘調査（本調査）を実施しており、確認調査時の試掘坑の位置や資料等は№6地点（天ノ川遺跡）の報告書に譲る。

2　第2次確認調査の経過および大溝遺跡の本調査の経過

第2次確認調査は平成13年10月1日より着手した。まず、プレハブを設営し、機材の搬入などを行い、準備が整った10月9日より相良町須々木地区にて№8地点の確認調査を開始した。対象範囲内に試掘坑・試掘溝を設定し、0.7㎥バックフォーにて掘削した後、人力にて精査を行った。その結果、Tr.6で柱穴を確認した。したがって、一部のみ（Tr.6周辺）で遺跡が存在することが判明し、本調査対象となった。なお、静岡県教育委員会文化課と相良町教育委員会の協議により№8地点は大溝（おおみぞ）遺跡と命名された。

本調査は、11月16日に0.7㎥バックフォーにて表土除去を行い、つづいて、遺構の検出を行い、柱穴の掘削を進めた。掘削が終了した段階で、全体図、遺構図の作成を行うとともに写真撮影を行った。本調査は11月17日に終了した。

3　蒲ヶ谷原遺跡の本調査の経過

まず平成13年7月26・27日に橋脚設置対象部分の調査を実施した。また、残りの部分の本調査は平成13年11月1日より着手した。

橋脚部分の調査は重機による表土除去を実施後、遺構の精査、掘削を行い、写真撮影・図化作業を行い、調査を終了した。

残りの部分の調査は、平成13年11月1日のプレハブ設営から開始した。11月2日より現地作業を開始した。まず、0.7㎥バックフォーにて表土（耕作土）を除去した後、国土座標に基づく基準杭を設定した。基準杭設定後精査を進め、遺構の検出を行った。検出した遺構を順次掘削し、掘り上がった遺構から図面作成、写真撮影を行い、すべての遺構が掘り上がった1月17日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・空中写真測量を実施し

た。撮影終了後、竪穴住居の解体を行った。

また、12月16日に現地説明会を開催し、地元住民をはじめ約150名の参加があった。

平成14年１月21日に現地調査を終了した。

平成14年２月４日にプレハブの解体、および現地の引渡しを行い、現地調査を終了した。

また、本調査につづいて遺物の洗浄、注記作業、図面・写真の整理・台帳作成などの基礎整理作業を実施した。

11　土器接合作業

4　資料整理の経過

資料整理および報告書作成作業は平成16年７月１日より開始し、遺物の接合、補強・復元を進めるとともに、接合・復元が終了したものから遺物実測、拓本採取、写真撮影を進めた。また、一部を実測委託した。実測終了後、版下原図を作成し順次トレースを行い、版下を作成した。

遺構は、竪穴住居、掘立柱建物の版下原図を作成した後、土坑・柱穴等の版下原図を作成した。その後、トレースを行い、版下を作成した。

また、全体図のトレースを株式会社フジヤマに委託し、実施した。

さらに、遺構図・遺物図の作成と併行して、本文および観察表の作成を進めた。

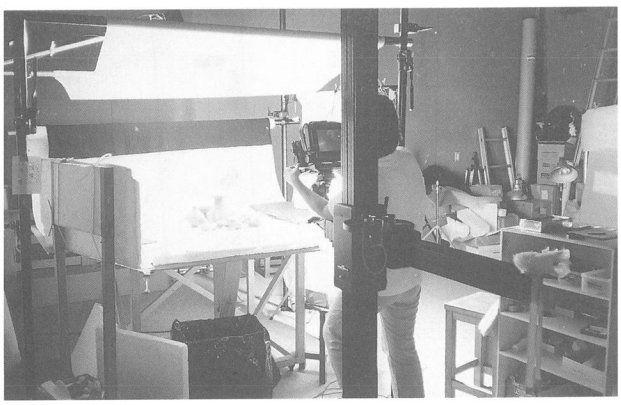
最終的に、９月21日より図面、写真、遺物の収納作業を行い、記録類、出土遺物を静岡県教育委員会文化課に引渡し、すべての作業を終了した。

報告書の印刷は、松本印刷株式会社に委託し、刊行に至った。

12　土器復元作業

13　図面整理作業

14　トレース作業



15　写真撮影作業

第Ⅱ章　確認調査の結果

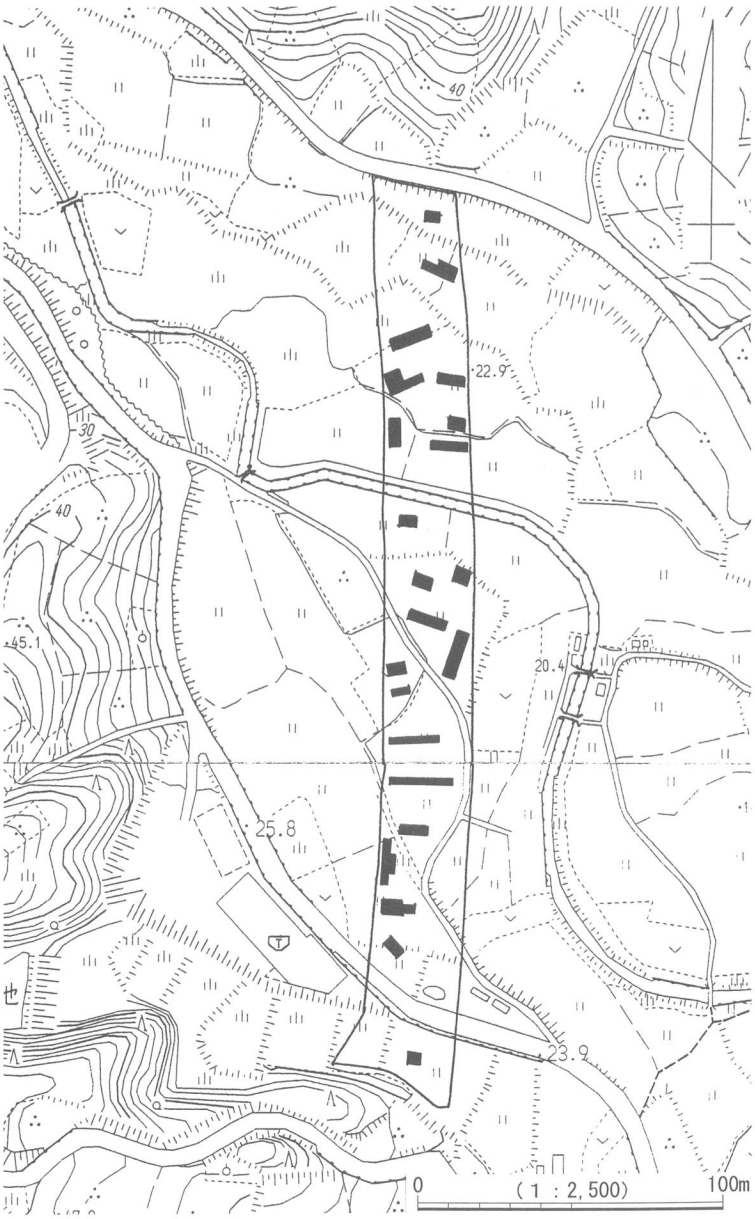
第１節　No.８地点

１　位置と現状（第２図）

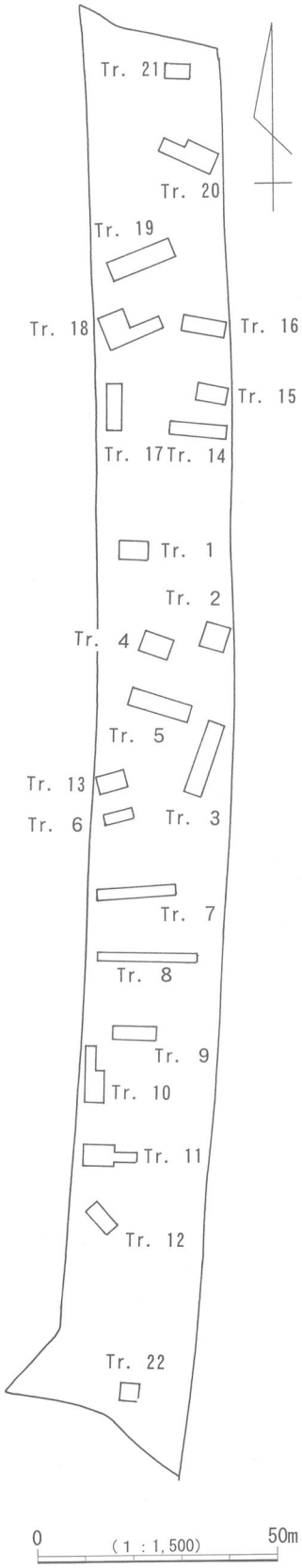
相良町須々木に位置する。No.８地点は、牧之原台地を開削した須々木川が形成した比較的大きな谷の緩斜面に位置している。標高は約20～30mであり、現在は水田あるいは畑として利用されている。

２　確認調査の内容（第３図，写真16）

試掘坑･試掘溝を22箇所設定し、Tr.１から順次、重機により表土除去を行った後、人力にて遺構の精査を実施した。



第２図　No.８地点の調査対象範囲と試掘坑・試掘溝配置図



第３図　No.８地点試掘坑・試掘溝配置図

３　確認調査の結果（第４図，第11表，図版21，写真17）

試掘坑・試掘溝22箇所のうち、確認調査対象範囲のほぼ中央のTr.６で掘立柱建物の一部と想定する柱穴を数基確認したため、狭い範囲ながらも遺跡が存在することが判明した。

遺構　Tr.６で柱穴数基が出土した（写真17）。

遺物　Tr.３・５・20から須恵器・土師器小片、Tr.６・７から須恵器小片、Tr.13・18から土師器小片、Tr.９から山茶碗、Tr.19から土師器・山茶碗小片、Tr.20からかわらけが出土した。このうち、図示可能な須恵器２点、山茶碗３点、かわらけ１点を図示した（第４図）。

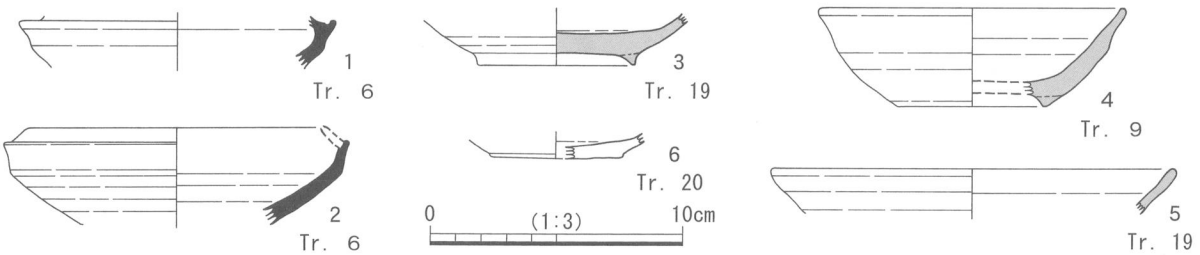
須恵器　Tr.６から出土した杯身２点（１・２）を図示した。小片のため、時期は特定できないが、口径が10cm前後と想定できることから、遠江Ⅳ期前半、７世紀前半に位置づけることができる。
なお、胎土や色調などの特徴から、１は湖西産で、２は湖西産以外（地元産か）の可能性が高い。

山茶碗　Tr.19から出土したもの（３・５）とTr.９から出土したもの（４）を図示した。
碗底部片（３）は低い三角形高台で、高台径6.2cmをはかる。底部は糸切り未調整である。小碗の底部から口縁部までの破片（４）は、低い潰れた三角形高台であり、高台端部にソダ痕が確認できる。口縁部はやや内彎しており、口縁端部はやや内上方に引き出される。口径11.8、高台径5.9cm、器高3.9cmをはかる。碗の口縁部片（５）は、口縁端部がやや内彎しており、口縁端部は丸く仕上げられている。３～５は形態的特徴や胎土・色調から東遠江産（金谷産）である可能性が高く（註１，註は81頁）、時期は３が松井編年山茶碗Ⅲ－１期、13世紀前半、４が松井編年山茶碗Ⅲ－２期、13世紀中葉、５が松井編年山茶碗Ⅰ期、12世紀前半に比定できる（松井1993，引用・参考文献は81頁）。

かわらけ　底部片１点（６）がTr.20より出土した。底部は平底である。小片のため時期を特定することはできない。

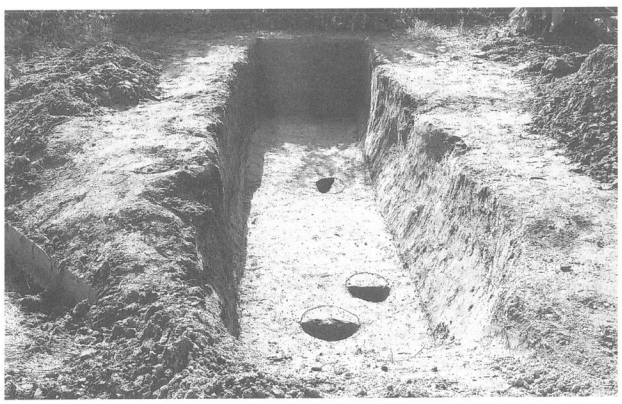
４　まとめ

Tr.６のみで柱穴を確認したことにより、Tr.６周辺のみ遺構が存在することが判明した。この周辺のみを対象として本調査を実施することとなった（第Ⅲ章第３節参照）。



第４図　No.８地点試掘坑・試掘溝出土遺物実測図

16　No.８地点試掘坑の状況



17　No.８地点試掘坑（Tr.６）内遺構検出状況

第２節　No.９地点

１　位置と現状（第５図）

相良町須々木地内、相良町中央公民館の南西、（国）150号線・県道239号線より西に約300mの丘陵上、牧之原台地から熊手状に伸びる小尾根の尾根上に位置している。周囲は茶畑として利用されているが、No.９地点は雑木林であった。

２　確認調査の内容（第６図）

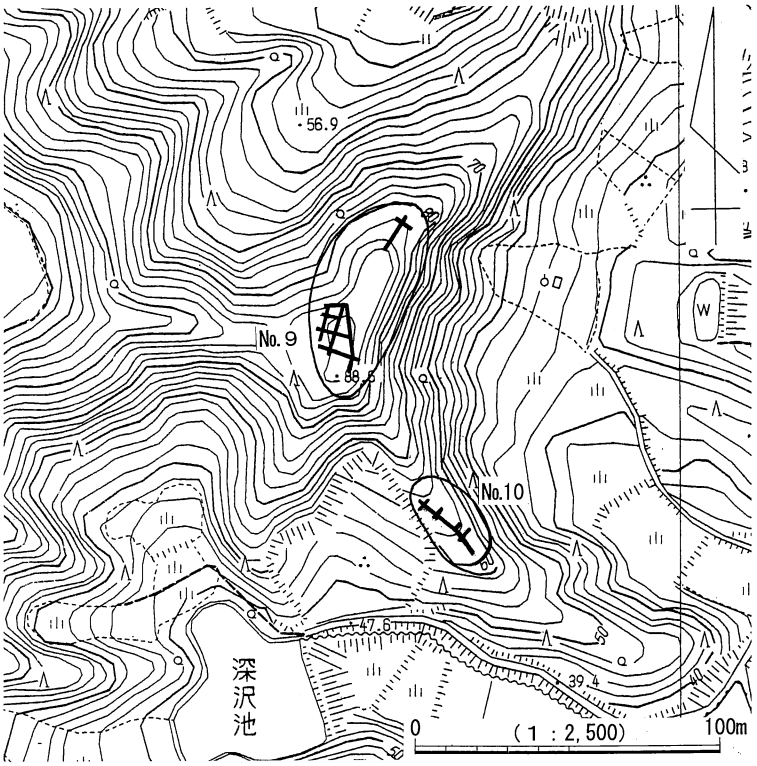
尾根上に幅１mの試掘溝を10本設定し、人力により表土から掘削し、遺構の有無の確認を実施した。

３　確認調査の結果（写真18～20）

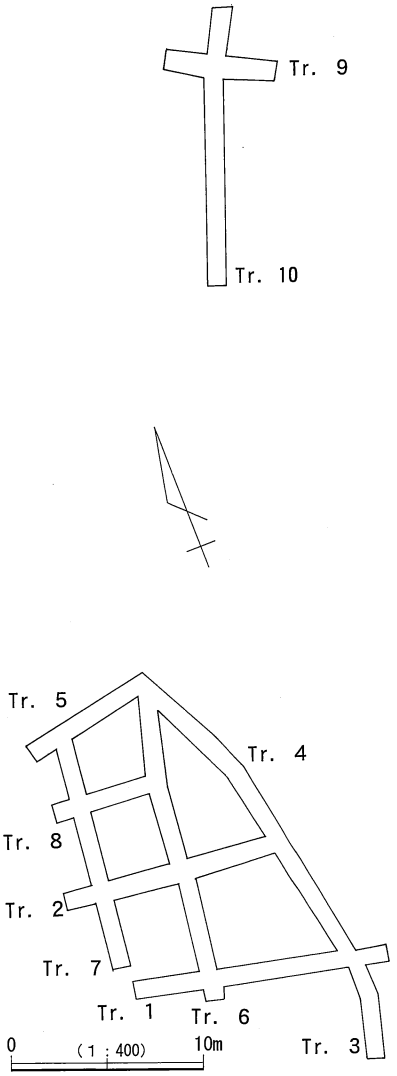
各試掘溝とも遺構・遺物ともに確認できなかった。

４　まとめ

確認調査の結果、遺構・遺物ともに出土しなかったことから、遺跡ではないことが判明した。



第５図　No.９・10地点の調査対象範囲と試掘溝配置図



第６図　No.９地点試掘溝配置図

第３節　No.10地点

１　位置と現状（第５図）

相良町須々木地内に位置する。No.９地点から南に伸びる斜面中腹の平坦地に位置している。雑木林となっており、人為は加えられていない。

２　確認調査の内容（第７図）

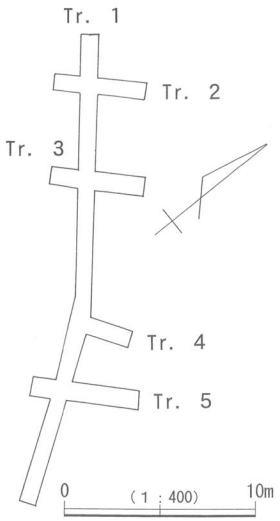
平坦面に幅１ｍの試掘溝５本を設定し、人力により表土から掘削、遺構の有無の確認を行った。

３　確認調査の結果（写真21）

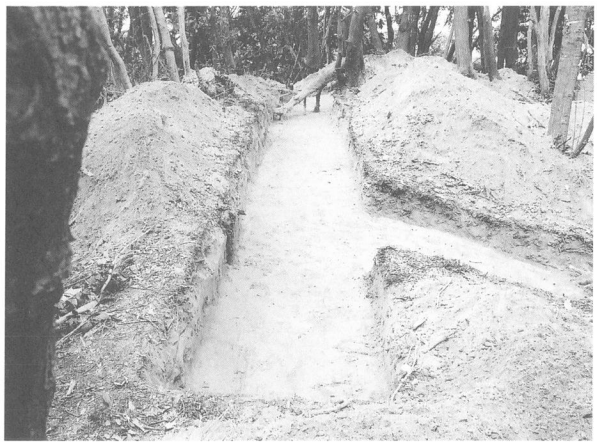
遺構・遺物ともに確認できなかった。

４　まとめ

遺構・遺物ともに出土しなかったことから、遺跡ではないことが判明した。



第７図　No.10地点試掘溝配置図



18　No.９地点試掘溝の状況①

20　No.９地点試掘溝の状況③

19　No.９地点試掘溝の状況②

21　No.10地点試掘溝の状況

第４節　No.11地点

１　位置と現状（第８図）

相良町須々木の県道239号線（相良浜岡線）の北側約100mの尾根上に位置しており、雑木林となっていた。標高は約48mであり、須々木川が形成した平地部や、駿河湾を直接望むことはできない。

２　確認調査の内容（第９図）

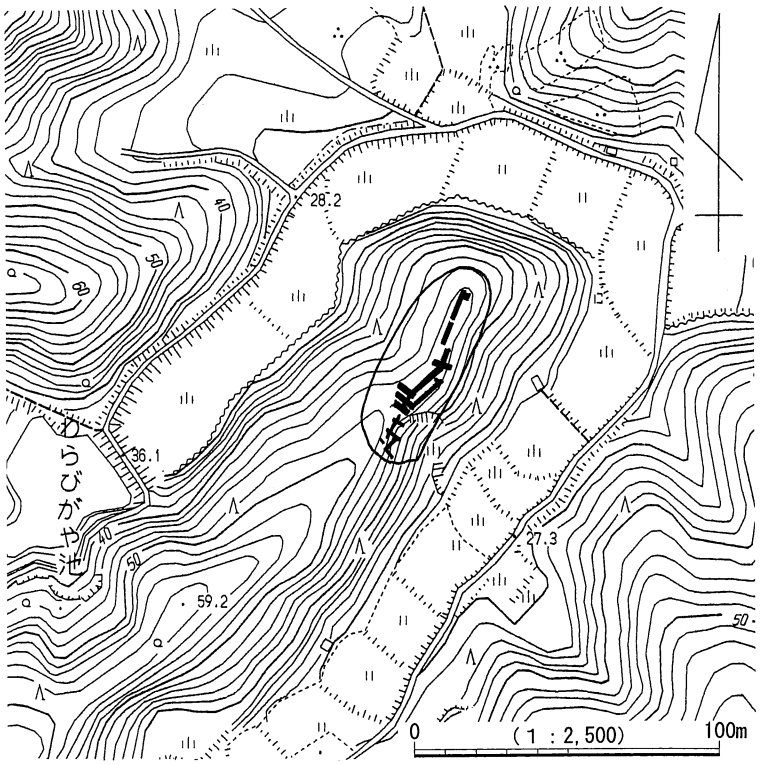
尾根上に幅１mの試掘溝を16本設定し、人力により表土除去、遺構の有無の確認を行った。

３　確認調査の結果（写真22・23）

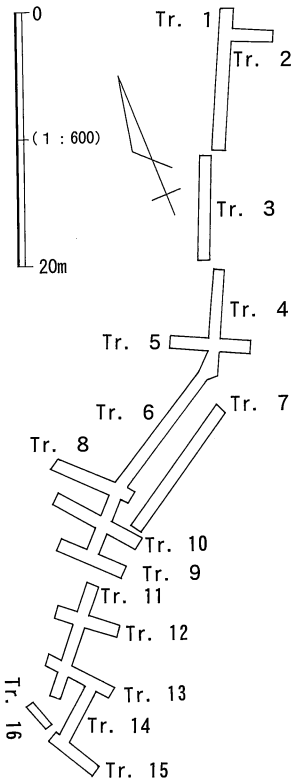
試掘溝すべて遺構・遺物ともに確認できなかった。

４　まとめ

遺構・遺物ともに出土しなかったことから遺跡ではないことが判明した。



第８図　No.11地点の調査対象範囲と試掘溝配置図



第９図　No.11地点試掘溝配置図

第５節　No.12地点

１　位置と現状（第10図）

相良町須々木の県道239号線のすぐ北側の尾根上に位置しており、雑木林となっていた。標高は約58～59mであり、須々木川が形成した平地部分を見下ろすことができるが、駿河湾を直接望むことはできない。

２　確認調査の内容（第11図）

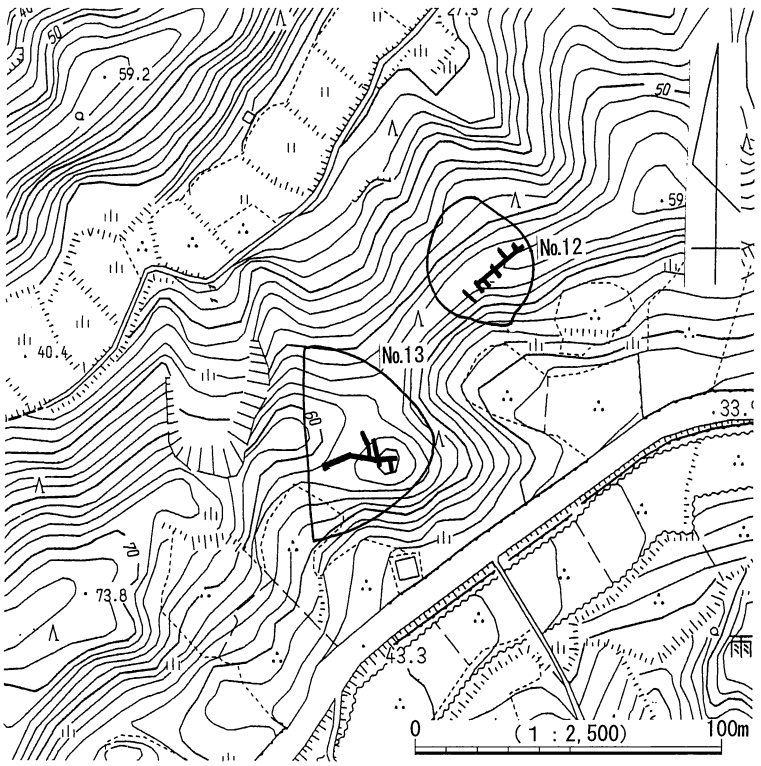
尾根上に幅約１ｍの試掘溝を８本設定し、人力により掘削した。表土直下は地山であり、包含層などは確認できない。

３　確認調査の結果（写真24）

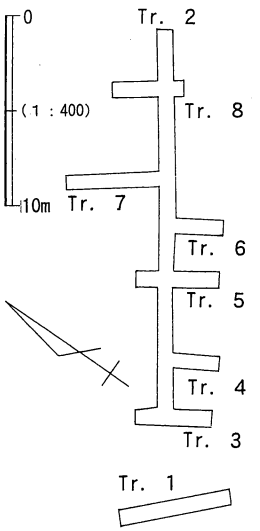
各試掘溝ともに遺構・遺物は確認できなかった。

４　まとめ

遺構・遺物ともに出土しなかったことから遺跡ではないことが判明した。



第10図　No.12・13地点の調査対象範囲と試掘溝配置図



第11図　No.12地点試掘溝配置図

第６節　No.13地点

１　位置と現状（第10図）

相良町須々木の県道239号線の北側の尾根上に位置しており、No.12地点と対峙している。雑木林・竹林となっていた。

２　確認調査の内容（第12図）

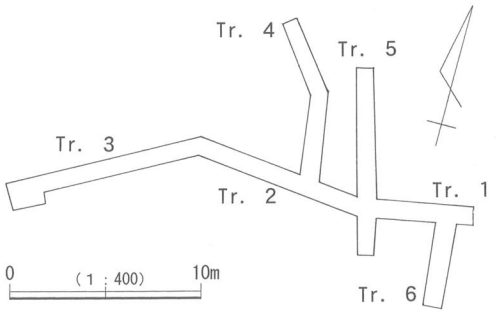
尾根上に幅１ｍの試掘溝を６本設定し、地山まで掘削を進めた。表土下はすぐに地山となった。

３　確認調査の結果（写真25）

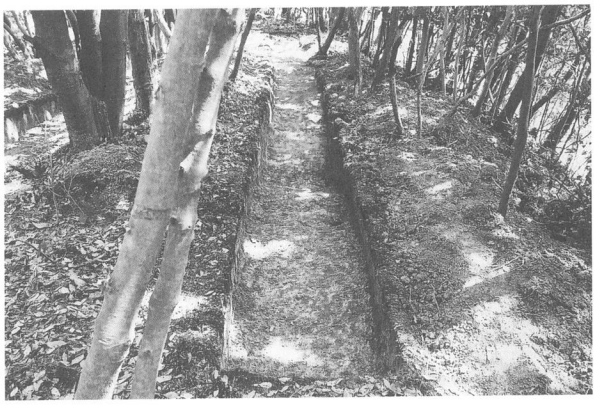
各試掘溝ともに遺構・遺物は確認できなかった。

４　まとめ

確認調査の結果、遺構・遺物ともに出土していないことから、遺跡ではないことが判明した。



第12図　No.13地点試掘溝配置図



22　No.11地点試掘溝の状況①

24　No.12地点試掘溝の状況

23　No.11地点試掘溝の状況②

25　No.13地点試掘溝の状況

第７節　No.21地点

１　位置と現状（第13図）

相良町地頭方の（国）150号線から約200m北側の尾根の先端に位置しており、茶畑として利用されていた。調査前から茶樹の改植が重機により大規模に行われていることが想定できた。

２　確認調査の内容（第14図）

0.7㎥バックフォーにより幅約１mのトレンチを10本掘削し、順次精査を進めた。耕作土は厚く、表面から約0.6mの深さまで耕作が及んでいることが判明した。また、Tr.１・２の中央よりやや東よりで、竪穴住居の可能性が高い柱穴が出土したことから、住居の有無を確認するため、Tr.１・２の東側をつなげるように拡張し、精査を進めた。

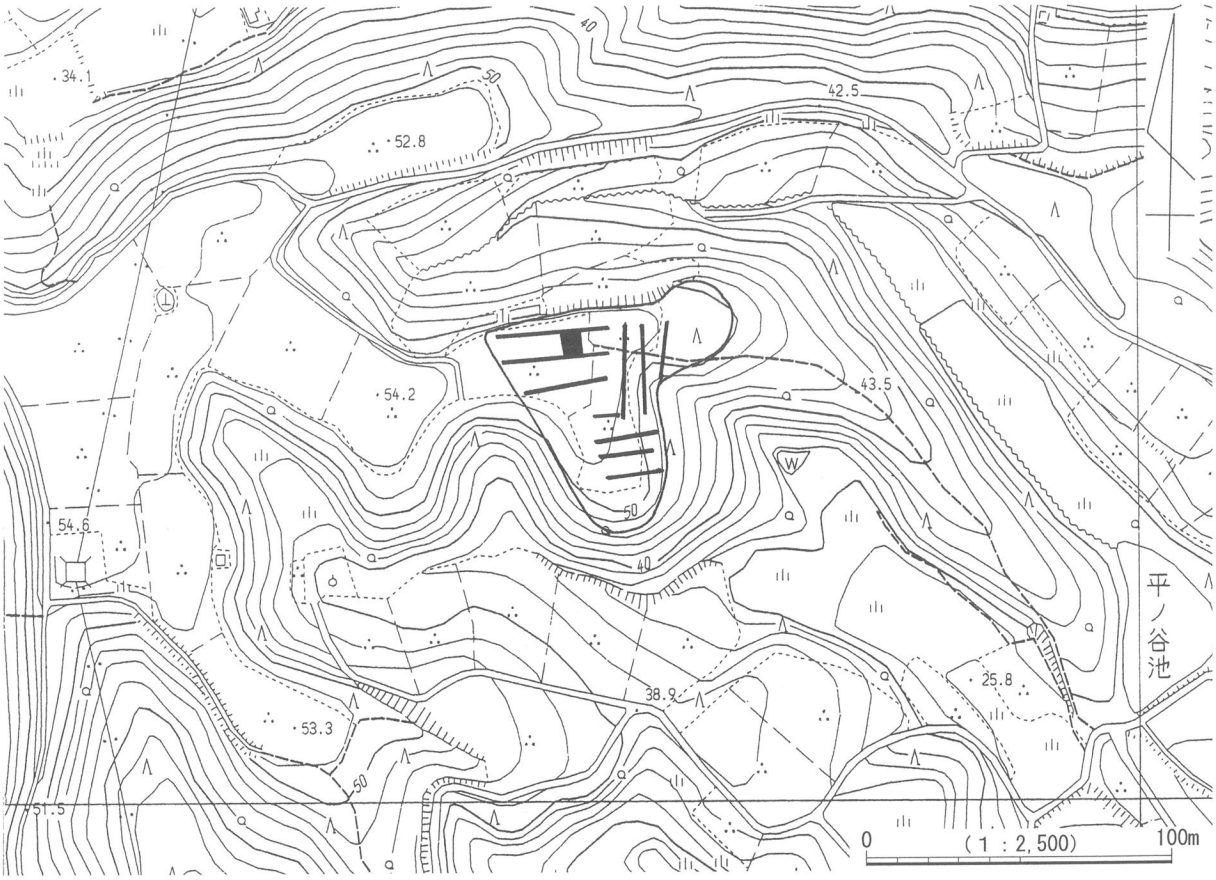
３　確認調査の結果（第14図，写真26・27）

No.21地点では、確認調査対象範囲のうち、北西側（約1,000㎡）で竪穴住居および柱穴を多数確認するとともに、弥生土器を採集した。一方、東側・南東側部分では予想以上に改植が深くまで及んでおり、遺構は確認できなかった。

なお、試掘溝出土遺物に関しては、第Ⅲ章第２節にて報告する。

４　まとめ

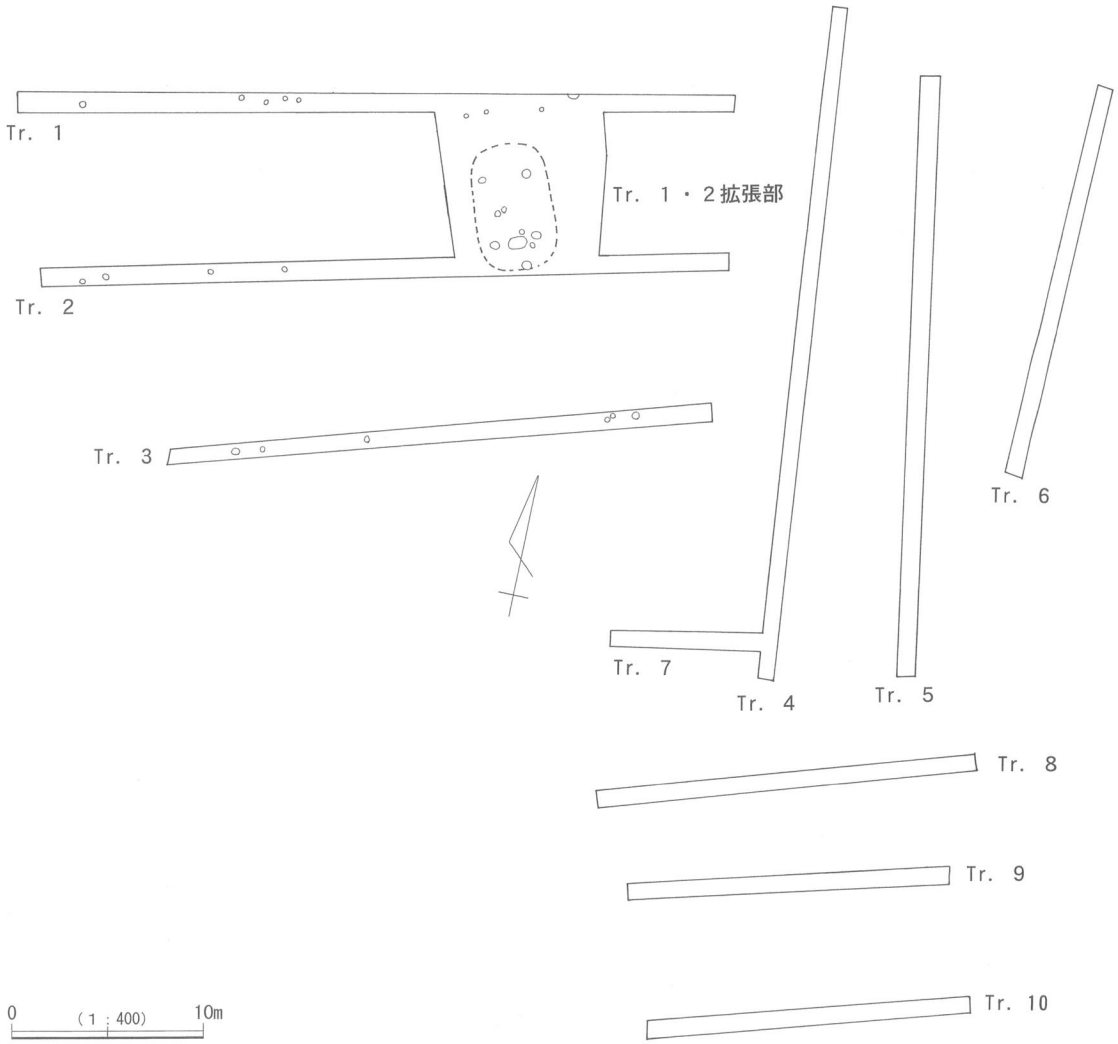
No.21地点では、北西部分で竪穴住居１軒以上、柱穴多数が出土し、弥生土器が出土したことにより遺



第13図　No.21地点の調査対象範囲と試掘溝配置図

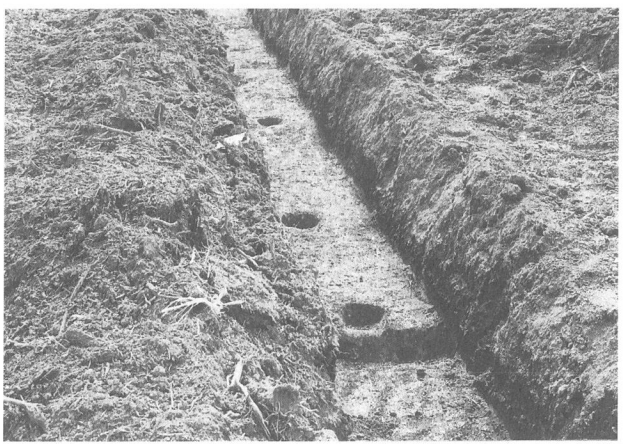
跡であることが確認できた。一方、東側および南側は茶樹の改植が北西側の遺構面よりも深くまで及んでおり、遺構は確認できなかった。

したがって、北西部分（1,100㎡）のみ本調査の対象となった（第Ⅲ章第２節参照）。なお、確認調査後、静岡県教育委員会文化課と相良町教育委員会の協議により、「蒲ヶ谷原（かばがやはら）遺跡」と命名された。



第14図　No.21地点試掘溝配置図

26　No.21地点試掘溝内遺構検出状況①



27　No.21地点試掘溝内遺構検出状況②

第８節　№22地点

１　位置と現状（第15図）

№22地点は、(国) 150号線の北側約100mの微高地上に位置している。標高26mの微高地上に、平坦面が広がっている。茶畑として利用されていた。

２　確認調査の内容（第16図）

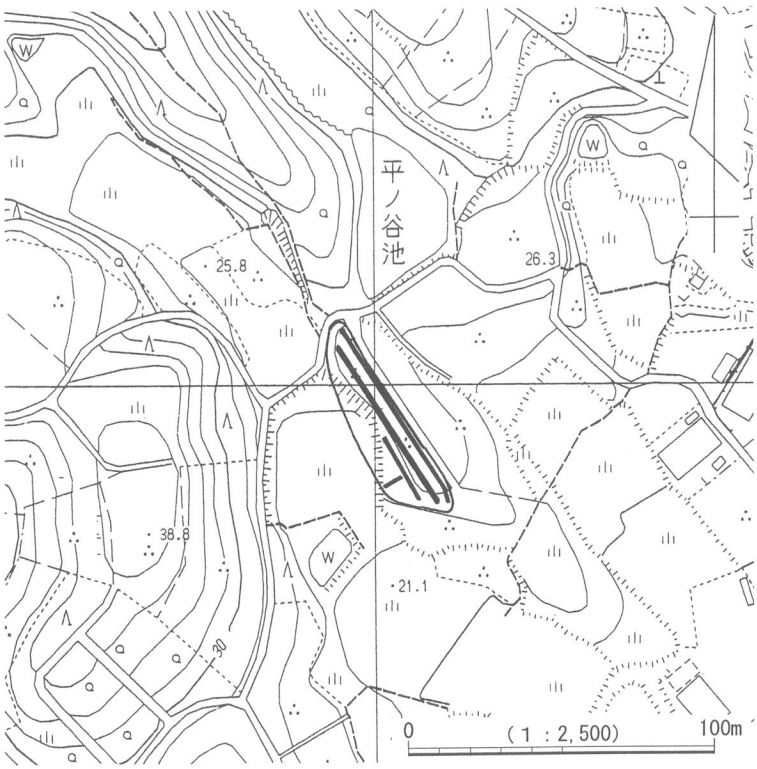
0.7㎥バックフォーにより幅約１mの試掘溝を５m間隔で設定し、表土（耕作土）を掘削する。耕作土を掘削すると、地表面より１m以上重機による耕作が進んでいることが判明した。

３　確認調査の結果

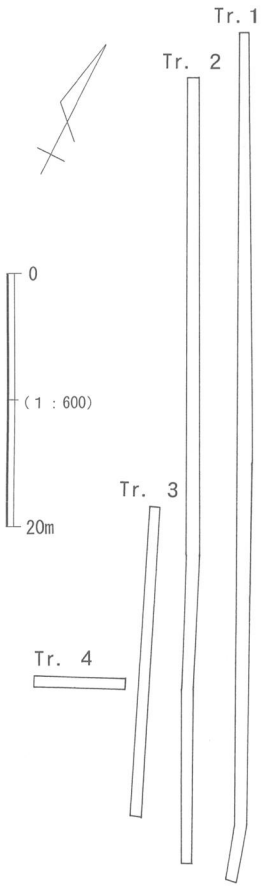
地元住民の方から確認調査中に、以前はもっと標高が高く、地表面に凹凸があったが、昭和40年代に重機により茶樹の改植を進めるとともに、地面をならし平坦にしたとのご教示を得た。この指摘と、確認調査の結果がほぼ一致することから、遺構は存在していた可能性はあるが既に破壊されたと判断した。なお、試掘溝の改植土中より土師器小片と陶磁器小片が出土した。小片のため図示することはできず、また器種や時期も不明である。

４　まとめ

№22地点は、土器片は出土したものの、茶樹の改植による攪乱が著しく、遺構は確認できなかった。しかし、遺物が出土していることから、本来は奈良・平安時代以降に形成された遺跡であった可能性が高い。



第15図　№22地点の調査対象範囲と試掘溝配置図



第16図　№22地点試掘溝配置図

第Ⅲ章　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の調査成果

第１節　遺跡の位置と地理的・歴史的環境

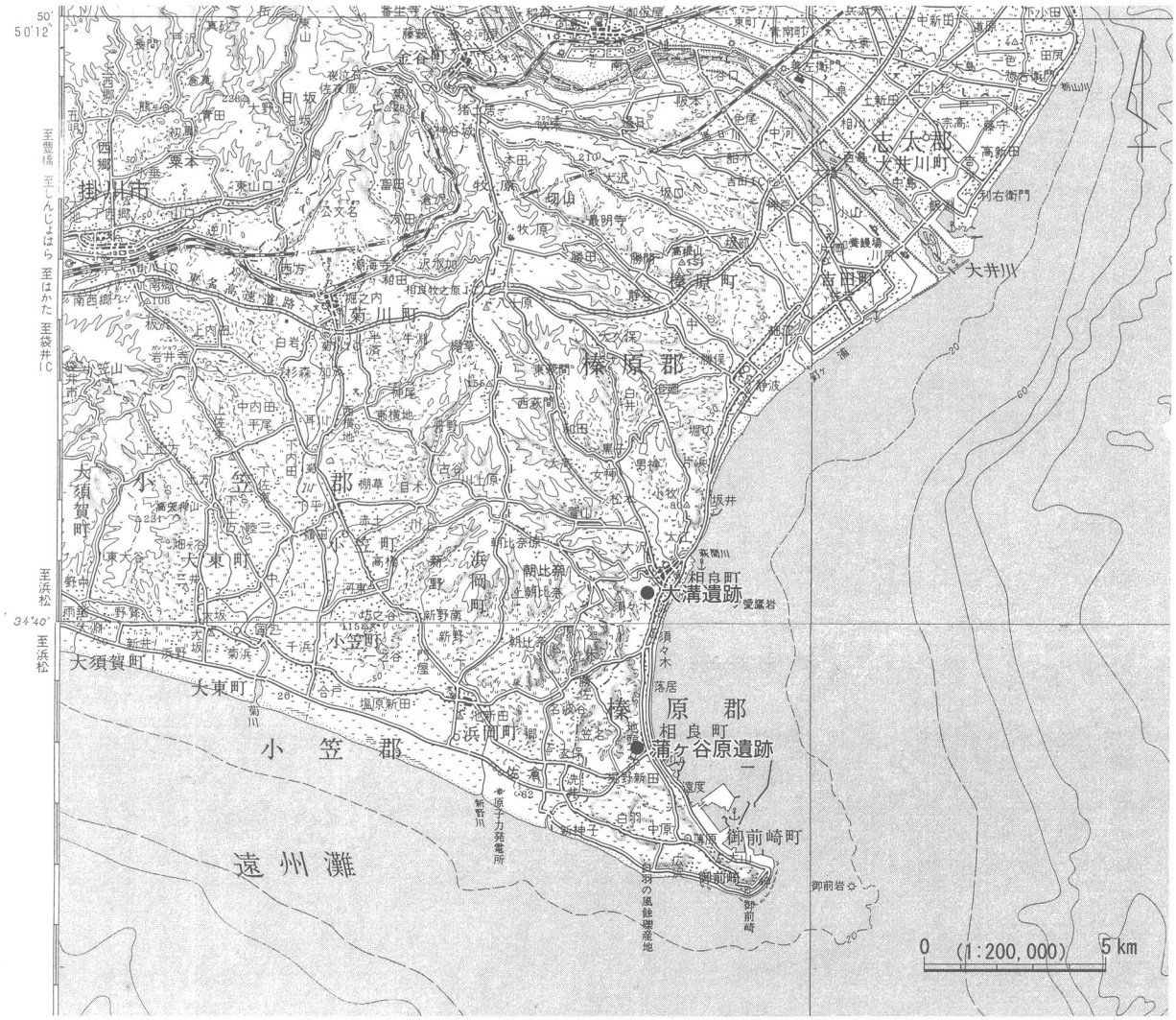
１　地理的環境（第17～20図）

静岡県の中西部に位置する榛原郡相良町は、南西側を御前崎市（旧小笠郡浜岡町，榛原郡御前崎町）、北東側を榛原郡榛原町、北西側を小笠郡小笠町、北側を小笠郡菊川町に接している。

相良町は牧之原台地とその間を流れる萩間川、白井川、菅ヶ谷川などが開析・形成した平地部、駿河湾に面する海岸沿の低地で構成される。

蒲ヶ谷原遺跡は、牧之原台地から南に向かって熊手状に派生する小尾根の先端の平坦地に立地しており、筬川が形成した狭い平地部分を見下ろすことができるが、直接駿河湾を望むことはできない。

第17図　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の位置①

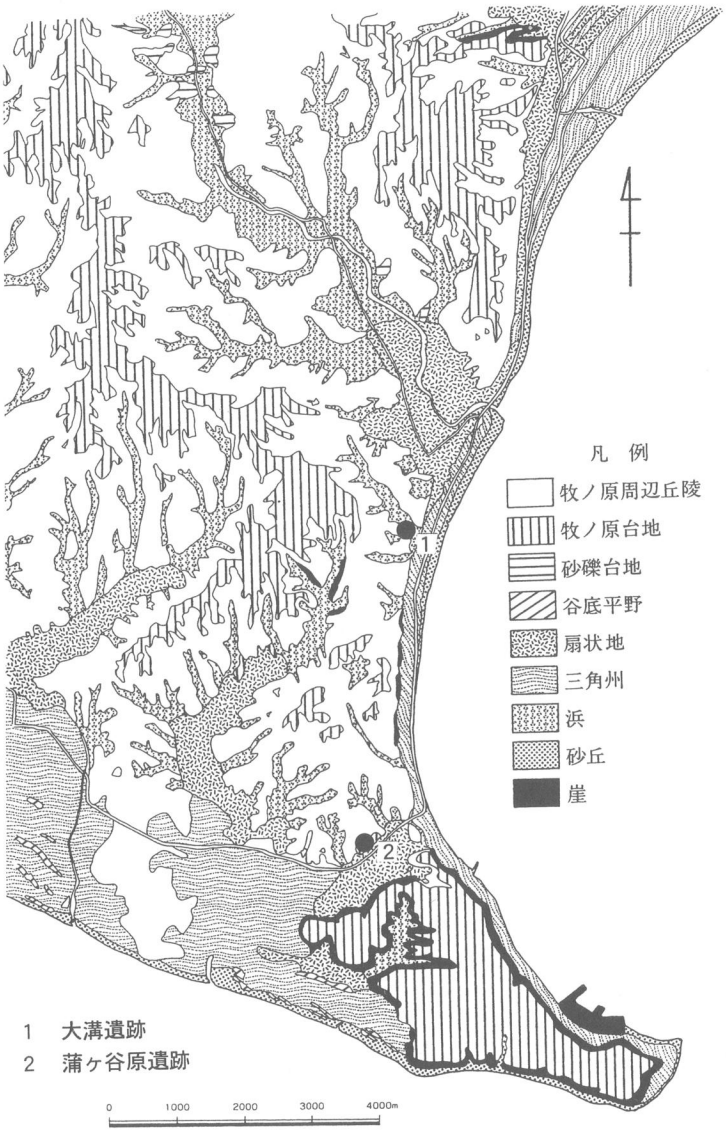


第18図　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の位置②（国土地理院発行１：200,000地勢図「静岡」「御前崎」を複写して加筆。）

地形からみると、筬川が現在（第20図）とは異なり、一時的に相良町堀野新田付近で東側に向かって屈曲し、牧之原台地と御前崎の台地の間（扇状地）を東側に向かって流れ、御前崎の北東側で駿河湾に注いでいた可能性が高い。

このように推測すると、蒲ヶ谷原遺跡は、この旧筬川とそれが形成した平地を臨む、非常に立地条件のよい場所に形成されたといえる。現在は茶畑として開墾が進んでいる。

一方、大溝遺跡は相良町須々木の海岸沿いの丘陵と、その内側の丘陵との間の谷の緩斜面に立地する。現在は水田や畑地として利用が進んでいる。



第19図　相良町付近の地質分類図（相良町1993に加筆）

2　歴史的環境（第20図，第３表）

(1)　旧石器時代

静岡県中西部では、旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていない。大井川中流の本川根町ヌタブラ遺跡などで石器が出土している（本川根町教委2003）に過ぎない。

(2)　縄文時代

縄文時代の遺跡は、相良町内では約50遺跡確認されており、萩間川と白井川の両岸の尾根上に多く分布している。相良町和田に所在する峯ノ段遺跡は、縄文土器のほか、石棒、石鏃が出土している（相良町1993）。同じく和田に所在する御林遺跡では打製石鏃のほか磨製石鏃も出土している（相良町1993）。蒲ヶ谷原遺跡(88)が所在する筬川近くの、相良町地頭方地区では法恩庵坂遺跡(102)や鎮守山遺跡(101)で縄文土器や石器が採集されており（相良町1993）、蒲ヶ谷原遺跡と何らかの関係があるものと想定できる。この他、男神東代の男神遺跡（19）では石剣が出土している（相良町1993）。

また、隣接する御前崎市には、多くの石器や縄文土器が出土した星ノ糞遺跡（115，旧御前崎町）や、筬川を望む丘陵上に大陣原遺跡（140，旧浜岡町）、山田遺跡（142，旧浜岡町）が位置する（浜岡町教委1999・2000）。星ノ糞遺跡では、縄文時代前期に位置づけられる土器が主体として出土し、東海系の清水ノ上Ⅱ式（前期）ほか、背川下層Ⅰ式（前期）、関西系の北白川下層Ⅱ式（前期）、諸磯A・B式土器（前期）が出土している。これ以外に、多量の礫石錘、スクレイパーほか、石鏃や石斧が出土している（相良町1993）。また、大陣原遺跡では黒耀石の石鏃や石核などが多数出土している。山田遺跡では、磨製石斧が出土している（浜岡町教委1999）。

第20図　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡周辺の遺跡

第３表　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡周辺の遺跡地名表

1	法京原遺跡	39	柳田古墳群	76	波津ノ谷遺跡	113	道田遺跡
2	城ノ原遺跡	40	柳田遺跡	77	小堤Ⅱ遺跡	114	石原遺跡
3	滝堺新城	41	庵ノ下遺跡	78	浜田遺跡	115	星ノ糞遺跡
4	向原遺跡	42	海老江横穴群	79	波津陣屋	116	上ノ城遺跡
5	柄沢４号墳	43	雨垂Ⅰ遺跡	80	御殿所遺跡	117	宮下遺跡
6	柄沢原遺跡	44	霊松庵	81	浜山遺跡	118	白羽神社境内
7	柄沢原古墳群	45	平田寺宝塔	82	**大溝遺跡**(No.８地点)	119	新谷遺跡
8	海老江坂遺跡	46	雨垂Ⅱ遺跡	83	No.９地点	120	藤ヶ谷館
9	江沢Ⅲ遺跡	47	江湖田遺跡	84	No.10地点	121	長月院
10	上原遺跡	48	堀ノ内遺跡	85	No.11地点	122	小泉遺跡
11	滝堺古城	49	徳村Ⅱ遺跡	86	No.12地点	123	朝比奈氏墓地
12	滝坂遺跡	50	谷川遺跡	87	No.13地点	124	南谷遺跡
13	水神谷古墳群	51	萬松庵	88	**蒲ヶ谷原遺跡**(No.21地点)	125	朝比奈城山
14	前田遺跡	52	徳村Ⅰ遺跡	89	No.22地点	126	比木城山遺跡
15	百所遺跡	53	若王子社遺跡	90	向田古墳	127	比木殿ノ山城
16	施餓鬼代遺跡	54	大沢経塚	91	上ノ山古墳	128	大兼遺跡
17	細田谷古墳群	55	寺下古墳群	92	須々木遺跡	129	薩田谷遺跡
18	東代Ⅰ遺跡	56	寺下遺跡	93	雨ヶ谷坂遺跡	130	中田西ノ谷横穴群
19	男神遺跡	57	鳥居前遺跡	94	地代遺跡	131	中田西ノ谷遺跡
20	鋳物谷遺跡	58	大原遺跡	95	上ノ城遺跡	132	中田東ノ谷遺跡
21	東代Ⅱ遺跡	59	中島遺跡	96	一ツ塚遺跡	133	宮木ヶ谷横穴群
22	神代遺跡	60	相良館	97	西ノ谷口遺跡	134	おっこし横穴群
23	石灰山山麓遺跡	61	久保屋敷	98	釣月院経塚	135	薩田谷口遺跡
24	沢木遺跡	62	三ヶ月堀遺跡	99	万九郎海戸遺跡	136	深見横穴群
25	沖代遺跡	63	相良城	100	釣月院本堂遺跡	137	郷古墳群
26	沖代Ⅱ遺跡	64	市場遺跡	101	鎮守山遺跡	138	穴口横穴群
27	松本古墳	65	本多氏居館	102	法恩庵坂遺跡	139	比木勝佐墳墓
28	西山寺	66	園横穴墓群	103	西ノ谷遺跡	140	大陣原遺跡
29	木斛塚古墳	67	花ノ木遺跡	104	蒲ヶ谷古墳	141	大陣原経塚
30	大通遺跡	68	山本遺跡	105	元宮遺跡	142	山田遺跡
31	宮代遺跡	69	山本古墳群	106	馬背口遺跡	143	小堤谷遺跡
32	西原古墳群	70	佐美田遺跡	107	北沢遺跡	144	名波横穴群
33	相沢古墳	71	馬見塚下Ⅰ遺跡	108	遠渡坂の上遺跡	145	梶ヶ谷遺跡
34	西ノ谷遺跡	72	馬見塚横穴群	109	片瀬東遺跡	146	梶ヶ谷横穴群
35	管ヶ谷小城	73	馬見塚下Ⅱ遺跡	110	産兵山遺跡	147	平田経塚
36	東中居館	74	小堤Ⅰ遺跡	111	神子八幡遺跡	148	天ノ川遺跡(No.６地点)
37	応安寺遺跡	75	小堤山横穴墓群	112	牛飼遺跡	149	川上原遺跡

(3)　弥生時代

弥生時代の遺跡は少なく、約15箇所で遺跡が確認されている。縄文時代の遺跡同様萩間川流域と白井川流域の丘陵上で遺物が採集されているほか、地頭方の丘陵上で遺物が採集されている。本格的に調査された遺跡はなく、相良町内の弥生時代の様相は明らかではない。蒲ヶ谷原遺跡の近くでは、地頭方の法恩庵坂遺跡（102）や堀野新田の元宮遺跡（105）で弥生土器が採集されている（相良町1993)。

近隣の市町村でみると、蒲ヶ谷原遺跡が所在する筬川流域に位置する御前崎市（旧浜岡町）の山田遺跡（142）で弥生時代後期の土器や太形蛤刃石斧などが出土している。この他、筬川流域には中田遺跡、中田西ノ谷遺跡（131)、中田東ノ谷遺跡（132）などで弥生土器が採集されている（浜岡町教委1999)。さらに、やや離れるが隣接する小笠町の嶺田遺跡は、弥生時代中期前半の標識遺跡となり、菊川町の白岩遺跡は、弥生時代中期後半の標識遺跡となっている。

(4)　古墳時代

古墳時代前期の遺跡は確認されていない。中期の遺跡としては現在調査が行われている相良町大沢地区の天ノ川遺跡（148）があり、竪穴住居数軒と、円形周溝墓の可能性ある遺構が確認され、多くの土師器や石製模造品、建築材が出土している(註２，相良町教委2004)。また、天ノ川遺跡に近接する花ノ木遺跡（67）では、古墳時代後期の掘立柱建物５棟をはじめ、溝・土坑などが確認され、須恵器・土師器、弓や剣などの木製品のほか木製杭や建築部材が出土している（相良町教委1998)。

古墳時代後期になると、横穴式石室を埋葬施設とする古墳や、丘陵斜面に開削された横穴墓（おうけつぼ）が多数確認されている。古墳時代後期の遠江地域は、太田川以西に横穴式石室が多く、それ以東に横穴墓が多いことが確認されている。しかし、相良町では横穴墓と横穴式石室が混在しており、掛川市や菊川町などの様相と異なる。相良町内では稲荷山古墳、寺下古墳群（55）、山本古墳群（69）、園横穴墓群（66）、小堤山横穴墓群（75）、大寄横穴墓群などが後期後半から終末期（７世紀）にかけて築造される（相良町2000）。

(5) 古代

律令期の相良町は榛原郡大江郷、相良郷が置かれており、それぞれ十数箇村で構成されていたと考えられている（相良町1993）。

この時期の遺跡をみると、花ノ木遺跡（67）では、須恵器、灰釉陶器のほか、白磁も確認され、近接地に集落の存在が推定できる（相良町教委1998）。天ノ川遺跡（148）では、掘立柱建物をはじめ、須恵器、土師器、土馬・陶馬、灰釉陶器が出土しており、花ノ木遺跡と関連する集落遺跡である（註３）。墨書土器や陶馬などが出土していることを考慮すると、郡衙を補佐する機能を有する集落の可能性がある。

また、相良町では白井濁沢地区に所在する西側古窯跡や大寄地区に所在する窯谷古窯跡、蛭ヶ谷地区に所在する蛭ヶ谷古窯跡などで灰釉陶器や山茶碗が焼成され、散在かつ小規模ながらも陶器生産を営んでいたことが明らかとなっている。また、最近調査された金山遺跡では、灰釉陶器、山茶碗が出土し、近隣でそれらが生産されたことが判明している（相良町教委2001）。

さらに、近接する御前崎市山田遺跡（142）では灰釉陶器が出土しており、蒲ヶ谷原遺跡の近隣にこの時期の遺跡が所在していたことが判明する（浜岡町教委1999）。

なお、相良町大江の平田寺（45）には聖武天皇の詔勅が所蔵されている。この勅書は本来大安寺にあったものが中世における資財の散逸に伴い、大安寺と関係のあった平田寺に移されたと考えられている（相良町1993）。

(6) 中世

平安時代以降相良郷・大沢郷が相良荘となり、また相良牧も成立している。相良郷・大沢郷は1112（天永３）年に相良周頼の所領となった。相良氏は、相良荘を寄進し、領家を今出川太政大臣家、本所を蓮華王院とし、相良荘園の実質支配者となった。

この時期に、遺跡数が増加し、和田の峯ノ段墳墓、室沢遺跡、金山遺跡などが形成されている。大江の平田寺（45）には宝塔が残存している（相良町教委2001）。

蒲ヶ谷原遺跡の周辺では、筬川流域の御前崎市（旧浜岡町）の比木城山遺跡（126，城館）や比木殿ノ山城（殿山）遺跡（127）などが確認されている。比木城山遺跡では、薬研堀が調査され、青磁や常滑産の大甕などが出土している（浜岡町教委2000）。

(7) 近世

江戸時代にはいると、相良の領主は変転を重ね、18世紀に田沼意次が相良城（63）を築城し、城主であったことは、有名である（相良町1993）。

(8) 近代

明治５年に徳川家旗本、村上正局が発見した相良油田は、太平洋岸唯一の油田である。明治６年に石坂周造が菅ヶ谷で開坑し、採油された。日本の石油採集の歴史を知る上で欠かすことのできない近代化遺産である（相良町1993）。

第２節　蒲ヶ谷原遺跡

１　概要と基本土層

(1)　概要

立地　蒲ヶ谷原遺跡は、相良町南西部、相良町地頭方にある牧之原台地から熊手状に延びる台地小尾根の先端部上に位置している。駿河湾の海岸線からはやや奥まった位置に存在しており、海沿いの尾根を越えた丘陵上に立地している。(国) 150号線が海岸線に沿って南下した後、御前崎町方面と浜岡町方面に分岐する相良町地頭方から南南西に約0.8km、筬川が形成した狭い平地部に向かって牧之原台地から伸延する尾根の先端、標高約52～53m付近の平坦地に位置している（第21図)。

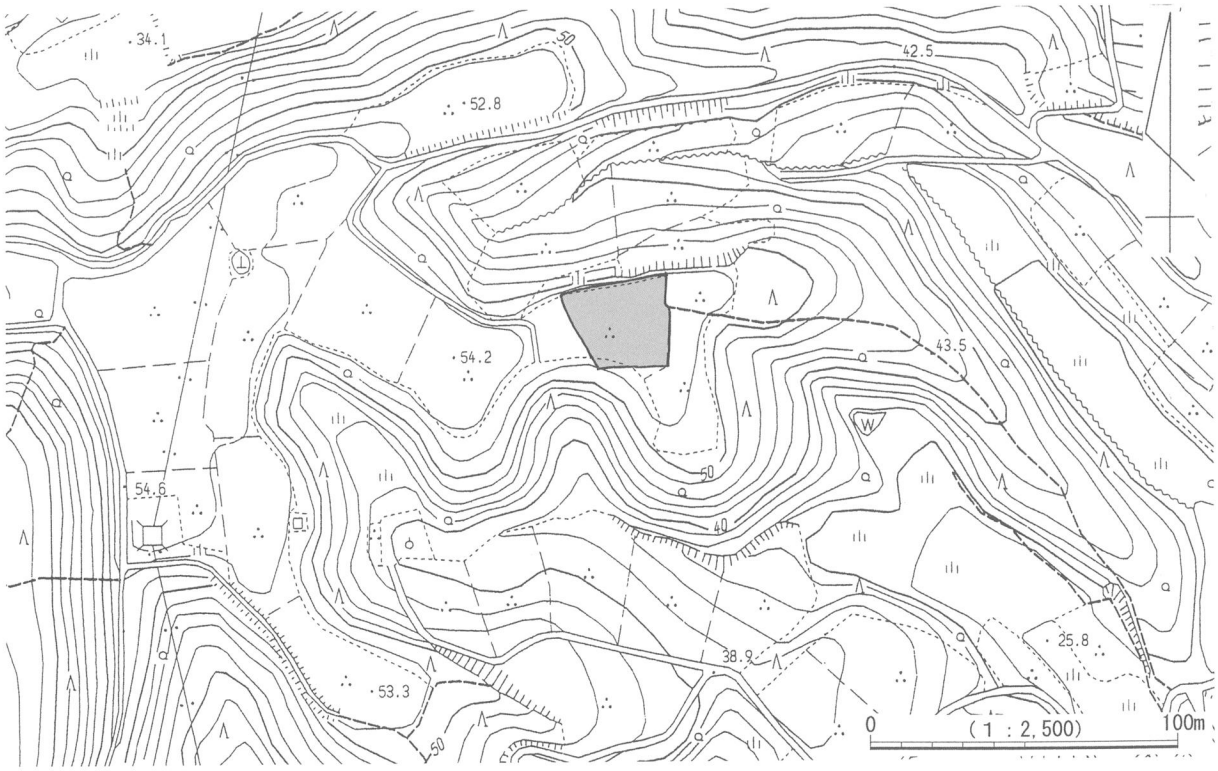
歴史的環境でも記述したように、地頭方で西に向かって屈曲する (国) 150号線に沿うように、南北側の尾根上には縄文時代の遺跡が営まれている。したがって、この時期には筬川は相良町と旧御前崎町の間を貫けて、東側に向かって流れ、駿河湾に注いでいた可能性がある。その推測が正しければ、蒲ヶ谷原遺跡は、筬川を見下ろすことができる丘陵上に営まれていた遺跡とすることができる。

概要　蒲ヶ谷原遺跡では確実に縄文時代に位置づけられる遺構は確認できない。遺物は縄文土器（粕畑式土器）２点のほか、深鉢底部片１点、石棒１点が出土している。

一方、弥生時代の遺構は竪穴住居18軒、掘立柱建物８棟、土坑４基、柱穴多数がある。竪穴住居は炉を有する平面楕円形の住居である。掘立柱建物は、１×１間、１×２間、１×３間の小規模な建物である。遺物は、弥生土器（壺，甕，深鉢，鉢，高杯）および剥片石器、叩石３点、石鏃１点が出土している。ただし、叩石・石鏃は縄文時代に帰属する可能性もある。

(2)　基本土層

蒲ヶ谷原遺跡の基本土層は、第22図のように茶樹改植による耕作土を第Ⅰ層、遺物包含層の第Ⅱ層、遺構が掘り込まれた第Ⅲ層（地山）に区分した。



第21図　蒲ヶ谷原遺跡の本調査対象範囲

2　縄文時代

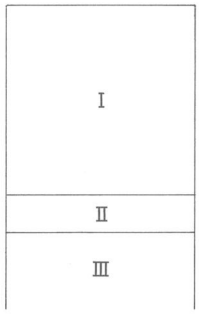
(1)　遺構

縄文時代の遺構は確認されていない。

(2)　遺構外出土遺物（第23図，第８・９表，図版14）

縄文土器　縄文土器（７）は、縄文早期後半に位置づけられる粕畑式土器の深鉢である（註４）。７－１・２は同一の風倒木痕から出土した。胎土・色調が同一であることから同一個体である可能性が高い。胎土には繊維が含まれている。小片のため口径は不明であるが、口縁部は波状であり、先端は台形を呈する。外面には刺突列点文が施される。口唇部は押圧の刻み目が施される。波状突起の内面に環状突起が取り付けられて、その下位には条痕調整が施される。

縄文土器（８）は深鉢の底部片である。底面には網代痕が残存しており、内面にはミガキが施されている。底部径5.7cmをはかる。

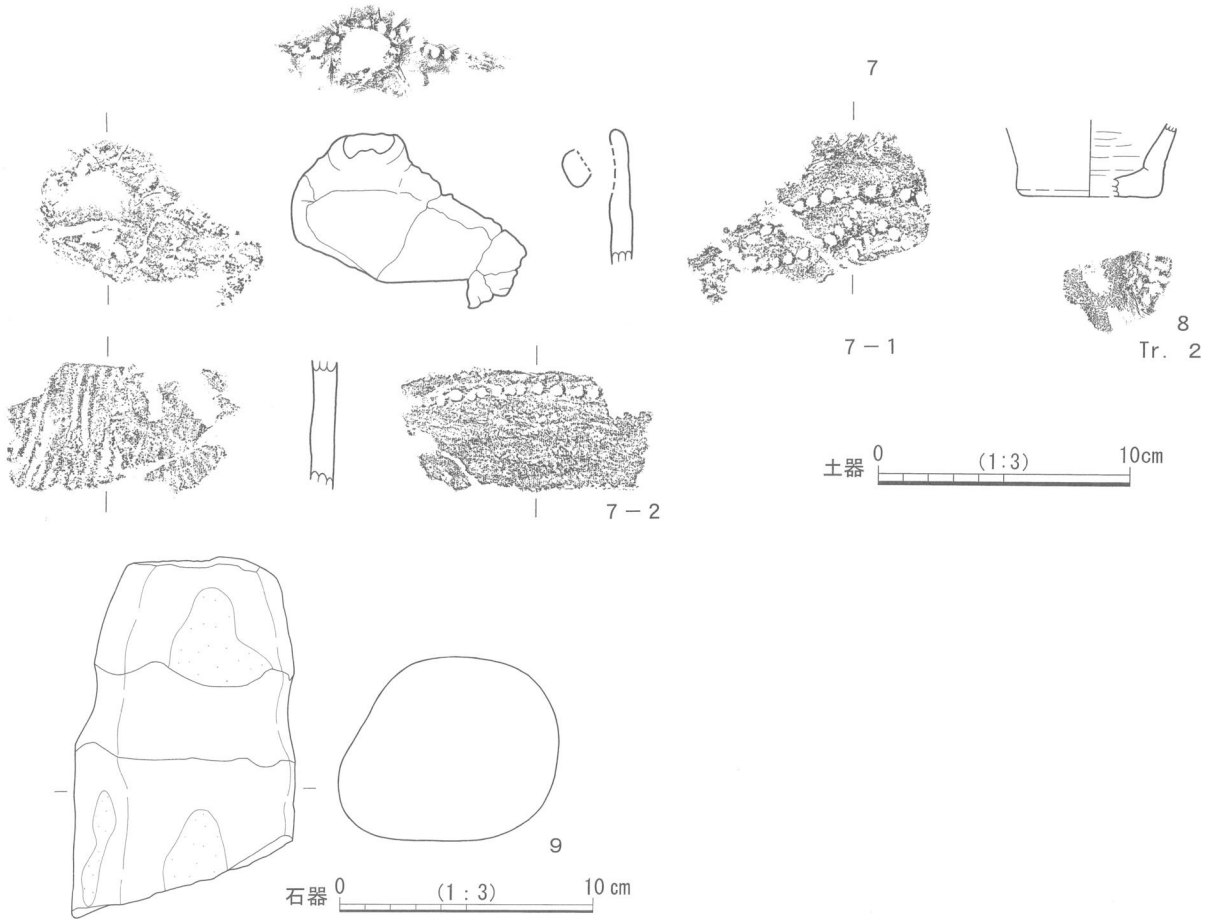


Ⅰ　暗褐色砂質シルト‥‥耕作土
Ⅱ　暗褐色砂質シルト‥‥包含層
Ⅲ　赤褐色砂質シルト‥‥地山

第22図　蒲ヶ谷原遺跡基本土層図

石棒　石棒（９）は、中粒砂岩製(註５）であり、中程から欠損している。先端は男根状を呈しており、頭部と括れ部は研磨により形成されている。身には一部自然面が残存する。残存長14.3cm、頭部長4.5cm、頭部直径7.8cm、括れ部長約3.0cm、括れ部直径7.5cm、身の残存長6.8cm、身の直径8.6cm、重量1440ｇをはかる。この石棒は大型であることから、縄文時代中期以降に位置づけることができよう。

なお、先端には敲打の痕跡が看取できることから、叩石として再利用された可能性が高い。



第23図　蒲ヶ谷原遺跡出土縄文土器・石棒実測図

3　弥生時代

竪穴住居18軒、掘立柱建物８棟、土坑４基、柱穴多数を検出するとともに、弥生土器、剥片石器、叩石、石鏃が出土した（第24図，巻頭図版１，図版１・２）。

座標は日本測地系に準拠

17.

第24図　蒲ヶ谷原遺跡全体図

(1) 竪穴住居

竪穴住居は18軒出土した。残存状況は良好ではなく、柱穴のみから竪穴住居と推測したものも多い。調査区北西の竪穴住居より順に報告する。

①１号竪穴住居（SB01，第24・26・27図，第６表，図版３）

概要　SB01～SB03が重複している。SB02の壁溝（へきこう）をSB01が破壊していることから、SB02→SB01の順で建てられたことが判明する。SB03との切り合い関係は確認できず、築造順序は不明である。

SB01は、Ｂ１・Ｂ２グリッドに位置しており、住居の西側部分は調査区外に伸びている。

構造　住居の平面形は、壁溝の形状から楕円形あるいは隅丸長方（小判）形である可能性が高く、後述する壁溝の残存するSB07・08・15が楕円形を呈することから、これを根拠に楕円形である可能性が高いと想定する(註６)。住居の長軸は東西に向ける可能性が高い。住居の規模は南北4.2m以上、東西3.1m以上をはかる。主柱穴（しゅちゅうけつ）は二基のみ確認でき、柱穴の間隔（柱穴中央の間隔，以下同じ）は南北で3.1m、東西は1.4m以上をはかる。柱穴は不整形な円形であり、直径約0.3、0.35mをはかる。壁溝は最大幅0.25m、深さ0.1mをはかる。

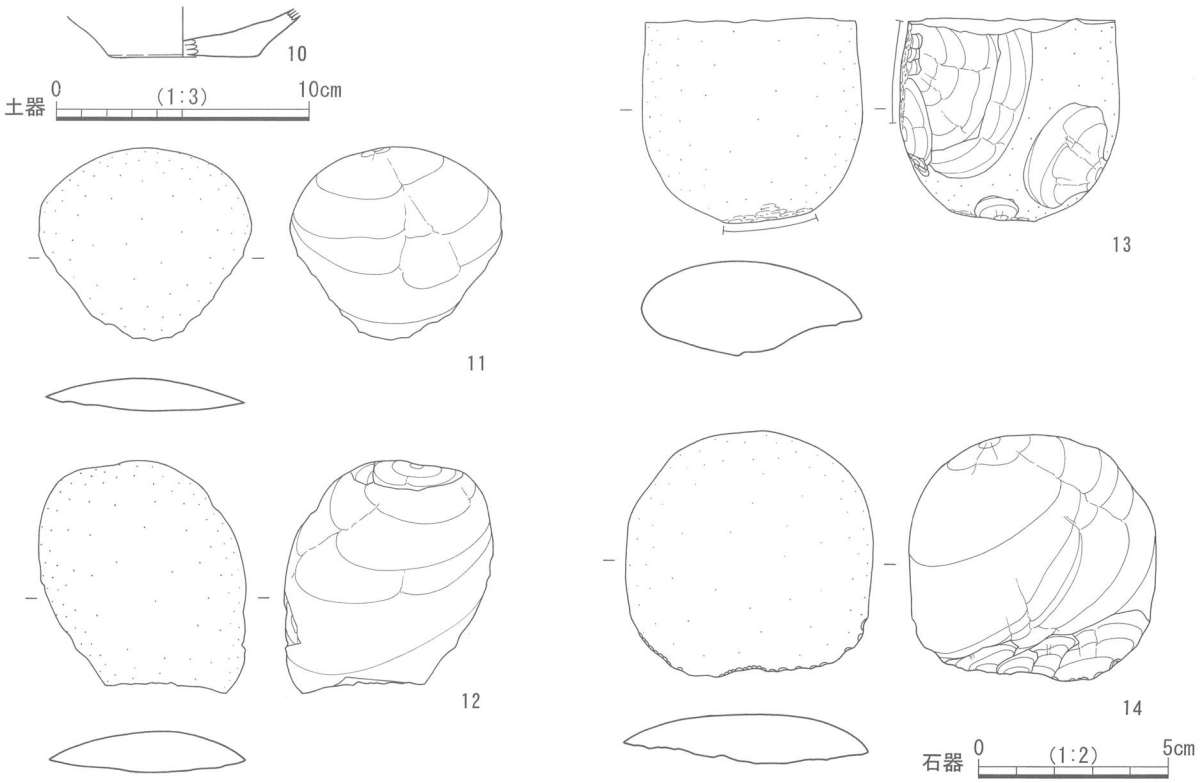
出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定できない。蒲ヶ谷原遺跡では、弥生時代中期後半～後期前半の遺物しか出土していないことから、SB01はその期間内の一時期に比定できる可能性が高い（註７）。

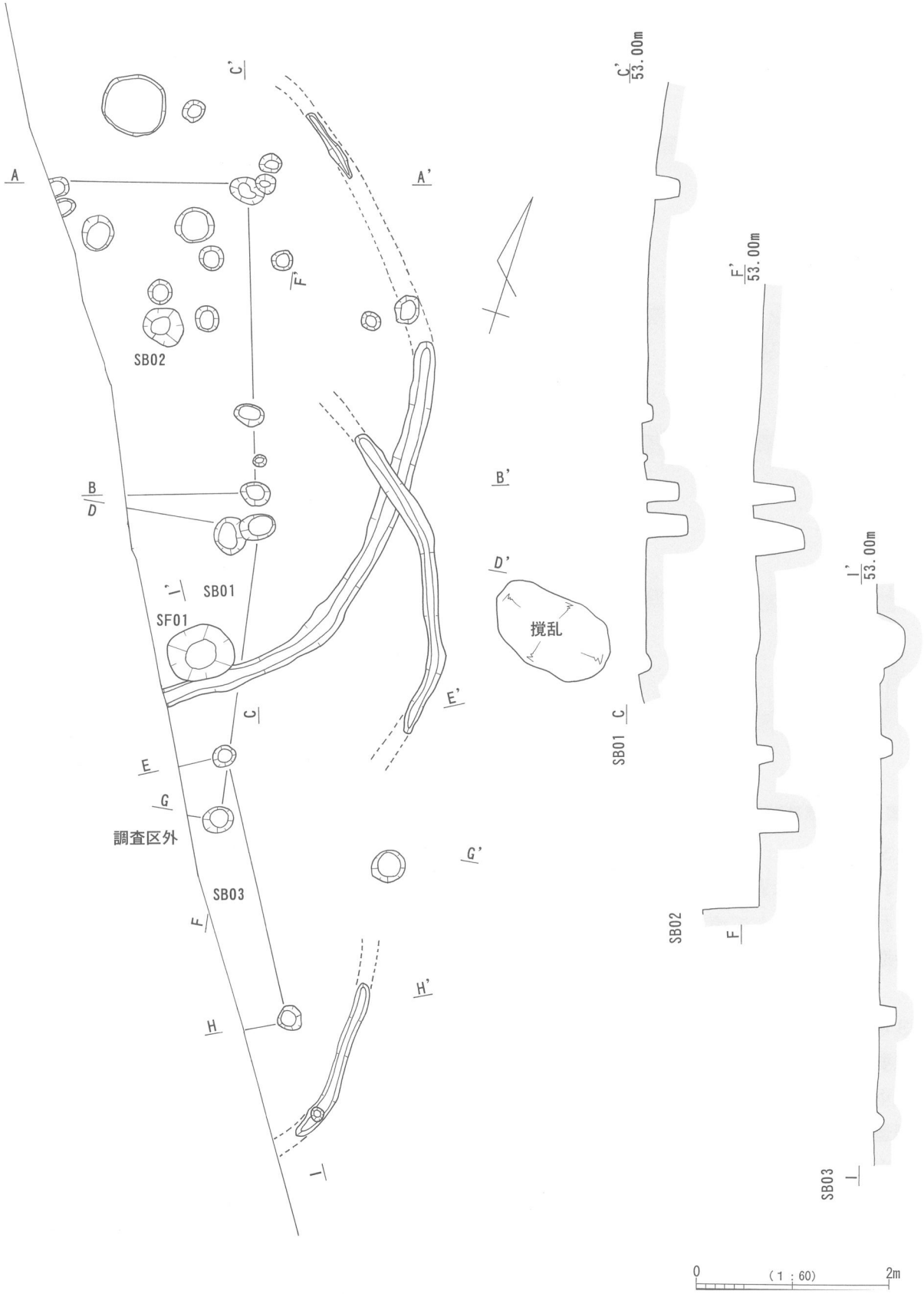
②２号竪穴住居（SB02，第24～27図，第６・８・９表，図版３・14・15）

概要　SB02は、Ｂ１・Ｂ２グリッドに位置しており、住居の半分以上が調査区外に伸びている。上述したように、SB01と重複しており、SB02の壁溝がSB01の壁溝で破壊されていることからSB02の方が古いことが判明する。SB03との切り合い関係は不明である。

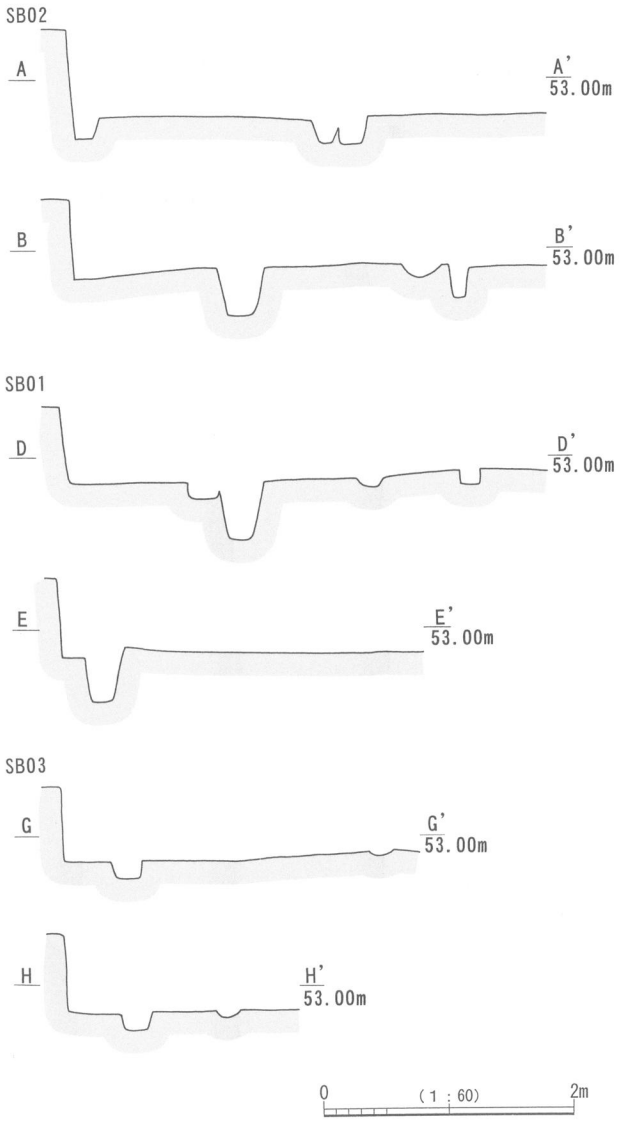
構造　住居の平面形は楕円（小判）形であり、長軸を東西に向ける可能性が高い。規模は壁溝の内側



第25図　蒲ヶ谷原遺跡SB02出土遺物実測図



第26図　蒲ヶ谷原遺跡SB01～03実測図①



第27図　蒲ヶ谷原遺跡SB01～03実測図②

で南北6.0m以上、東西3.6m以上、外側で南北6.2m以上、東西4.0m以上をはかる。主柱穴は二基のみ確認でき、柱の間隔は南北3.2m、東西2.0m以上をはかる。柱穴は不整形な円形であり、直径約0.3、0.35mをはかる。壁溝は東側のみ確認でき、最大幅0.3m、深さ0.15mをはかる。

住居の南東側に貯蔵穴と推測するSF01を検出した。平面形はやや不整形な楕円形であり、長軸長0.65m、短軸幅0.55m、深さ0.3mをはかる。

出土遺物　貯蔵穴と推測するSF01から、弥生土器片１点、剥片石器として利用された可能性が高い剥片４点が出土した（第25図）。

弥生土器　壺底部片（10，註８）は、平底であり、底部径6.0cmをはかる。

石器　剥片石器４点は、平板で厚さ９～25mm程度の厚さに揃えられている。

11は自然礫の一部を打ち欠いたものであり、片面に自然面が残る。平面形は楕円形を呈する。12は一方の短軸側が打ち欠かれ、楕円形を呈し、片面には自然面が残る。13は半楕円形であり、両面には自然面が残る。14は、やや不整形な隅丸方形で、片面に自然面が残る。これらの４点は、長軸5.1～6.5cm、短軸5.4～6.5cm、重量約30～110ｇをはかる。材質は、11～13が砂岩で、14が流紋岩（？）である。なお、13は一部に敲打痕が確認できることから叩石を転用した可能性もある。

これらの４点は剥片石器としたが、４点ともに先端は鋭角で、刃として機能すると想定できることから、石包丁などとして使う石器（未製品？）であった可能性が高い。

時期　時期を特定できる遺物はなく、弥生時代中期後半～後期前半の一時期であると判断できる。

③３号竪穴住居（SB03，第24・26・27図，第６表）

概要　SB03は、Ｂ２・３、Ｃ３グリッドに位置しており、住居の半分以上が調査区外に伸びる。SB01・02と重複しているが、切り合い関係が不明であり、築造の前後関係は不明である。

構造　壁溝の形状から住居の平面形は楕円形で、長軸を東西に向ける可能性が高い。住居の規模は、壁溝の内側で南北4.2m以上、東西1.3m以上をはかる。主柱穴は２基確認でき、柱の間隔は南北2.8mをはかる。柱穴はやや不整形な円形で、約0.25mをはかる。壁溝は南東部分のみ確認でき、最大幅0.15m、深さ0.1mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期の可能性が高い。

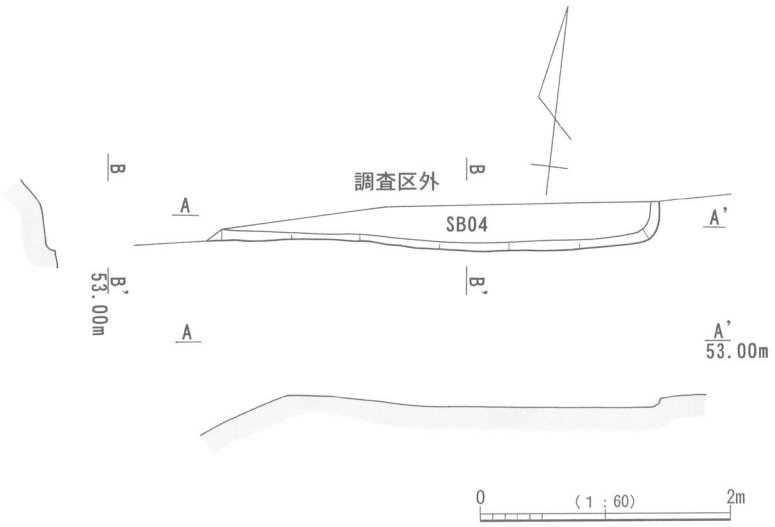
④４号竪穴住居（SB04，第28図，第６表，図版３）

概要　SB04は、Ａ２グリッドに位置しており、SB02からから北東に約５ｍ離れている。南側一部分のみの検出である。SB05と重複するが、切り合い関係がなく、前後関係は不明である。

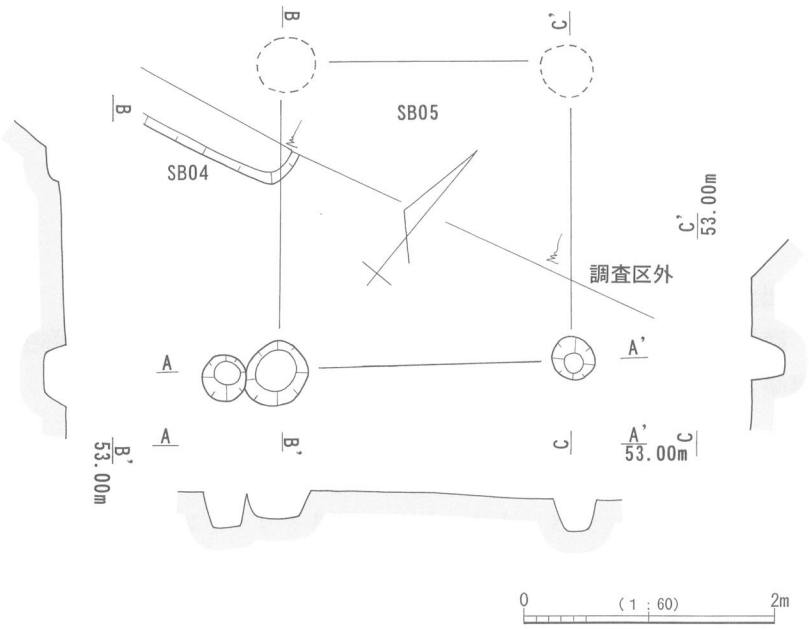
構造　住居の平面形態は、隅丸長方形かあるいは楕円形で、長軸を東西に向ける可能性が高い。柱穴・壁溝は確認できない。規模は東西3.6m以上、南北0.35m以上、住居の深さ0.1mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がないため時期は特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期である可能性が高い。



第28図　蒲ヶ谷原遺跡SB04実測図



第29図　蒲ヶ谷原遺跡SB05実測図

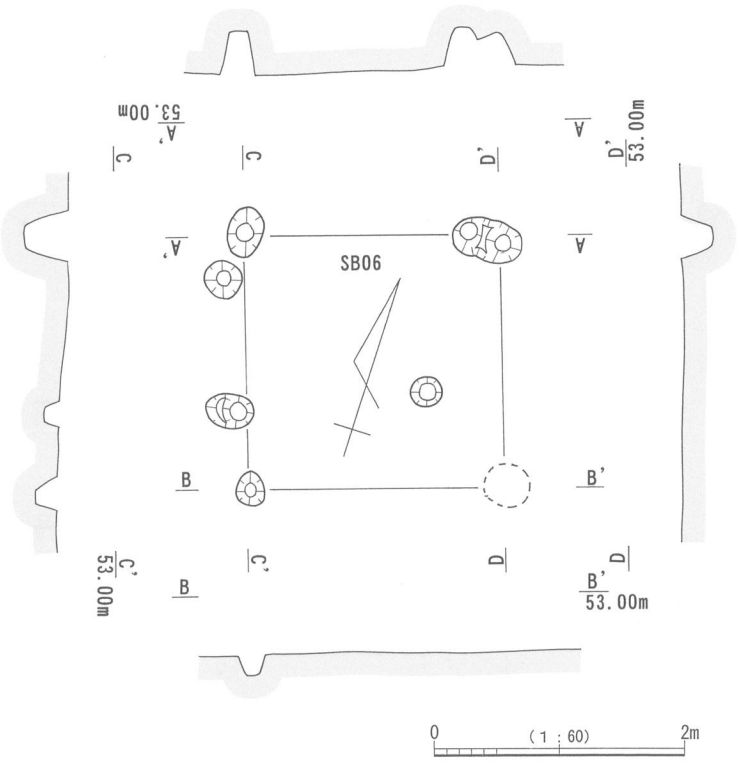
⑤５号竪穴住居（SB05，第29図，第６表，図版３）

概要　SB05は、Ａ２グリッドに位置しており、半分以上が崖面（がけめん）の崩落により流出している。SB04と重複するが、切り合い関係が不明であり、築造の前後関係は不明である。また、SH01とも重複関係にあり、柱穴が切り合い関係にあるが、重複部分が少なく、前後関係を明らかにすることはできなかった。

構造　主柱穴のみの確認である。柱穴の間隔は、Ｂ－Ｂ′断面1.8m以上、Ａ－Ａ′断面2.3mをはかる。Ａ－Ａ′断面の長さが2.3mであることからSB07・08やSB15と比較するとそれらの短辺の長さよりも短い。したがって、SB05はSB08やSB15よりもやや小型であるものの、SB05は長軸を南北にとる楕円形の住居である可能性が高い。柱穴は不整形な円形で、直径0.3、0.5mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に位置づけることができる。



第30図　蒲ヶ谷原遺跡SB06実測図

⑥６号竪穴住居（SB06，第30図，第６表，図版３・４）

概要　SB06は、Ａ３グリッド、SB05から南東約３ｍに位置している。SB07･08と重複関係にあったと想定できるが、切り合い関係が確認できず、前後関係は不明である。

構造　主柱穴のみの確認である。柱間はほぼ同間隔であるが、やや東西が長いことを根拠として、住居は長軸を東西に向ける楕円形住居であった可能性が高い。柱間は東西2.1m、南北2.0ｍをはかり、ほぼ正方形である。柱穴は不整形な円形であり、直径0.25～0.4mをはかる。

なお、主柱穴の周辺から炭化物が多く出土しており、SB06は焼失住居の可能性がある。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がないことから、築造時期は特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に構築された可能性が高い。

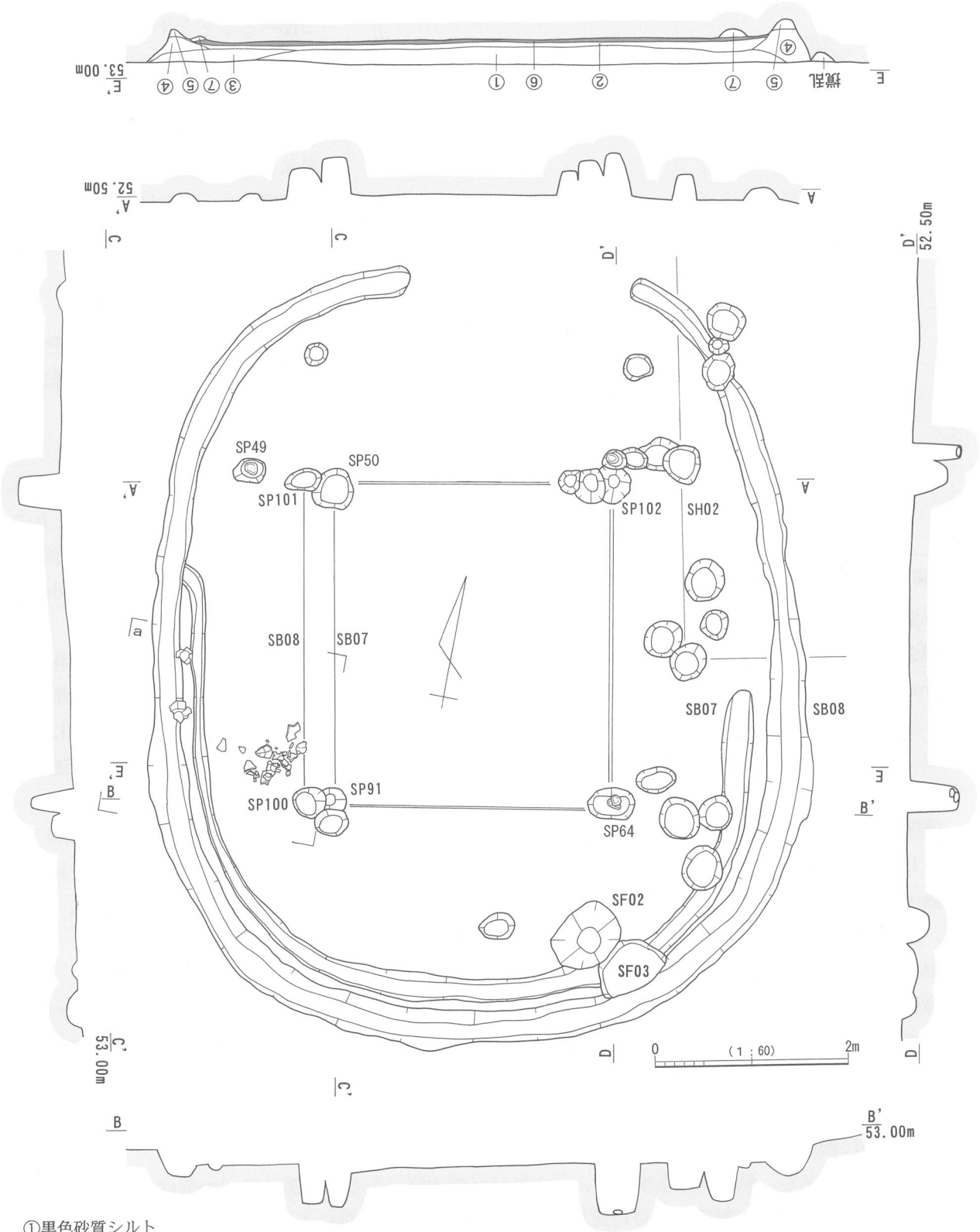
⑦７号竪穴住居（SB07，第31～33図，第６・８・９表，巻頭図版２，図版５・６，15～17）

概要　SB07は、Ａ３・Ａ４、Ｂ３・Ｂ４グリッドに位置している。SB06から東に１ｍ程離れている。SB07とSB08は重複しており、土層の堆積状況（Ｅ－Ｅ′断面）を観察すると、SB07→SB08の順で築造されたことが判明する。また、SH02とも重複するが、SH02がSB08の覆土を掘り込んでいることから、SB08よりSH02が新しく、SB07→SB08→SH02の順で築造されたことが判明する。なお、内側の壁溝とSP50、SP91、SP102、SP64が古く（SB07）、外側の壁溝とSP101、SP100、SP102、SP64が新しい（SB08）。東側の柱穴２基（SP102とSP64）はSB08と共有している。

構造　SB07は壁溝の残存状況から、平面楕円形で、長軸を南北に向ける。規模は壁溝の内側で長軸（南北）7.0m前後、短軸（東西）5.25m以上、外側で長軸7.6m前後、短軸5.7m前後をはかる。主柱穴の柱間は長辺（南北）3.3m、短辺（東西）2.8mをはかる。壁溝は南半分のみの検出であり、幅は東側で幅0.35m、深さ0.1m、南側で幅0.2m、深さ0.1m、西側で幅0.15m、深さ0.1mをはかる。柱穴は、やや不整形な円形あるいは楕円形であり、直径0.4～0.5mをはかる。なお、SP64の底から礎石（そせき）と推測する小型の川原石が２点重なって出土した。また、北西側の主柱穴SP50から弥生土器壺か高杯（64）が出土した。

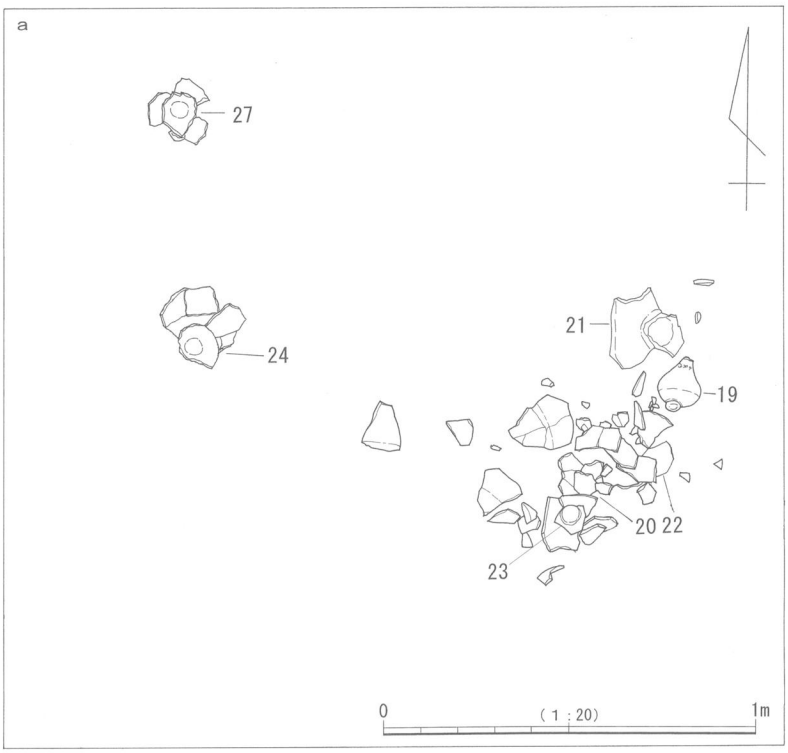
また、南側に位置するSF02がSB07に伴う貯蔵穴である可能性が高い。

遺物の出土状況・出土遺物　SB07の西側より弥生土器19～23がまとまって出土しているが、SB07はほぼ同位置で建て替え（SB08）が行われていることから、これらの遺物は後述するSB08住居に伴う可能性



①黒色砂質シルト
②黒褐色砂質シルト(炭化物・褐色土を含む)
③暗黒褐色砂質シルト
④黒褐色砂質シルト(褐色土を含む)
⑤明黒褐色砂質シルト(炭化物を含む)‥‥SB07 の壁溝
⑥黒褐色砂質シルト・明褐色砂質シルトの混和土‥‥SB07 の貼床
⑦暗褐色砂質シルト‥‥SB08 の壁溝

第31図　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08実測図



第32図　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08遺物出土状況詳細図

が高い。したがって、SB08の報告で述べることとする。

時期　後述するように、SB08より古いこと、覆土中より出土したSB07に伴うと考える弥生土器が白岩式土器古段階に比定できることを考慮して、弥生時代中期後半でも古い時期に位置づけできる可能性が高い。

⑧８号竪穴住居（SB08，第31～33図，第６・８・９表，巻頭図版２，図版５・６，15～17）

概要　SB08は、Ａ３・Ａ４、Ｂ３・Ｂ４グリッドに位置している。SB07よりも新しく築造されたものであり、SB07を建て替えた可能性が高い。また、SH02が、SB08の覆土を掘削していることからSH02のほうが新しい。

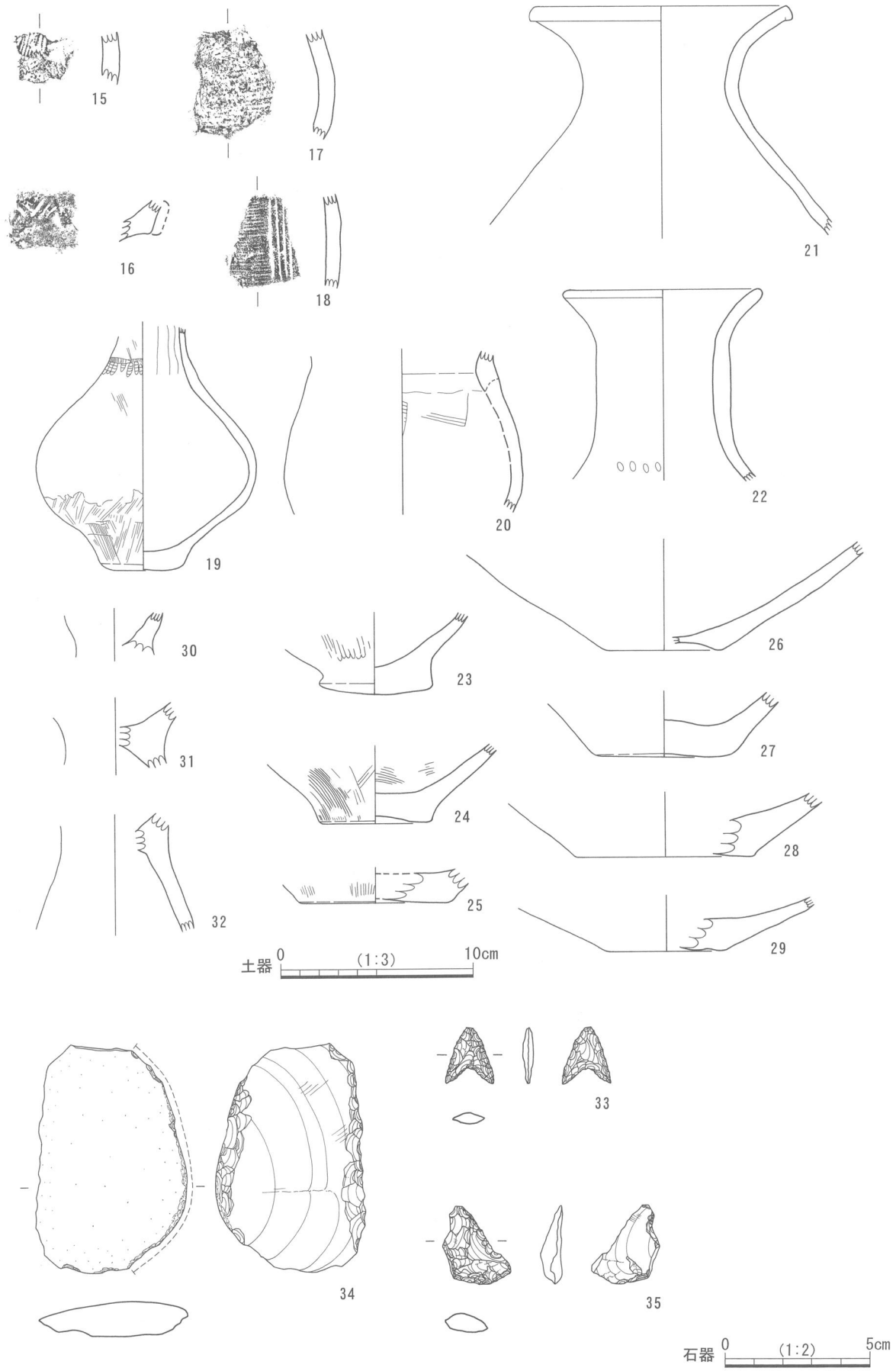
構造　住居の平面形は楕円形であり、長軸を南北に向ける。住居の規模は壁溝の内側で長軸（南北）7.3m、短軸（東西）6.0m、壁溝の外側で長軸8.0m、短軸6.7mをはかる。住居内には主柱穴が確認できる。柱穴間の間隔は、長辺（南北）3.3m、短辺（東西）3.15mをはかり、SB07より一回り大型化している。柱穴の形状は不整形な円形あるいは楕円形であり、直径は0.35～0.5mをはかる。SP64には礎石が確認できる。また、南側に位置するSF03が、この住居に伴う貯蔵穴の可能性がある。

遺物の出土状況　SB07で記述したように、住居の西側で、まとまった状態で弥生土器壺（19～23）が出土した。また、壁溝上より弥生土器壺（24・27）が出土している。この他、覆土中より、弥生土器、石鏃１点、剥片石器１点、剥片１点が出土した。また、南東側の主柱穴SP64から弥生土器壺（68，第57図，55頁）が出土した。

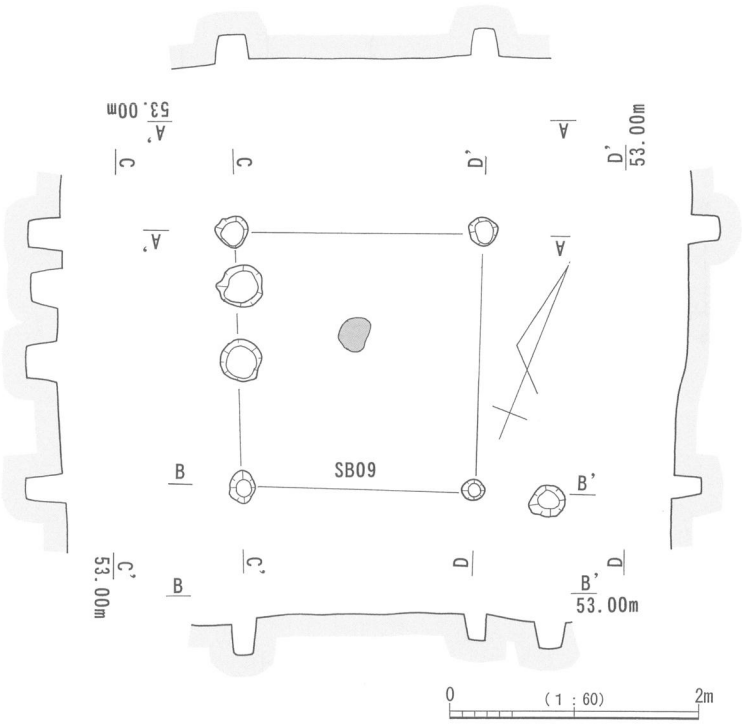
出土遺物　弥生土器壺片15点、台付甕片３点、石鏃１点、剥片石器１点、剥片１点が出土した。

弥生土器　15～18は壺の破片である。15は、外面にハケ調整が施されている。下部と上部のハケは交差しており、羽状を意識したハケ調整が施されていた可能性がある。16は受口状口縁部の破片であり、口縁部には棒状浮文が貼り付けられ、三条一単位の三角連繋文が棒状工具により施されている。18は櫛描横線文と、それに直交する４本一単位の櫛状工具による縦線（垂下）文（丁字文）が施されている。17は、外面に櫛描横線文が施されている。

19は小型壺である。胴部は無花果形で、最大径はほぼ中位にある。胴部径11.2cmをはかる。底部は小さく平底である。頸部と胴部の境目付近に５～６本単位の櫛状工具による一条の押圧横線文が施され、その下位に縦位に櫛刺突文を全周させる。外面胴部下半には羽状にハケ調整が施され、胴部上半には板ナデが施される。頸部には縦ハケ調整が施される。底部をはじめとする全体的な形状から駿河の有東式土器の影響を受けていることが判明する。20は小型壺であり、内面には横ハケ調整が施される。21は壺である。口縁端部をわずかに折り返しており、菊川式土器の古手の様相を示す。22は壺の口縁部であり、直立する頸部に、逆ハ字形に開く口縁部である。口唇部は丸く仕上げられる。頸部と胴部の境付近に棒



第33図　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08出土遺物実測図



第34図　蒲ヶ谷原遺跡SB09実測図

状工具による刺突文が施される。頸部には縦ナデ調整が施される。頸部の中位が僅かに膨らむことなどは、駿河の有東式土器に類似する。23は壺の底部であり、平底である。外面には縦ミガキ調整が施される。24は、壺の底部である。底部は上げ底で、底部径5.9cmをはかる。内・外面ともにハケ調整が施される。25～29は壺の底部片であり、５点ともに底部は僅かに上げ底である。底部径は6.1～9.3cmをはかる。30～32は台付甕の脚台と胴部の接合部の破片である。

石器　石鏃（33）は、粘板岩製で、基部は凹基式で、鏃身は三角形を呈する。全長1.9cm、幅1.65cm、厚さ4.1mm、重量約１ｇをはかる。剥片石器（34）は、砂岩の自然礫を打ち欠いたもので平板に仕上げられる。平面形は台形であり、全長7.8cm、最大幅5.1cm、厚さ1.2cmをはかる。剥片（35）は、粘板岩製である。最大長2.7cm、最大幅2.1cm、厚さ6.5mm、重量４ｇをはかる。

時期　弥生土器19・21は形態的、技法的な特徴から白岩式新段階～菊川式土器古段階に位置づけることができる。したがって、SB08は弥生時代中期末～後期前半に位置づけることができる。

一方、16･23･24は白岩式土器であり、弥生時代中期後半でも古い時期に位置づけることができ、SB07に伴う遺物である可能性がある。したがって、SB07は弥生時代中期後半でも古い時期に築造された可能性が高い。

⑨９号竪穴住居（SB09，第34図，第６表，図版４）

概要　SB09は、Ａ４グリッドに位置しており、SB08から東に３ｍ程離れている。SH02との重複関係にあったと想定できるが、切り合い関係が不明なため、築造の前後関係は不明である。

構造　主柱穴と炉のみの検出である。やや南北方向の間隔が長く、竪穴住居は長軸を南北に向けた楕円形であった可能性が高い。柱穴の間隔は長辺（南北）2.1m、短辺（東西）2.0mをはかる。柱穴はやや不整形な円形で、直径0.2～0.25mをはかる。北側柱穴の間に炉跡が確認できる。平面は楕円形に近く、0.25×0.3mをはかる

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期と想定できる。

⑩10号竪穴住居（SB10，第35図，第６表，図版７）

概要　SB10は、Ｂ４グリッドに位置しており、SB08から南西に２ｍ離れている。

構造　主柱穴のみの検出である。柱間は南北が長いことから、長軸を南北に向ける楕円形の竪穴住居であった可能性が高い。柱間は、長辺（南北）3.9m、短辺（東西）3.4mをはかる。柱穴は不整形な円

形であり、直径0.3～0.6mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

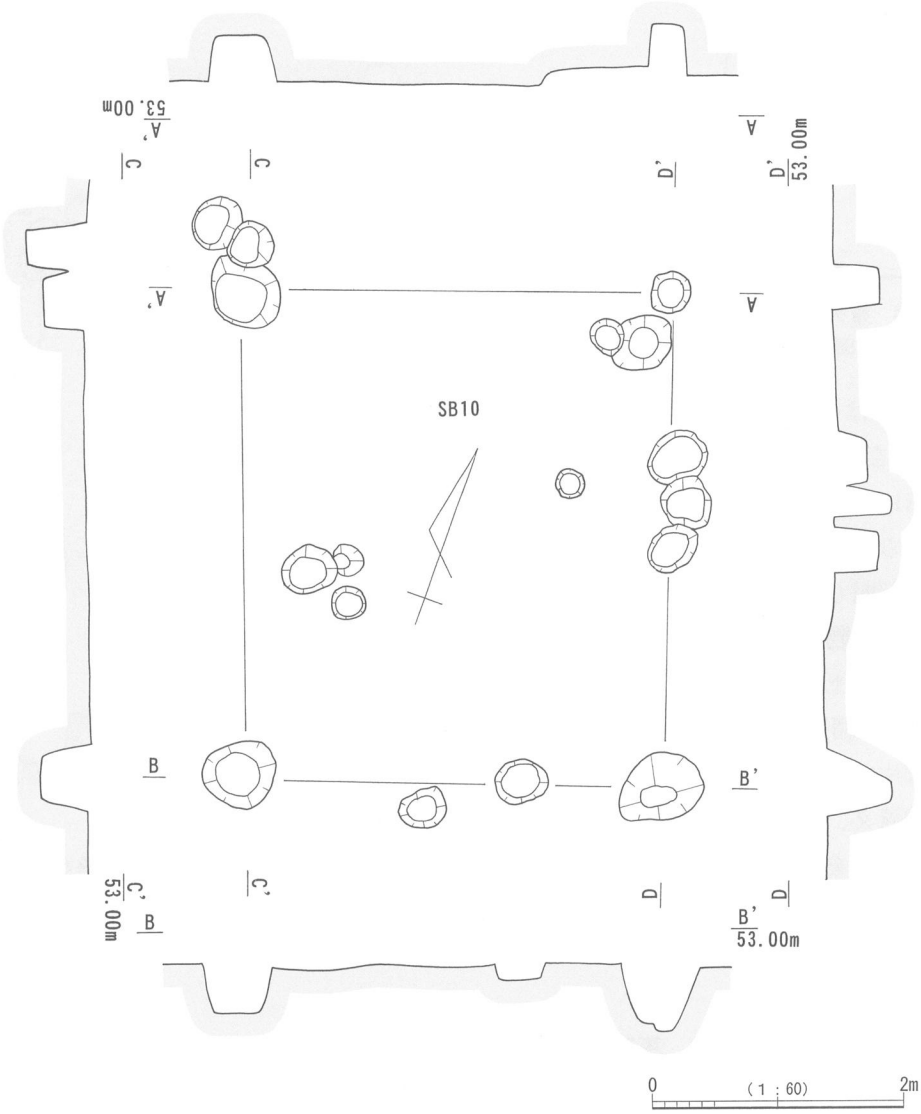
時期　出土遺物はなく、時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期の築造である。

⑪11号竪穴住居（SB11，第36・37図，第6・8表，図版8・14）

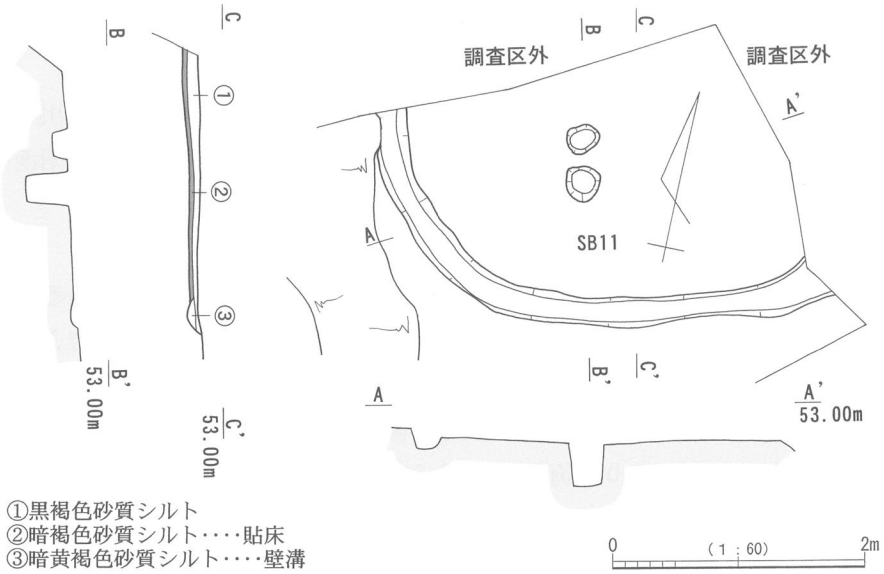
概要　SB11は、調査区の北東隅、Z5・Z6、A5・A6グリッドに位置している。SB09から東に13m離れている。

構造　南西隅角部のみの出土であり、全体の形状は明確ではないが、壁溝の形状からSB07・08、15と同様楕円形である蓋然性が高い。この場合には、長軸を東西に向ける可能性が高い。

規模は、壁溝の内側で東西2.8m以上、南北2.1m以上、外側で東西3.3m以上、南北2.35mをはかる。床面には厚さ0.05mの貼床が施される。

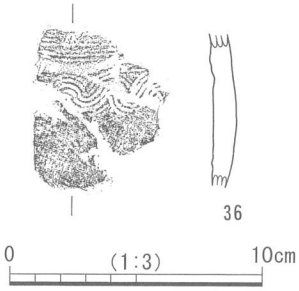


第35図　蒲ヶ谷原遺跡SB10実測図

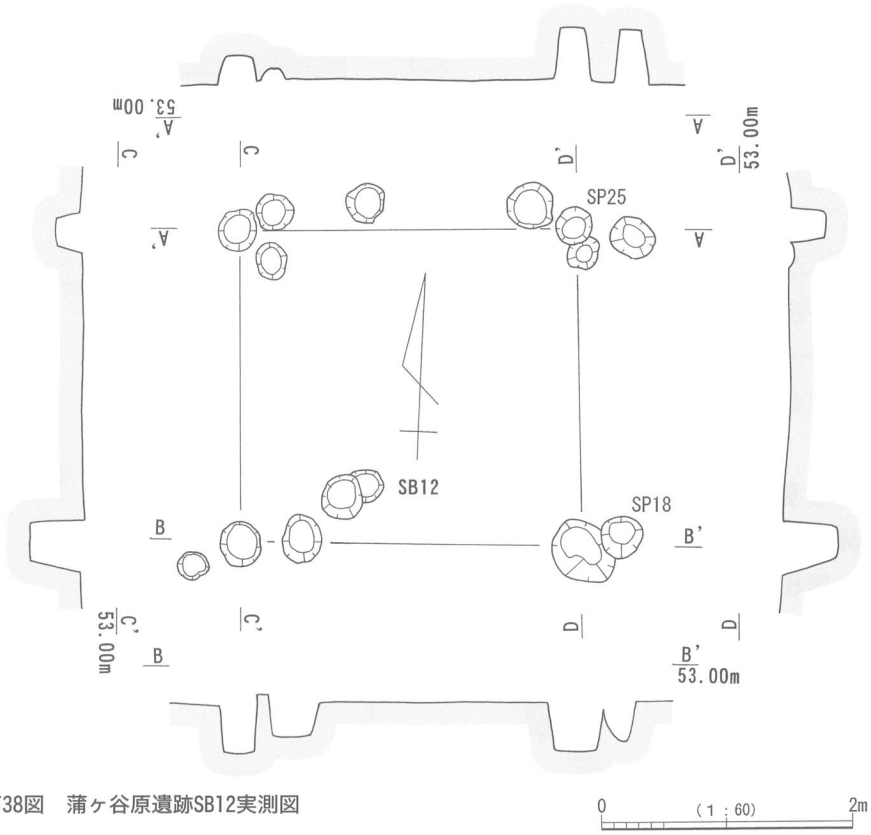


①黒褐色砂質シルト
②暗褐色砂質シルト‥‥貼床
③暗黄褐色砂質シルト‥‥壁溝

第36図　蒲ヶ谷原遺跡SB11実測図



第37図　蒲ヶ谷原遺跡
SB11出土土器実測図



第38図　蒲ヶ谷原遺跡SB12実測図

壁溝は幅0.3m、深さ0.1mをはかる。柱穴は住居内に２基確認できるがどちらがSB11に伴う主柱穴か判明しない。

出土遺物　弥生土器壺破片が覆土中より出土した（第37図）。36は壺の頸部破片であり、上部に櫛描横線文、その下位に櫛描波状文を施している。文様の下位（胴部）には、縦ハケ調整後ナデ調整を施している。

時期　36は様式を特定できない。SB11は弥生時代中期後半～後期前半の一時期に築造された可能性が高い。

⑫12号竪穴住居（SB12，第38・57図，第６・８表）

概要　SB12は、Ｂ３・Ｂ４、Ｃ３・Ｃ４グリッドに位置しており、SB08から南に約3.5m離れている。SH07と重複する可能性が高いが、切り合い関係が確認できないため、築造の前後関係は不明である。

構造　主柱穴のみの検出である。柱間は東西のほうがやや長く、長辺（東西）2.7m、短辺（南北）2.5mをはかる。したがって、長軸を東西に向ける、SB08やSB15より一回り小型の楕円形の住居であった蓋然性が高い。柱穴はやや不整形な円形であり、直径0.3～0.6mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。柱穴（SP25）からくの字形の壺口縁部が出土した。

時期　出土遺物はなく、時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期の築造である。

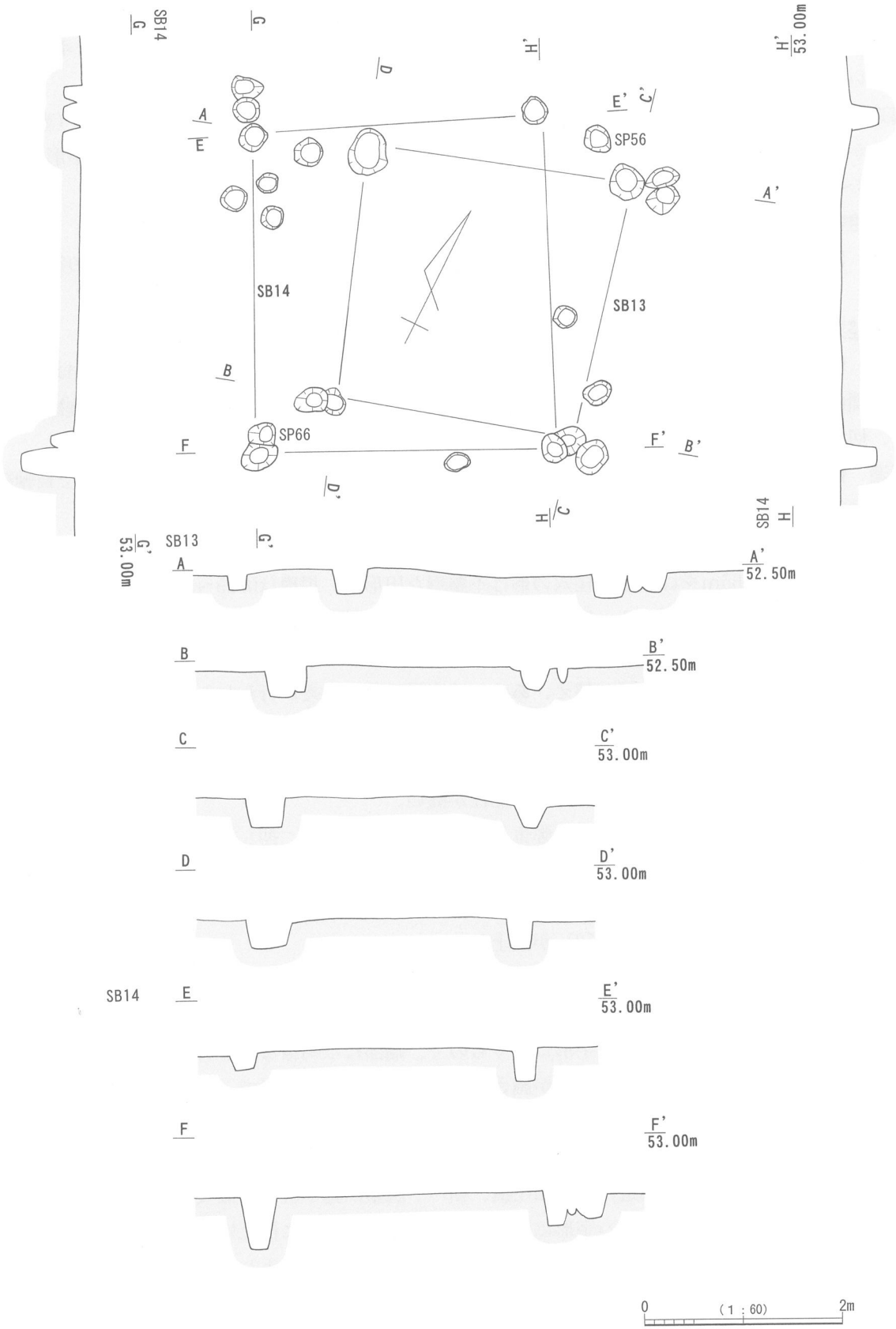
⑬13号竪穴住居（SB13，第39図，第６表）

概要　SB13は、Ｃ５グリッドに位置しており、SB10から南東に約７m離れている。SB14と重複関係にあり、柱穴の切り合い関係があるが、築造順序を明らかにすることはできなかった。

構造　主柱穴のみの検出である。柱は台形に配置され、長辺（南北）2.6～2.7m、短辺（東西）2.4～2.7mをはかる。柱間を考慮すると、長軸を南北に向ける楕円形の竪穴住居であった可能性が高い。柱穴はやや不整形な円形であり、直径0.3～0.5mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がなく築造時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期の築造である。



第39図　蒲ヶ谷原遺跡SB13・14実測図

⑭14号竪穴住居（SB14，第39図，第６表）

概要　SB14は、Ｃ４・Ｃ５グリッドに位置する。SB13と重複関係にあるが、発掘調査によって前後関係を明らかにすることはできなかった。また、SB17とも重複する可能性が高いが、切り合い関係が確認できないため先後関係は不明である。

構造　SB14は主柱穴のみの確認である。柱間は、南北が長く、長辺（南北）3.5m、短辺（東西）2.9mをはかる。したがって、南北に長い楕円形の竪穴住居であった蓋然性が高い。柱穴は不整形な円形で、直径0.3～0.4mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がなく築造時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期の築造である。

⑮15号竪穴住居（SB15，第40・41図，第６・８・９表，巻頭図版２，図版８・９，18・19）

概要　SB15はＣ４、Ｄ４グリッドに位置する。SD03は、この住居に伴う排水溝の可能性がある。SH07と重複関係にあり、切り合い関係があるが、前後関係は判明しなかった。また、SH18とも重複関係にあるが、切り合い関係が確認できず、前後関係は不明である。

構造　住居の平面形は楕円形であり、長軸をほぼ東西に向ける。住居の規模は壁溝の内側で長軸約6.5m、短軸約5.5mをはかる。壁溝の外側で、長軸約7.2m、短軸約6.3mをはかる。

住居内のほぼ中央に主柱穴が確認できる。柱の間隔は、住居の長軸側の幅が広く、長辺（東西）3.25m、短辺（南北）2.65mをはかる。柱穴の形は不整形な円形で、規模は0.25～0.3mをはかる。

住居内中央やや北側より炉（Ｅ－Ｅ′の②層）が出土した。焼土が東西2.2m、南北1.2mの範囲に広がる。また、土層（Ｅ－Ｅ′）を観察すると、炉と考えられる広がり（⑥層）が確認でき、②層よりも古く位置づけることができ、SB15は建て替え、あるいは床面の貼り替えが行われたことが判明する。ただし、柱穴は多数確認できず、ほぼ同じ柱穴を使用して建て替えた可能性が高い。

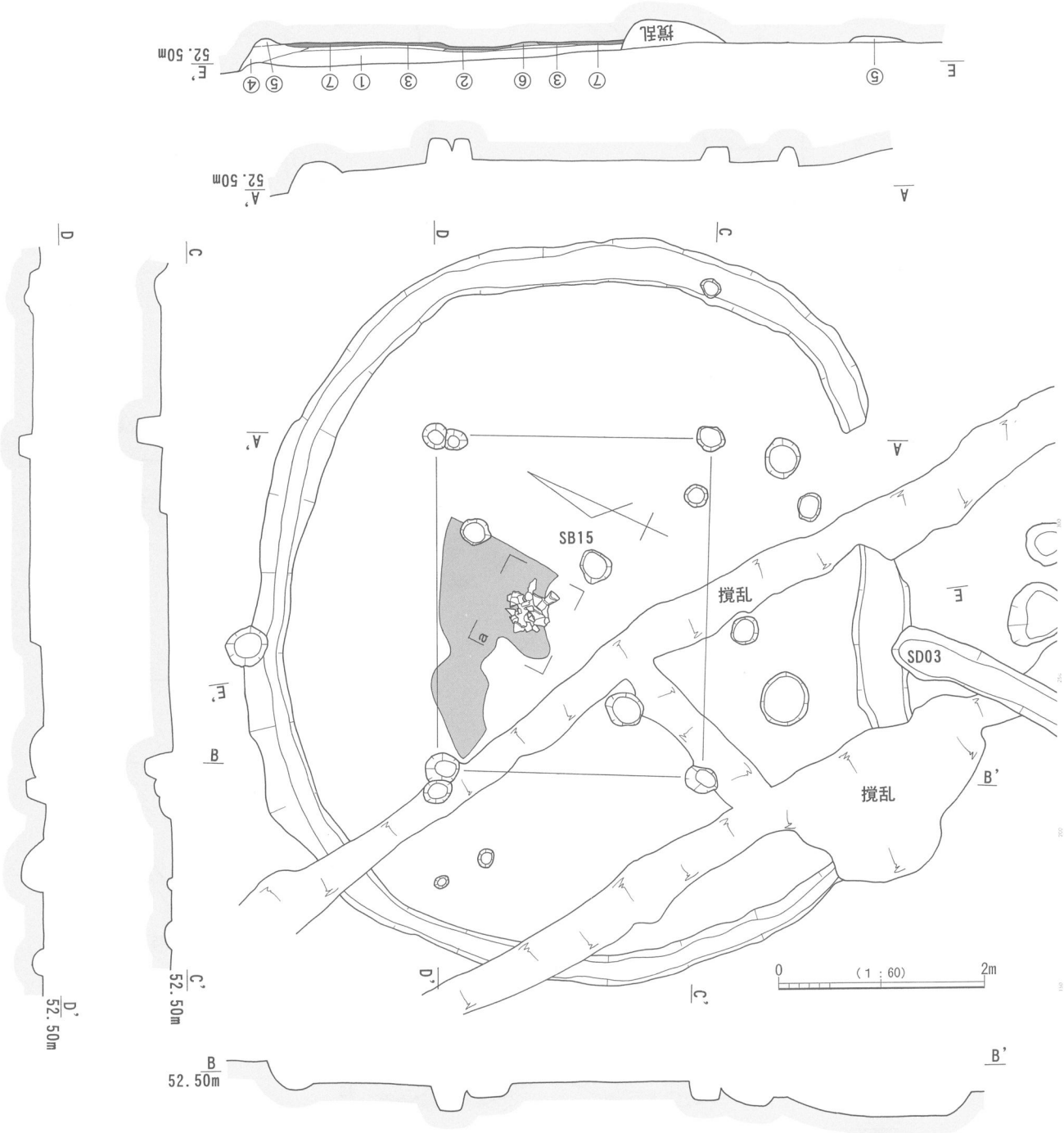
SB15の南側からSD03が伸びている。SD03から出土した土器をみると、SB15から出土した土器と時期が同じであることから、SB15の排水溝である可能性が高い。

遺物の出土状況　住居内の炉付近から弥生土器高杯１点（38）が、押し潰されたような状態で出土した（第40図詳細図，図版９）。また、同じ場所から弥生土器台付甕・甕（42～46）がまとまって出土した。この他、壁溝内より深鉢（甕，41）、剥片石器（48）、覆土中より台付甕１点（47）、鉢？（40）、壺（39）、叩石（37）、剥片石器（49）、剥片（50）が出土した。

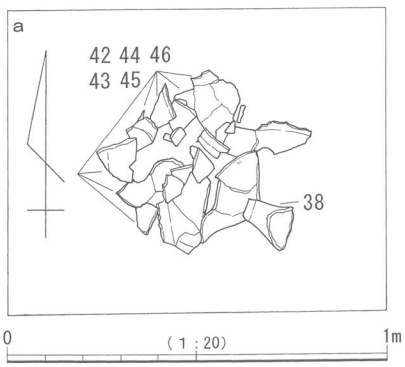
出土遺物　弥生土器高杯１点、壺１点、甕６点、鉢？１点、深鉢１点、剥片石器２点、叩石１点、剥片１点が出土した。

弥生土器　高杯（38）の脚部はハ字形に開くもので、端部には明瞭な稜を有さない。脚部外面には縦ミガキ調整が、内面には指頭による押圧が施される。また、杯部は椀形で、口縁部は鍔状ではないものの、明瞭な屈曲が確認できる。口縁部内面には横方向のミガキが施される。台付甕・甕（42～47）の口縁部（42～44）はくの字形に屈曲し、口縁端部外面には、キザミ目が施される。胴部は球形である。外面はハケ調整、内面の接合部付近には指頭圧痕、横ハケ調整が施される。最大径は口縁部にある。台付甕の台部（46）は、内彎しながらハ字形に垂下し、脚端部は平坦面に仕上げられる。外面はハケ調整、内面は板ナデ調整を施している。台部（47）は、ハ字形に直線的に垂下し、口縁端部は平坦に仕上げられる。内・外面ともにハケ調整が施される。

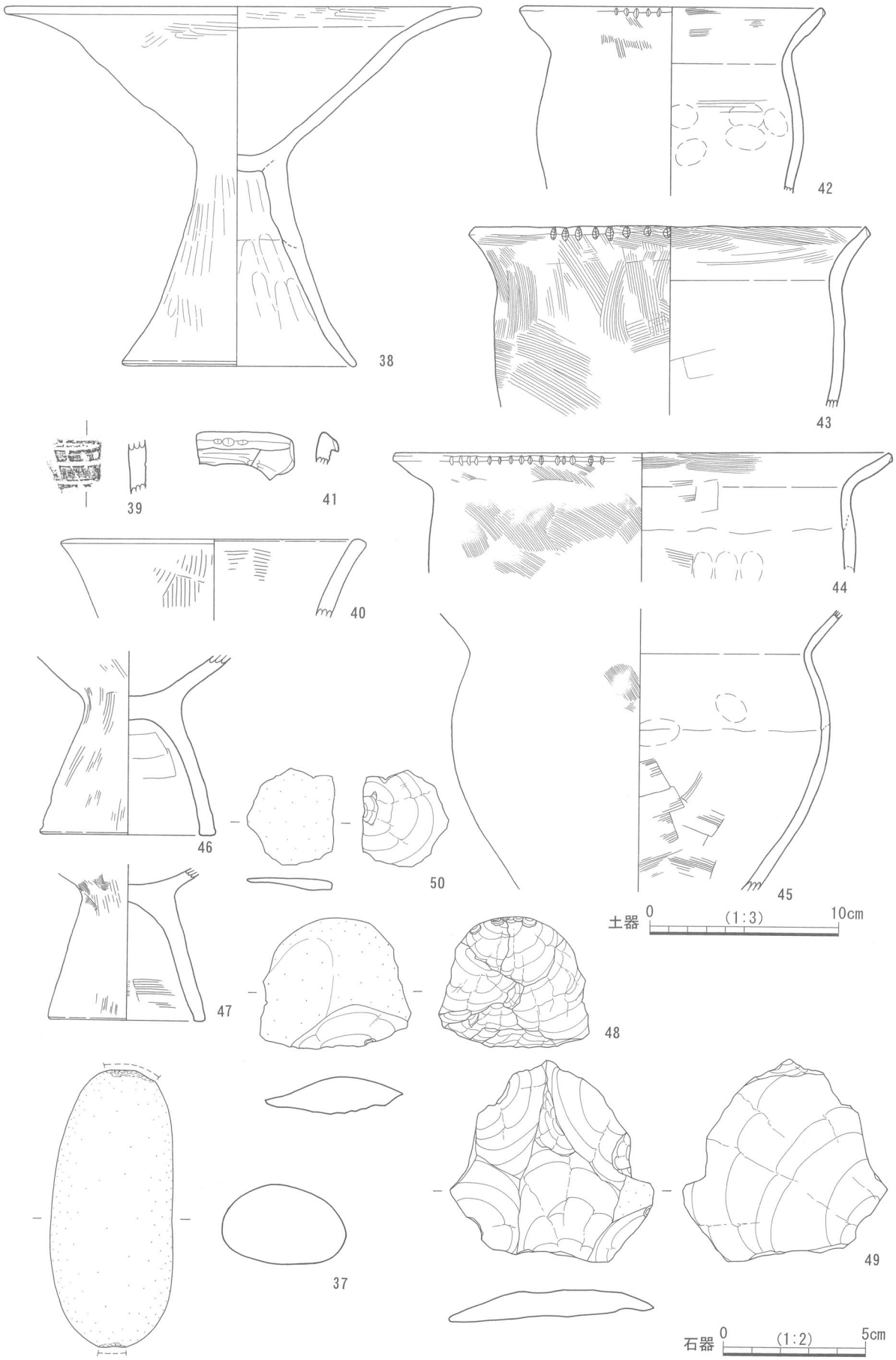
深鉢（41）は、口縁部の破片であり、口縁部は逆ハ字形に開いた後、口縁端部はＬ字形に折り返され、端部にキザミ目を施される。胴部には横方向の条痕文が施される。鉢（40）は口縁部片である。口縁部は逆ハ字形に開いた後、口縁端部は平坦に仕上げられ、内・外面ともにハケ調整が施される。壺片（39）



①黒色砂質シルト
②暗赤褐色砂質シルト‥‥炉
③黒褐色砂質シルト(炭化物・焼土・褐色土を含む)
④明黒褐色砂質シルト(褐色土を③層より多く含む)
⑤黒褐色砂質シルト(炭化物を含む)
⑥暗赤褐色砂質シルト‥‥炉
⑦黒色砂質シルト・褐色砂質シルトの混和土‥‥貼床



第40図　蒲ヶ谷原遺跡SB15実測図および遺物出土状況詳細図

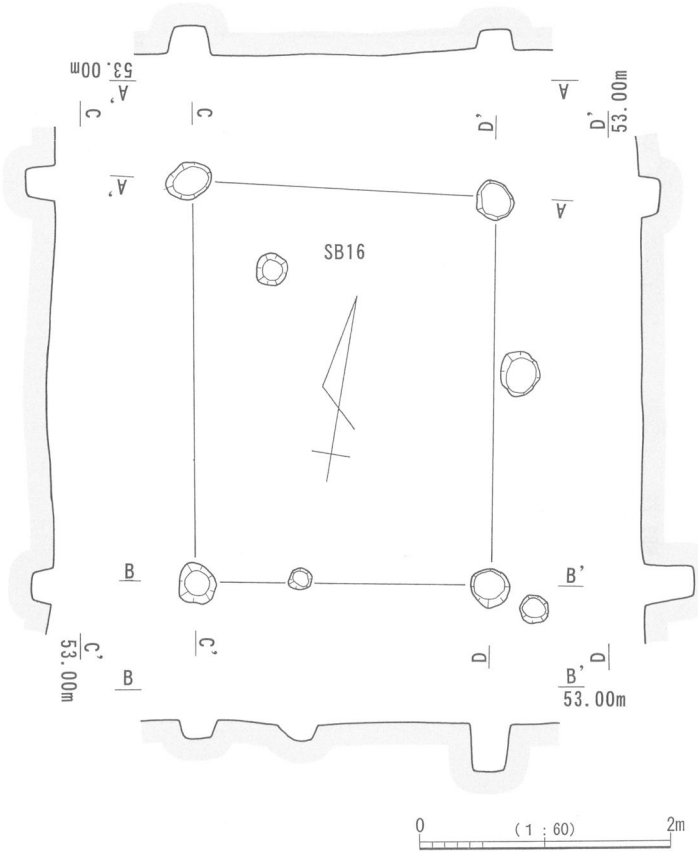


第41図　蒲ヶ谷原遺跡SB15出土遺物実測図

は、上部に櫛描横線文が施され、その下位にヘラによる２条の直線文が施される。直線文の間は研磨された痕跡が確認できる。

石器　叩石（37）は、含礫粗粒砂岩製の自然礫である。敲打痕が両小口側に確認できる。全長9.7cm、幅4.35cm、重量187ｇをはかる。剥片石器（49）は、中粒砂岩製である。平板に調整され、両面ともに自然面が残存する。剥片石器（48）は中粒砂岩製である。平面は半楕円形で、片側に自然面が残存する。剥片（50）は、中粒砂岩製であり、剥片石器を作成する際の剥片の可能性が高い。

時期　高杯（38）、台付甕（42～46）は白岩式新段階～菊川式古段階に位置づけできる。したがって建て替え後のSB15は白岩式の最終段階～菊川式古段階、弥生時代中期末～後期前半の築造である。



第42図　蒲ヶ谷原遺跡SB16実測図

一方、壁溝より出土した深鉢（41）や壺片（39）は、白岩式土器でも古い時期に位置づけることができ、これを積極的に評価して、建て替え前のSB15は弥生時代中期後半に位置づけたい。

⑯16号竪穴住居（SB16，第42図，第６表）

概要　SB16はＢ３、Ｃ３グリッドに位置している。SB12と重複関係にあった可能性があるが、壁溝などが失われており、重複関係は不明である。

構造　主柱穴のみの検出である。柱間は南北が長く、長辺（南北）3.2m、短辺（東西）2.4mをはかる。したがって、長軸を南北に向ける楕円形の竪穴住居であった可能性が高い。柱穴は、不整形な円形であり、直径0.3～0.4mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

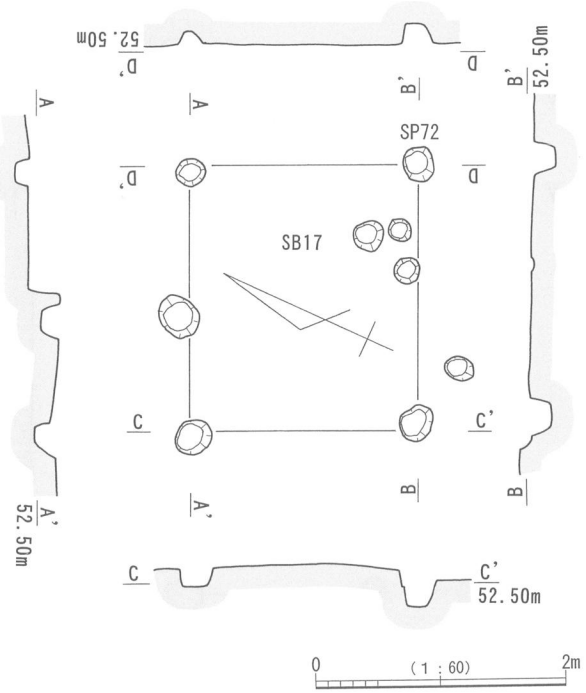
時期　出土遺物がなく築造時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期と想定できる。

⑰17号竪穴住居（SB17，第43・57図，図版21，第６表）

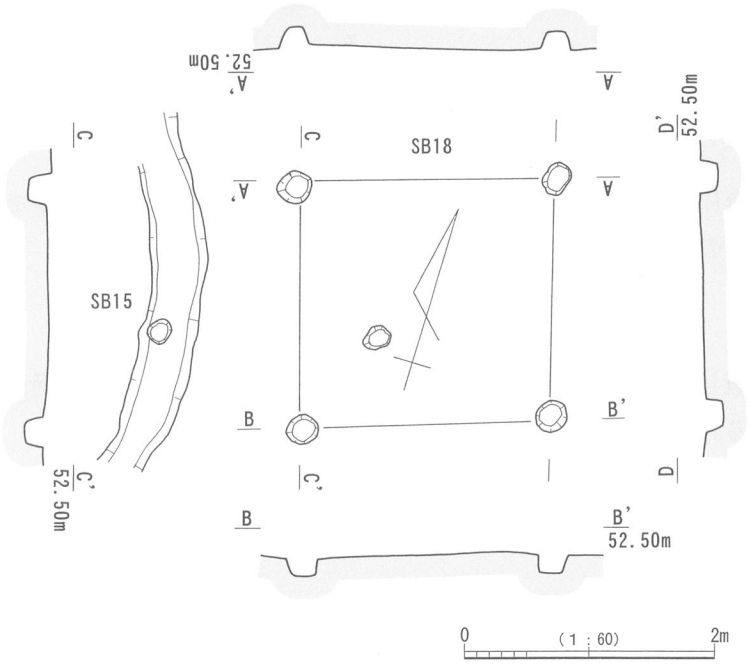
概要　SB17は、Ｃ４グリッドに位置しており、SB15から２m程北側に離れている。後述するSH07と重複関係にあった可能性が高いが、切り合い関係がなく、前後関係は不明である。

構造　主柱穴のみの検出である。柱間は東西が長く、長辺（東西）2.1m、短辺（南北）1.8mをはかる。したがって、長軸を東西に向ける楕円形の竪穴住居であった蓋然性が高い。柱穴は不整形な円形で、0.25～0.3mをはかる。

出土遺物　主柱穴SP72より叩石（73）が出土した（第57図，図版21）。礎石として使用されていた可能



第43図　蒲ヶ谷原遺跡SB17実測図



第44図　蒲ヶ谷原遺跡SB18実測図

性が高い。73は、半透明良質のチャート製で、自然礫である。隅丸二等辺三角形の平坦な石材の先端を敲打面として利用したもので、もう一方の小口には敲打痕は確認できない。全長8.5cm、最大幅5.4cm、厚さ1.8cm、重量131gをはかる。

時期　時期を特定できる遺物はなく、築造時期は不明である。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に位置づけることができる。

⑱18号竪穴住居（SB18，第44図，第6表）

概要　SB18は、C5グリッド、SB15の東約1mのところに位置している。SB15と重複関係にあった可能性が高いが、切り合い関係が確認できないことから、前後関係は不明である。

構造　主柱穴のみの検出である。柱間はほぼ等間隔であり、東西2.0m、南北2.0mをはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.25～0.3mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、築造時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半に築造された可能性が高い。

(2)　掘立柱建物

掘立柱建物（ほったてはしらたてもの）は、8棟（SH01～08）出土した。このうちSH01・02について、建て替えは確認できず、SH03・04、SH05・06、SH07・08はそれぞれ重複関係が確認できる。

なお、掘立柱建物は偏在せず、調査区内にそれぞれがやや間隔をあけて分布している。

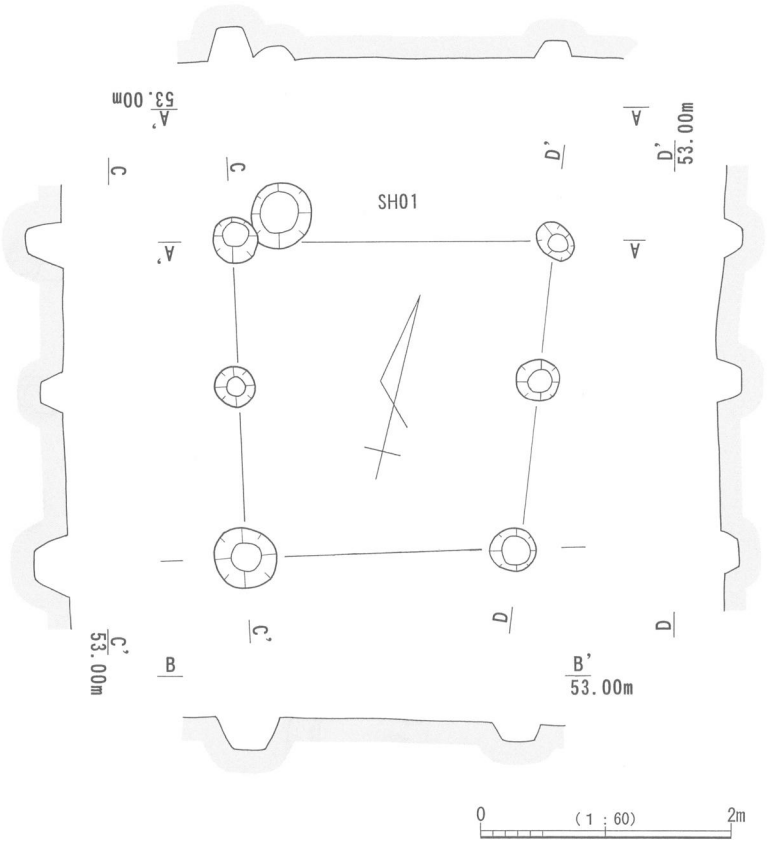
①1号掘立柱建物（SH01，第45図，第7表，図版3・10）

概要　SH01は、A2、B2グリッドに位置する。SB05と重複関係にあり、柱穴の切り合い関係があるが、重複範囲が少なく、築造順序を明らかにすることはできなかった。

構造　長軸をほぼ南北に向ける、1間（東西）×2間（南北）であり、やや不整形な長方形である（註9）。桁行(けたゆき)2.5m、梁間(はりま)は北側で2.5m、南側で2.2mをはかる。面積は、約5.9㎡である。柱間(はしらま)の間隔に関して、桁側は北側から1.2m（平均値）、1.3m、梁側は2.5m、2.2mをはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.35～0.5mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がなく、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に位置づけることができる可能性が高い。



第45図　蒲ヶ谷原遺跡SH01実測図

②2号掘立柱建物（SH02，第46図，第7表，図版10）

概要　SH02は、A3・A4グリッドに位置する。SB07・08と重複関係にあり、SB07→SB08→SH02の順に築造されたことが判明した。

構造　長軸をほぼ南北に向ける。長軸の方向はSB07・08、SB09、SB10、SH01とほぼ一致する。1間（東西）×2間（南北）の建物であり、桁行4.1m、梁間3.8mをはかる。面積は15.6㎡である。柱間の間隔に関して、桁側は北側から2.1m、2.0m、梁側は3.8mをはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.35～0.55mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定できない。しかし、SH02が破壊したSB08が中期末～後期前半の一時期に位置づけることができることから、SH02はそれ以降の後期前半に位置づけできる。

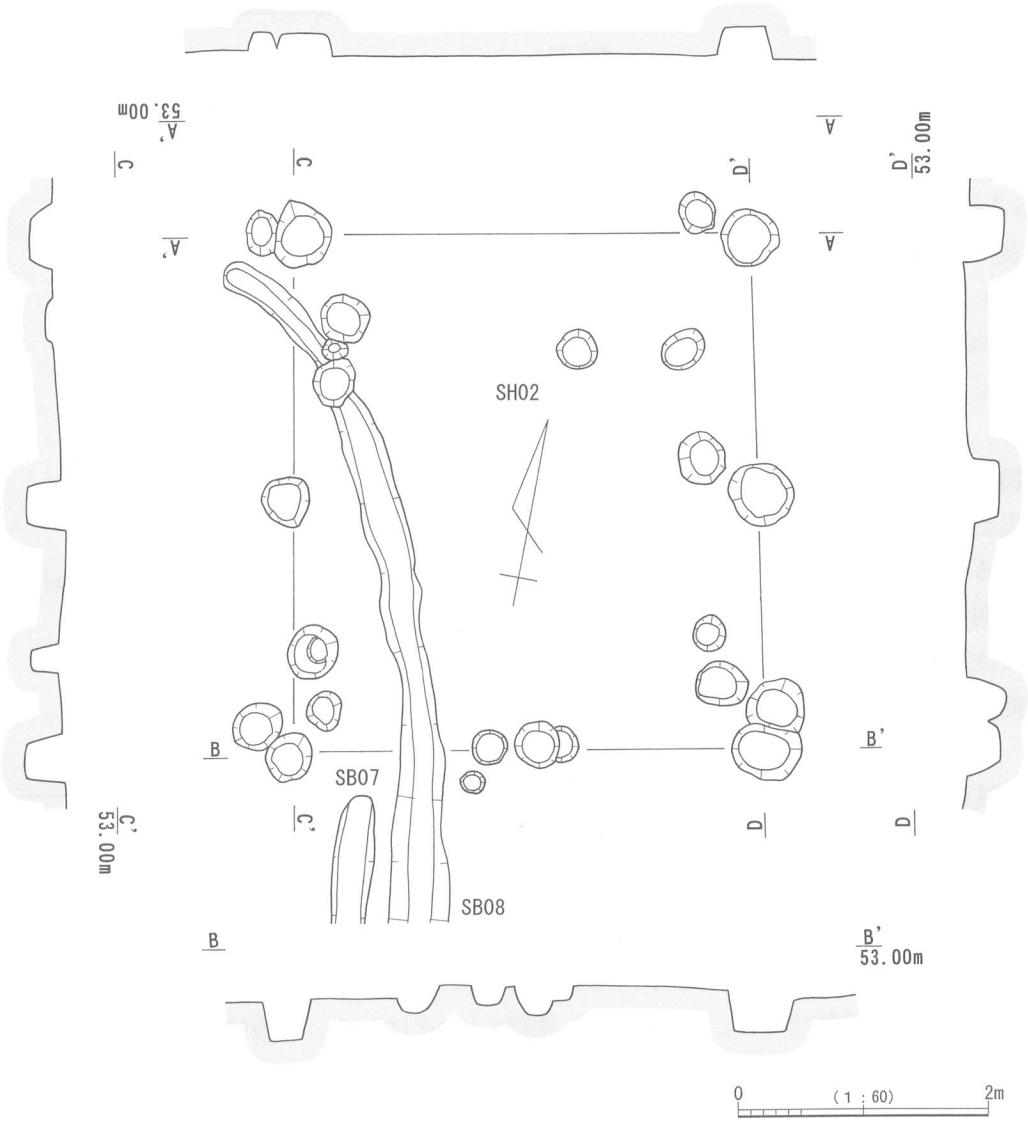
③3号掘立柱建物（SH03，第47図，第7表，図版11）

概要　SH03は、A5グリッドに位置する。SH04と重複関係にあり、切り合い関係があるがものの、前後関係を明らかにすることはできなかった。

構造　長軸をほぼ東西に向ける。SH05、SH08とほぼ同一方向を向く。規模は1間（南北）×2間（東西）の建物であり、桁行5.1m、梁間3.6m、面積約18.4㎡をはかる。柱間の間隔に関して、桁側は西から2.6m、2.5m（南側）、2.8m、2.3m（北側）をはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.3～0.45mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に位置づけることができる。



第46図　蒲ヶ谷原遺跡SH02実測図

④４号掘立柱建物（SH04，第47・48図，第７表，図版11）

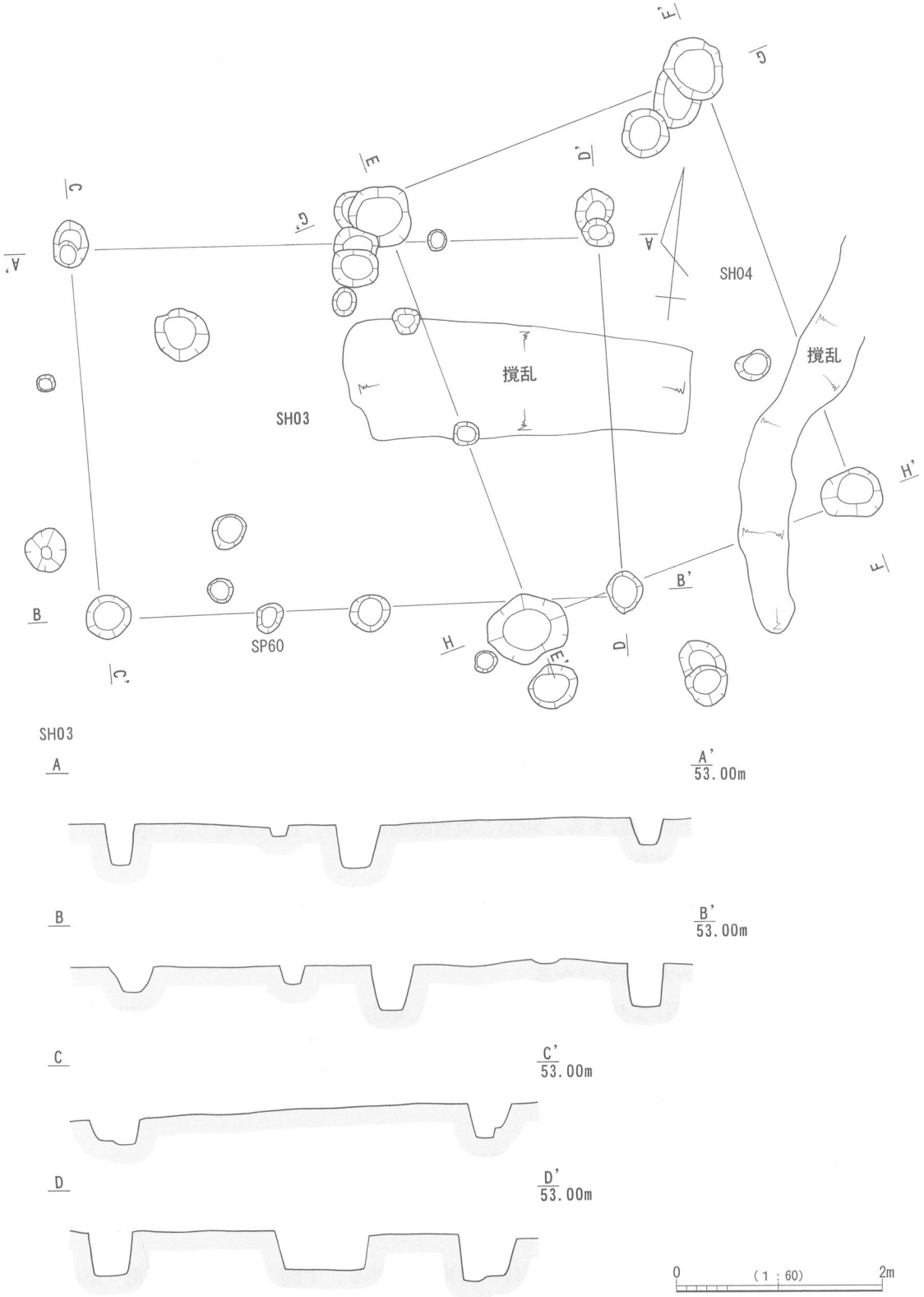
概要　SH04は、Ａ５グリッドに位置する。SH03と重複関係にあり、柱穴の切り合い関係があるが、前後関係を明らかにすることはできなかった。

構造　長軸を北西に向け、SB09やSB10とほぼ同一方向を向く。１間×１間の建物であり、西側の中間にある柱穴がSH04に伴うとすれば、対応する東側に柱穴は確認できないが、１間（東西）×２間（南北）であった可能性がある。桁行4.4m、梁間3.4m、面積約15.0㎡をはかる。１×２間であった場合の、桁側の柱間は北側から2.3m、2.1mである。柱穴は不整形な円形で、直径0.3～0.7mをはかる。

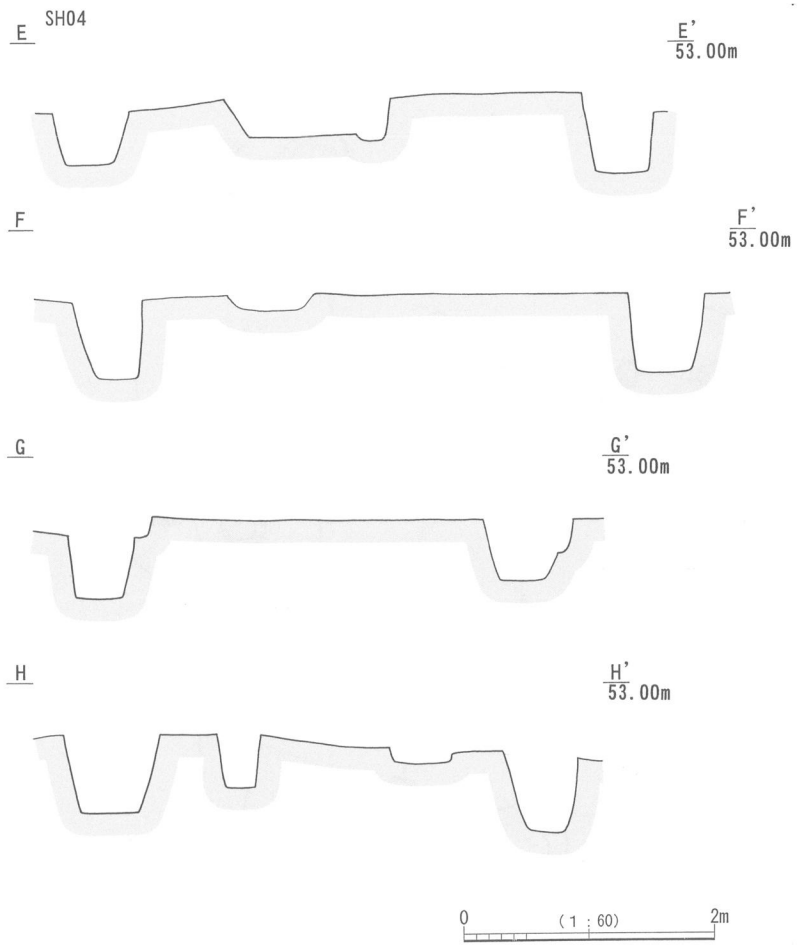
出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に位置づけることができる。

特徴　SH04は、桁行4.4m、梁間3.4mの１×１間の建物とすれば、通常の掘立柱建物の柱間よりかなり広いことから、通常の掘立柱建物ではなく、楼閣・見張台などの建物を想定すべきかもしれない。



第47図　蒲ヶ谷原遺跡SH03・04実測図



第48図　蒲ヶ谷原遺跡SH04実測図

⑤５号掘立柱建物（SH05，第49図，第７表，図版12）

概要　SH05はＣ２・Ｃ３グリッドに位置する。SH06と重複関係にあり、柱穴の切り合い関係から、SH06→SH05の順に築造されたことが判明した。

構造　長軸をほぼ東西に向ける。SH03やSH08とほぼ同方向である。規模は１間（南北）×２間（東西）の建物であり、桁行3.7m、梁間2.9m、面積約10.7㎡をはかる。桁側の柱間は、西から1.8m、1.9mをはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.3～0.55mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期と想定できる。

⑥６号掘立柱建物（SH06，第49・57図，第７・８表，図版12）

概要　SH06は、Ｃ３グリッドに位置する。SH05と重複関係にあり、柱穴の切り合い関係から上述したように、SH06→SH05の順で築造されたことが判明する。

構造　長軸を東西に向ける、今回の調査区唯一の１間（南北）×３間（東西）の建物であり、桁行3.6m、梁間2.3m、面積8.3㎡をはかる。柱間の間隔に関して、西から1.3m、1.4m、0.9mをはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.35～0.6mをはかる。

出土遺物　北西側の主柱穴SP11より弥生土器小型壺（63，第57図）が出土した。胴部破片であり、無花果（いちじく）形（がた）の胴部と推測できる。調整は内外面ともに摩滅が著しく、判別できない。

時期　時期を特定できる遺物はなく、弥生時代中期後半～後期前半の一時期と想定できる。

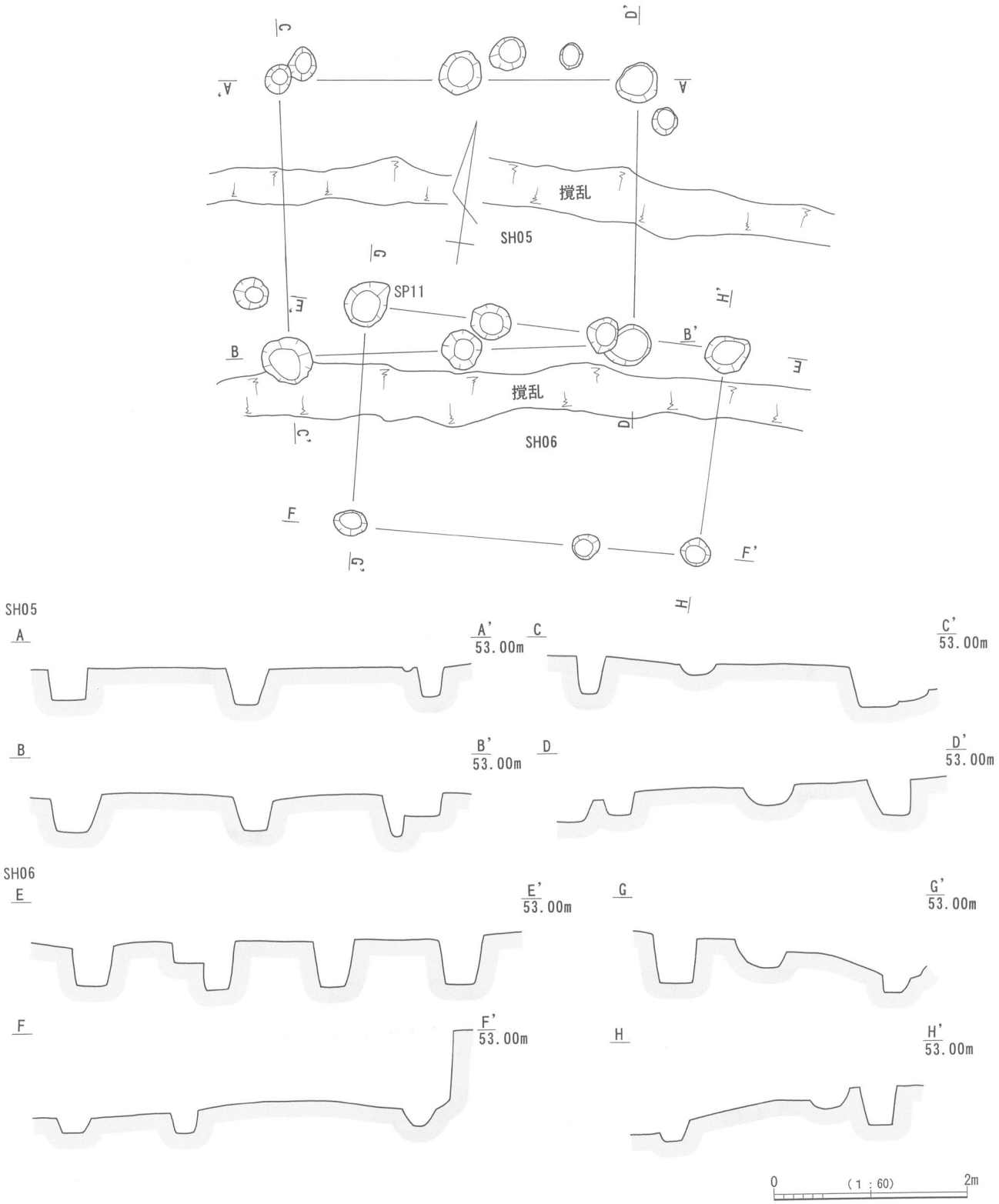
⑦７号掘立柱建物（SH07，第50図，第７表，図版12）

概要　SH07は、Ｃ３・Ｃ４グリッドに位置する。SH08と重複関係にあるが、切り合い関係が不明であることから、前後関係は不明である。

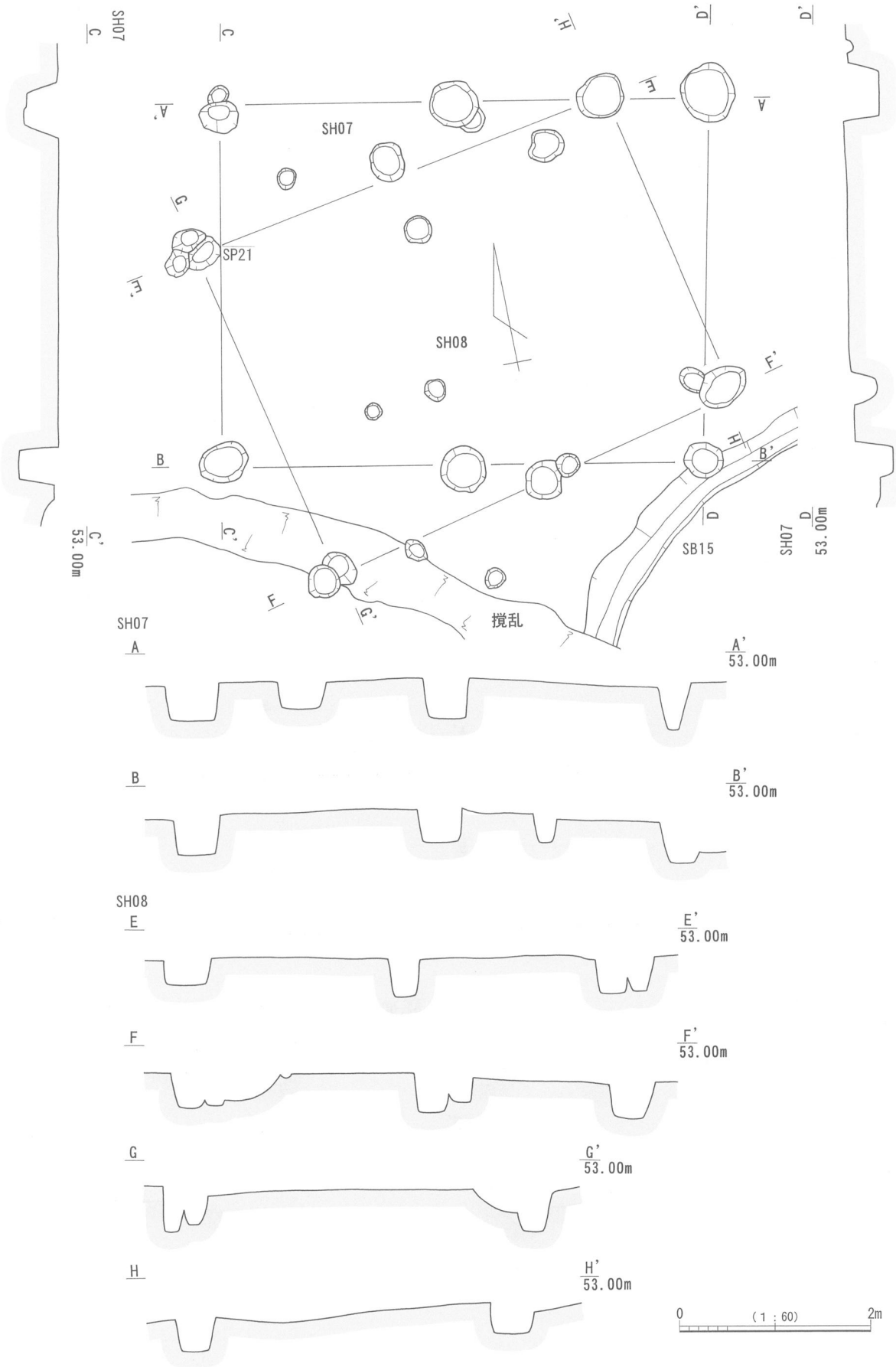
構造　長軸を東西に向ける。SH03・SH08とほぼ同方向に向ける。１間（南北）×２間（東西）であり、桁行5.0m、梁間3.6～3.8m、面積18.5㎡をはかる。桁側の柱間の間隔に関して、西から2.5m、2.5mであり、均等である。柱穴は不整形な円形で、直径0.35～0.6mをはかる。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物はなく、時期を特定できない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期と想定できる。



第49図　蒲ヶ谷原遺跡SH05・06実測図



第50図　蒲ヶ谷原遺跡SH07・08実測図

⑧８号掘立柱建物（SH08，第50・57図，第７表，図版12）

概要　SH08は、Ｃ３・Ｃ４グリッドに位置する。SH08と重複関係にあるが、切り合い関係が不明であることから、前後関係は不明である。

構造　長軸を東西に向ける。この方向はSH03・SH05と同一である。１間（南北）×２間（東西）であり、桁行4.5m、梁間3.85m、面積約17.3㎡をはかる。桁側の柱間の間隔に関して、西から2.3m、2.2mをはかる。柱穴は不整形な円形で、直径0.4～0.5mをはかる。

出土遺物　この建物の北西側の柱穴SP21からは、弥生土器壺底部片（65，第57図）が出土した。底部は平底である可能性が高く、底部径5.0cmをはかる。

時期　出土遺物は小片であり、時期を特定することはできない。弥生時代中期後半～後期前半の一時期に位置づけることができる。

(3)　溝

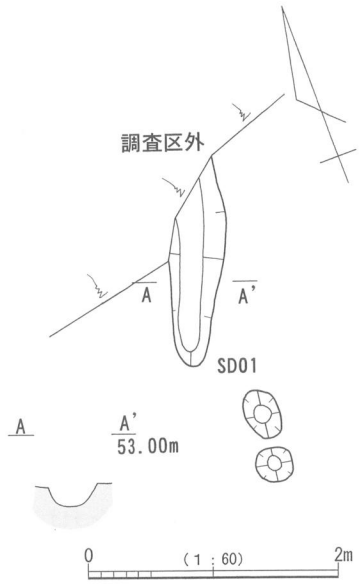
①SD01（第51図）

SD01はＡ３グリッドに位置しており、北側はすでに崩落していた。長軸はほぼ北側に向ける。やや彎曲していることから本来は竪穴住居の壁溝であった可能性がある。残存長1.65m、最大幅0.4m、深さ0.15mをはかる。出土遺物はない。

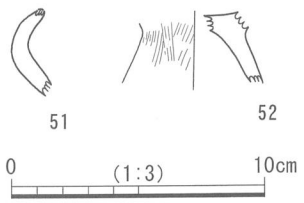
②SD02（第52・53図，第８表，図版13）

SD02はＣ３グリッドに位置する、ほぼ南北に伸びる溝である。残存長5.35m、最大幅0.85m、深さ0.1mであり、底面は南に向かって下る。

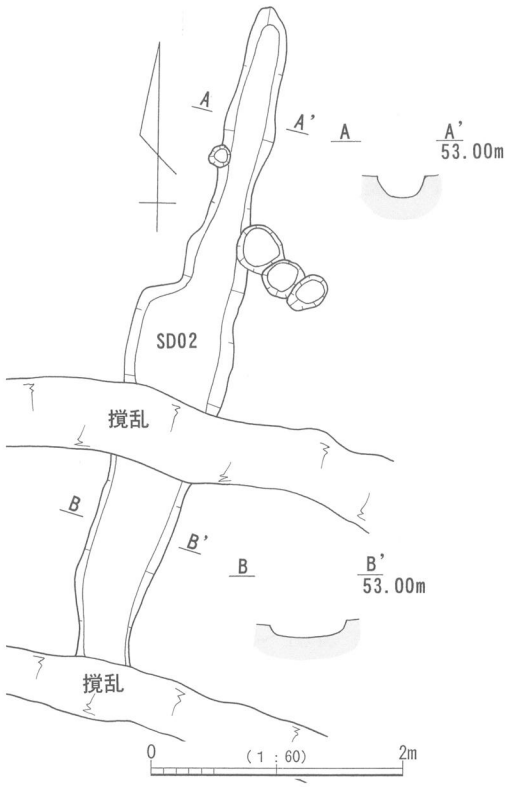
遺物は、弥生土器が２点出土した。壺口縁部破片（51）は、くの字形の口縁部で、口縁端部は単純口縁である。台付甕（52）の



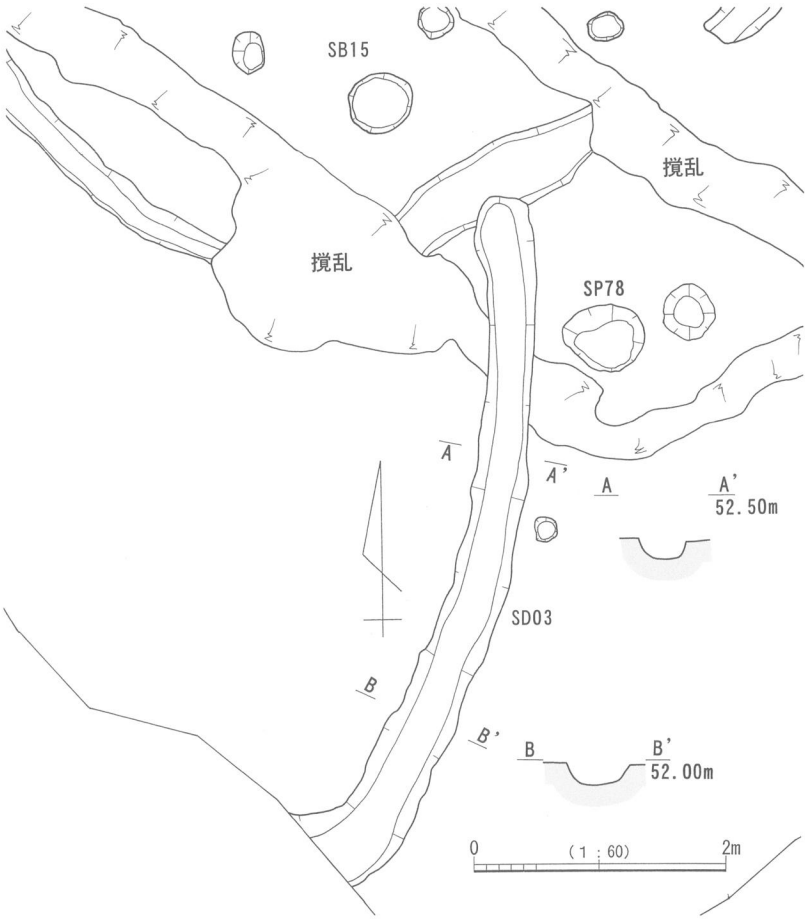
第51図　蒲ヶ谷原遺跡SD01実測図



第53図　蒲ヶ谷原遺跡SD02出土遺物



第52図　蒲ヶ谷原遺跡SD02実測図



第54図　蒲ヶ谷原遺跡SD03実測図

台部はハ字形に垂下する。外面はハケ調整が施される。

③SD03（第54・56図，第８表，図版19・20）

SD03はＤ４グリッド、SB15の南側に位置する。

SB15の南側よりSD03が伸びている。SD03から出土した土器をみると、SB15とほぼ同一の時期の弥生土器が出土しており、SB15の排水溝として機能していた可能性がある。

また、SD03はほぼ南北に向かって伸びているが、やや弧状を描くため、楕円形の竪穴住居の壁溝の可能性も残る。

残存長5.5m、最大幅0.6m、深さ0.15mをはかる。

出土遺物　弥生土器が覆土中より出土している。壺頸部片（53）は、櫛描横線文を施した後、５本以上一組の櫛状工具による縦線（垂下）文を施している。壺片（54）は、上位に棒状工具による横方向の条痕文、その下位には、棒状工具による斜め方向の条痕文が施されている。小型壺（55・56）は、頸部から胴部の破片であり、55の頸部は縦ハケ調整の後縦ミガキ調整を施し、胴部には縦ミガキ調整を施している。壺底部片（59・60）は僅かに窪む上げ底で、外面にはハケ調整、内面にもハケ調整が施されている。台付甕（58）は、台部片で、内彎しながらハ字形に垂下し、端部は平坦面に仕上げられる。外面にはハケ調整、内面は板ナデ調整が施されている。甕口縁部片（57）は、口縁端部を受口状に上方に向かって引き出している。口縁端部には棒状工具により羽状のキザミが施されている。胴部外面はハケ調整が施されている。

時期　これらの土器のうち53・54は白岩式土器の古段階（中期後半でも古い時期）に位置づけることができる。一方、55・56は白岩式新段階～菊川式古段階に位置づけることができる。したがって、SD03は弥生時代中期後半に開削された可能性があり、少なくとも後期前半まで機能していたことが判明する。

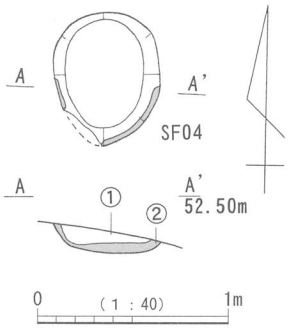
(4)　土坑

４基の土坑を確認したが、SF01～SF03は竪穴住居に伴う貯蔵穴の可能性が高く、竪穴住居の項で報告している。

ここではSF04のみ報告する。

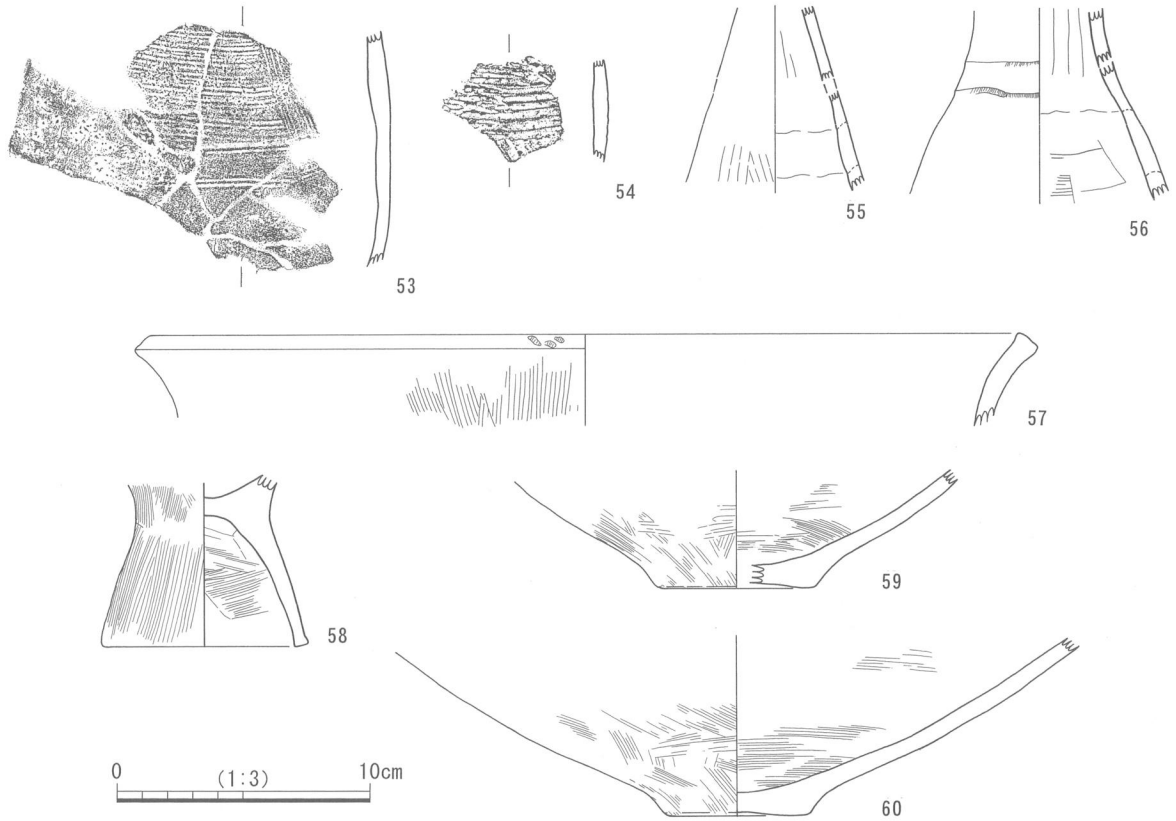
①SF04（第55図，図版13）

SF04は、Ｃ５グリッドに位置する。南西側は破壊されているが、や



①暗褐色砂質シルト
②赤褐色砂質シルト‥‥焼土（地山被熱）

第55図　蒲ヶ谷原遺跡SF04実測図



第56図　蒲ヶ谷原遺跡SD03出土遺物実測図

や南北に長い楕円形であった可能性が高い。南側半分は底面・壁が焼け赤化していることを考慮すると炉であった可能性が高い。この場合は、地面を掘り窪め皿状にした炉であった可能性が高い。

出土遺物はなく、確実な帰属時期は不明である。弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居に伴う炉跡の可能性が高いが、縄文時代の竪穴住居に伴う炉跡である可能性も残る。

(5)　柱穴出土遺物（第57図，第８・９表，図版20・21）

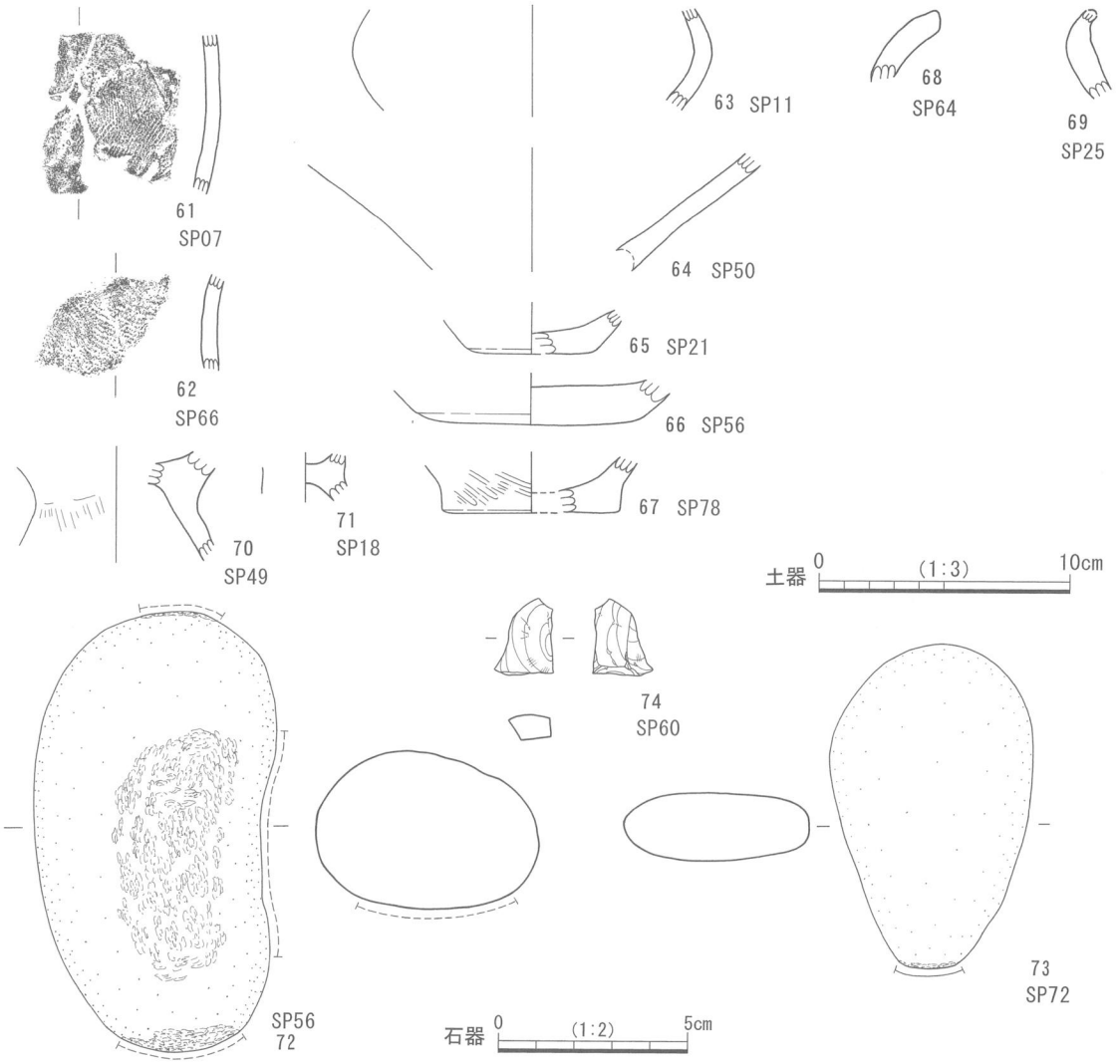
ここでは、柱穴（ちゅうけつ）から出土した遺物について報告する。なお、竪穴住居や掘立柱建物に伴う柱穴から出土した遺物については、各遺構の報告で既述している。

SP07　Ｃ３グリッド、SB16の南側に位置するSP07（第24図）から弥生土器壺破片（61）が出土した。61は、外面にハケ調整を施しているが、下位と上位のハケを交差させるように施していることから羽状を意識した調整といえる。

SP49　Ａ３グリッド、SB07・08の北西側主柱穴のすぐ西側に位置するSP49（第24・31図）から弥生土器台付甕の破片（70）が出土した。ハ字形に開く台部で、外面には縦ハケ調整を施している。

SP18　Ｃ４グリッド、SB12の南東側主柱穴の東側の柱穴SP18（第24･38図）から弥生土器高杯片（71）が出土した。杯部と脚部の接合部片である。

SP56　Ｃ５グリッド、SB13とSB14の北西側の主柱穴の間に位置するSP56（第24・39図）から弥生土器壺底部片（66）が出土した。平底であり、底部径9.0cmをはかる。また、叩石（72）が出土した。72は、粗粒砂岩の自然石を利用しており、両小口と一方の側面に敲打痕が確認できる。全長11.7cm、幅6.5cm、厚さ4.2cm、重量462ｇをはかる。



第57図　蒲ヶ谷原遺跡柱穴出土遺物実測図

SP60　Ａ５グリッド、SH03の内部に位置するSP60(第24・47図)より黒耀石の剥片(74)が出土した。

SP66　Ｃ５グリッド、SB14の南西の主柱穴と切り合うSP66（第24・39図）から弥生土器壺片（62）が出土した。外面には単節のＲＬ縄文を施している。菊川式土器である。

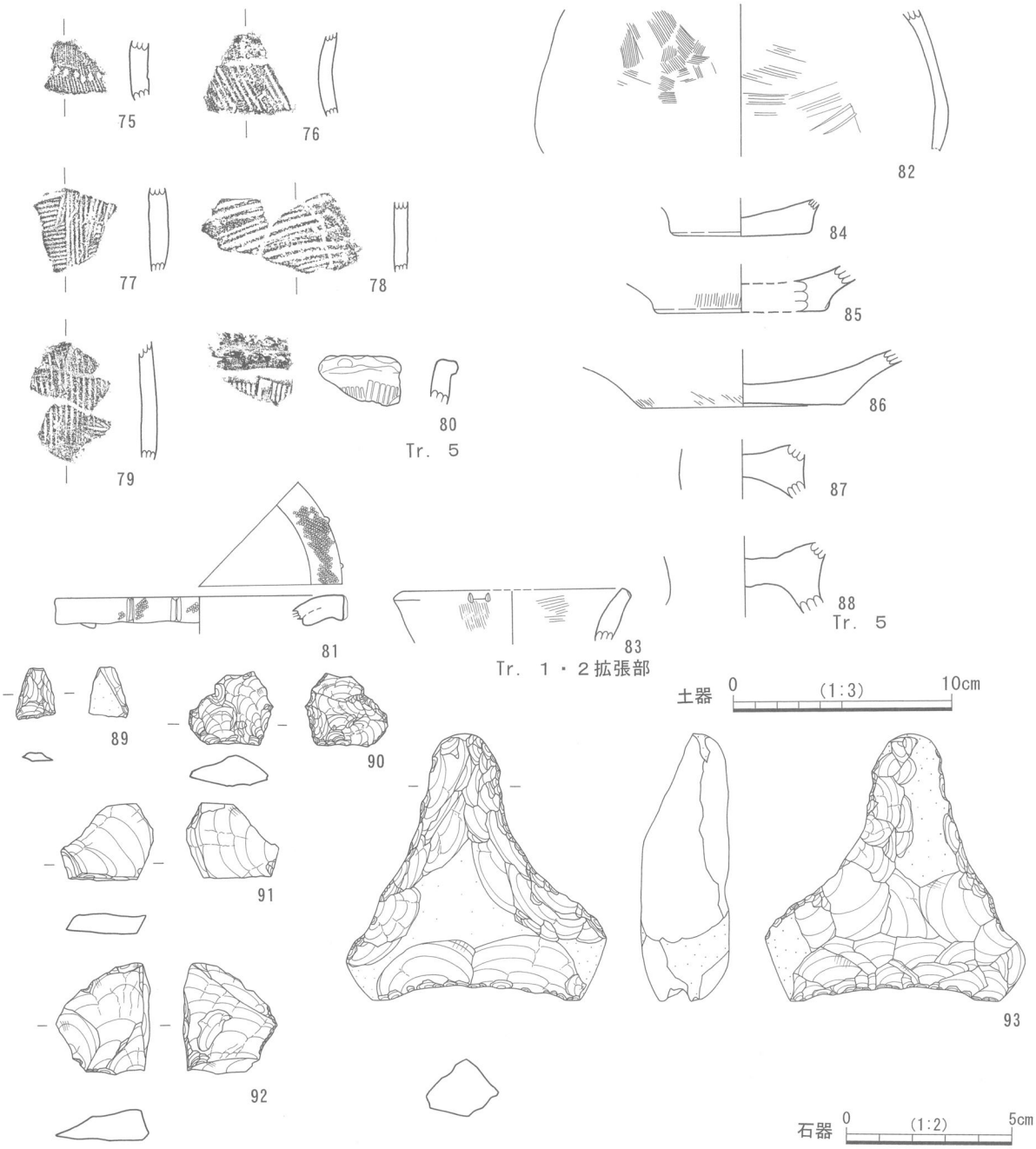
SP78　Ｄ４グリッド、SB15の南側に位置するSP78（第24・54図）より弥生土器壺あるいは深鉢の底部片（67）が出土した。平底であり、外面は条痕文が施されている。

(6)　遺構外出土遺物（第58図，第８・９表，図版20・21）

ここでは包含層より出土した弥生時代に帰属する遺物ついて報告する。

①弥生土器

75は壺片で、縦ハケ調整の後、３個以上一組の刺突文を施している。76は白岩式土器の壺片で、外面には棒状工具による条痕文、内面には繊細な工具によるハケ調整が施されている。77は壺片で、櫛状工具による櫛描横線文を施した後、櫛状工具による縦線（垂下）文を施している。78は壺片で、横方向の条痕文を施している。79は白岩式土器の壺片で、外面には棒状工具による羽状条痕文が施されている。81は菊川式土器の壺口縁部破片であり、口縁部は折り返している。口縁端部には単節ＬＲ縄文を施した後、２本以上一組の棒状浮文を貼付けている。口縁部内面には単節ＬＲ縄文を巡らせている。82は白岩式土器の壺胴部片で、胴部は無花果形を呈する可能性が高い。外面には羽状を意識したハケ調整が施さ



第58図　蒲ヶ谷原遺跡遺構外出土遺物実測図

れ、内面には板ナデが施されている。84～86は壺底部片で、84・85は平底、86は僅かな上げ底である。

80は確認調査のTr. 5から出土した白岩式土器の深鉢口縁部片であり、口縁部はL字形に折り返し、端部には押圧が施されている。口縁端部の下位には、棒状工具による条痕文が施されている。88もTr. 5から出土した台付甕片である。83はTr. 1・2拡張部から出土した壺口縁部で、口縁端部にはキザミ目が施されている。内・外面ともにハケ調整が施される。

②石器

剥片　黒耀石(こくようせき)製（90）、粘板岩(ねんばんがん)製（89）と珪質凝灰岩(けいしつぎょうかいがん)製（91・92）が出土している。1.6～3.3cm程度の剥片である。

用途不明石器　93は中粒砂岩(ちゅうりゅうさがん)製の遺物で、三叉形に加工されている用途不明製品である。全長8.1cm、幅7.9cm、厚さ2.7cm、重量121ｇをはかる。

3　自然科学分析

(1)　放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

①はじめに

蒲ヶ谷原遺跡から出土した炭化材の加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を実施した。

②試料と方法

試料は、SB15から採取した炭化材（カマツカ）１点（PLD-2950）、SP23から採取した炭化材（シイノキ属）１点（PLD-2951）、SB07・08から採取した炭化材（マツ属複維管束亜属）１点（PLD-2952）、SB15から採取した炭化材（ヒサカキ）１点（PLD-2953）、SB07・08中央部から採取した炭化材（ハイノキ属）１点（PLD-2954）、SB15壁溝内から採取した炭化材（ヒノキ）１点（PLD-2955）の併せて６点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（ＡＭＳ）にて測定した。測定した^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した^{14}Ｃ濃度を用いて^{14}Ｃ年代を算出した。

③結果

表４に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}Ｃ年代値（yrBP）の算出は、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}Ｃ年代が、その^{14}Ｃ年代誤差範囲内に入る確率が68％であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}Ｃ年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}Ｃ年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}Ｃ年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10％未満についてはその表示を省略した。１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

暦年代較正は約二万年前からＡＤ1,950年までが有効であり、該当しないものについては^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を*****またはModernと表記した。

第４表　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	δ13C (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2950 (AMS)	炭化材 (カマツカ) SB15	-27.9	235±35	cal AD 1,655	cal AD 1,640 - 1,670 (63.6%) cal AD 1,780 - 1,800 (34.4%)
PLD-2951 (AMS)	炭化材 (シイノキ属) SP23	-25.8	2,065±40	cal BC 85 cal BC 55	cal BC 155 - 130 (16.8%) cal BC 115 - 40 (76.8%)
PLD-2952 (AMS)	炭化材 (マツ属複維管束亜属) SB07・08	-29.7	-550±35	Modern	*****
PLD-2953 (AMS)	炭化材 (ヒサカキ) SB15	-27.9	2,020±40	cal BC 40 cal BC 30 cal BC 20 cal BC 10 cal BC 0	cal BC 55 - cal AD 25 (91.1%)
PLD-2954 (AMS)	炭化材 (ハイノキ属) SB07・08中央	-29.6	2,080±40	cal BC 90 cal BC 75 cal BC 60	cal BC 165 - 130 (28.3%) cal BC 120 - 45 (71.7%)
PLD-2955 (AMS)	炭化材 (ヒノキ) SB15壁溝内	-27.0	2,070±40	cal BC 85 cal BC 80 cal BC 55	cal BC 155 - 130 (18.8%) cal BC 120 - 40 (77.2%)

④考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の^{14}C年代』３-20頁

Stuiver, M. and Reimer, P. J., 1993, 'Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program', "*Radiocarbon*", 35, p.215-230.

Stuiver,M.,Reimer,P.J.,Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.SHughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M., 1998, ' INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP', "*Radiocarbon*", 40, p.1041-1083.

(2) 炭化材の樹種同定

植田　弥生（パレオ・ラボ）

①はじめに

ここでは、蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居跡（５点）と柱穴（１点）から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。なお、同一試料を用いて加速器質量分析法を用いて放射性炭素年代測定が実施されている。

②試料と方法

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を拡大し、観察と写真撮影を行った。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製JSM-T100型）に挿入した。

なお、同定した炭化材の残り破片は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

③結果

同定結果の一覧と炭化材の形状などを、第５表に示した。

竪穴住居SB15から採取された３点の炭化材は、落葉広葉樹のカマツカ、常緑広葉樹のヒサカキ、針葉樹のヒノキであった。竪穴住居SB07・08内出土の１点は落葉性と常緑性の種を含む広葉樹のハイノキ属であり、SB07・08出土の１点は針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。柱穴SP23出土の１点は、常緑広葉樹のシイノキ属であった。

以下に観察した材組織の特徴を記載し、３方向の材組織の写真を提示した（写真28・29）。記載は、分類配列順に記す。

A　マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　写真28　1a-1c

主な軸方向要素は仮道管からなる針葉樹材である。垂直と水平の樹脂道があり、晩材の量は多く、垂直樹脂道は晩材部に多く分布していた。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には放射仮道管が１層以上あり、有縁壁孔対や壁内に突起状の肥厚が認められたが、内腔に張り出た形状は判らない。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツが属し、暖帯から温帯下部に生育する常緑針葉樹である。特にアカマツは人間活動地域との関係が深く、開発地周辺の特に乾燥地に成立する二次林の主要樹となる。クロマツは海岸部に多く分布する。

B　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　写真28　2a-2c

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は少なく、早材から晩材への移行は緩やかである。放射柔細胞の内壁は平滑で、分野壁孔の孔口はやや斜めに細く開き、壁孔縁は広い典型的なヒノキ型であり、１分野に１～２個、おもに２個が水平に配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれている。

C　シイノキ属　*Castanopsis*　ブナ科　写真28　3a-3c

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し、中型の管孔が放射状に数層分布した後、やや急に径を減じ晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性である。年輪始めの管孔が間隔を開けて配置していることからクリとは異なりシイノキ属であることが判る。

第５表　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材樹種同定結果一覧

遺　構		出土位置	樹　種	年代測定番号	備　考
竪穴住居	SB15		カマツカ	PLD-2950	直径1.1cm丸木の半割り状の材、(近世以降)
			ヒサカキ	PLD-2953	破片
		壁溝内	ヒノキ	PLD-2955	節部を含む破片
竪穴住居	SB07・08	中　央	ハイノキ属	PLD-2954	推定直径２～３cmの破片
竪穴住居	SB07・08		マツ属複維管束亜属	PLD-2952	磨耗した破片、(現在)
柱穴	SP23		シイノキ属	PLD-2951	破片

シイノキ属は暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイと福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。

D　カマツカ　*Pourthiaea villosa*（Thunb.）Decaisne var. *laevis*（Thunb.）Staf.

バラ科ナシ亜科　写真29　4a-4c

小型の管孔が主に単独で分布し、年輪始めの管孔はやや大きく接線状に配列し、木部柔細胞が多く分布している散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にかすかならせん肥厚がある。放射組織は異性、主に４細胞幅、上下端に方形・直立細胞が単列で１～３細胞高ある。

年輪始めの管孔がやや大きく目立ち、放射組織の細胞幅が主に４細胞幅になる事から、ナシ亜科の材の中でカマツカと特定できると判断した。

カマツカは暖帯から温帯の山野に普通の落葉低木である。材は重硬・強靭で割裂しにくい。

E　ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb.　**ツバキ科　写真29　5a-5c**

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、主に２細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。

ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。

F　ハイノキ属　*Symplocos*　**ハイノキ科　写真29　6a-6c**

非常に小型の管孔が均一に分布する散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が20～30本の階段穿孔である。放射組織は異性、１～４細胞幅、単列部は直立細胞からなり、道管との壁孔は小型で交互状に多数ある。

ハイノキ属は落葉性または常緑性の低木や高木がある。北海道から九州の暖帯・温帯の山地や谷間に生育するサワフタギ、近畿地方以西の暖帯の山地に生育するハイノキ、関東地方以西の暖帯に生育するクロバイ、千葉県以西の照葉樹林に生えるミミズバイ・クロキなどがある。

④考察

蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居や柱穴から出土した炭化材６点の樹種を同定した結果、６点とも異なる樹種であった。その樹種は、針葉樹のヒノキ・マツ属複維管束亜属、常緑広葉樹のヒサカキ・シイノキ属、常緑性と落葉性を含むハイノキ属、落葉広葉樹のカマツカであり、検討試料数が少ないわりに多様な分類群が検出された。これらの炭化材試料は比較的小さな破片であるため、本来の用途の特定は困難であるが、竪穴住居や柱穴からの出土であることから、建築材・構築材と推測でき、燃料材や道具類の破片である可能性もあろう。いずれにせよ、この時期には針葉樹材と落葉および常緑の広葉樹材の多様な樹種が、生活に利用されていたことが判明した。また、このような多様な樹種が生育する森林が集落周囲に成立していたことが推測できる。

静岡県内では大井川以東に分布する登呂遺跡（静岡市）・山本遺跡（韮山町）・雌鹿塚遺跡（沼津市）など弥生時代後期の遺跡や、弥生時代中期後半・後期の有東遺跡（静岡市）などでは、出土木製品にス

ギが非常に多いことで有名である（山田1993）。しかし、当遺跡が所在する大井川以西に分布する遺跡の弥生時代の樹種利用に関する情報量は少なく不明瞭であるが、伊場遺跡（浜松市）・梶子遺跡（浜松市）・耳川遺跡（菊川町）・玉越遺跡（磐田市）・堀越ジョウヤマ遺跡（袋井市）の報告では、スギの優占使用傾向は確認できないかヒノキの出土例が目につく（山田1993，浜松市教委2002）。当遺跡においても同定数は少ないが、検出された針葉樹にスギはなく、ヒノキであった点は示唆的である。

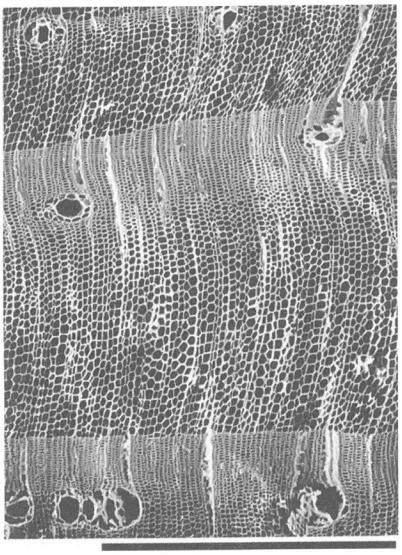
なお、発掘状況からは弥生時代中期後半～後期前半と推定されているが、測定番号PLD－2950とPLD－2952の放射性炭素年代値は大きく異なる値が報告された。PLD－2950は、暦年代較正値calＡＤ１，655で近世に比定される値であった。この炭化材樹種は落葉広葉樹のカマツカで、直径約１㎝の細い枝材であり、ほかの炭化材試料に比べ非常に固く割れ口は光沢があったことから、製炭材の可能性がある。

また、PLD－2952は、樹種はマツ属複維管束亜属であり、ほかの炭化材試料とは異なり磨耗した破片であった。年代値は現世を示すModernであり、周辺からの流入の可能性が高い。

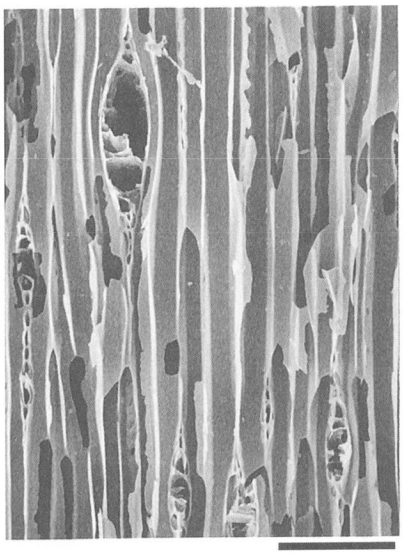
引用文献

山田昌久　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第１号　1-242頁

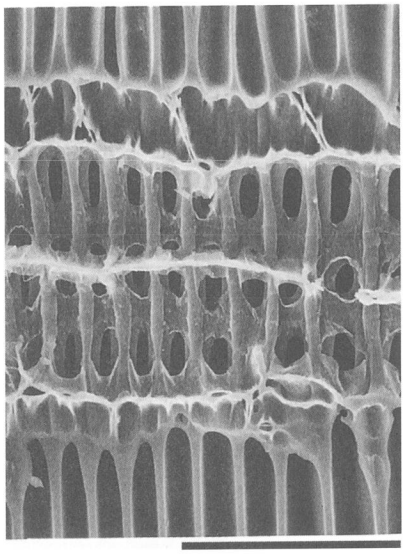
浜松市教育委員会　2002　『伊場遺跡遺物編』８（木製品Ⅱ・金属器・骨角器）（伊場遺跡発掘調査報告書　第10冊）



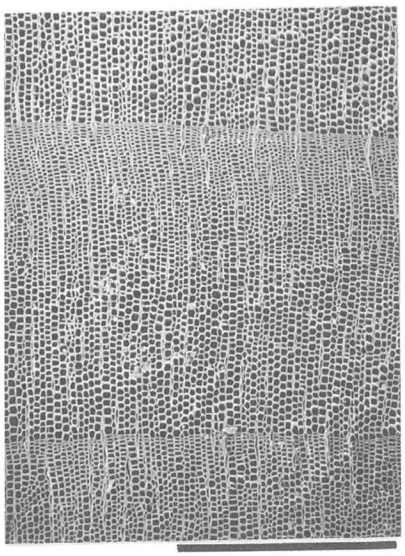
1a　マツ属複維管束亜属（横断面）
bar:1.0mm



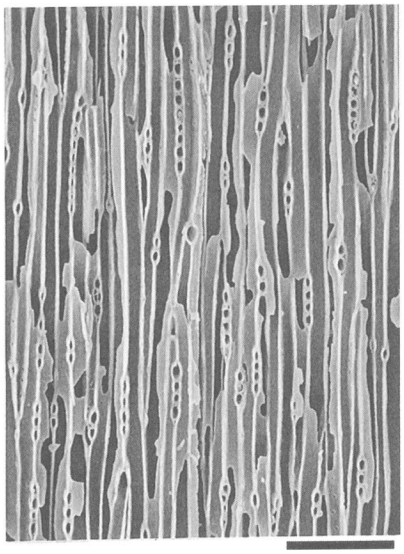
1b　マツ属複維管束亜属（接線断面）
bar:0.1mm



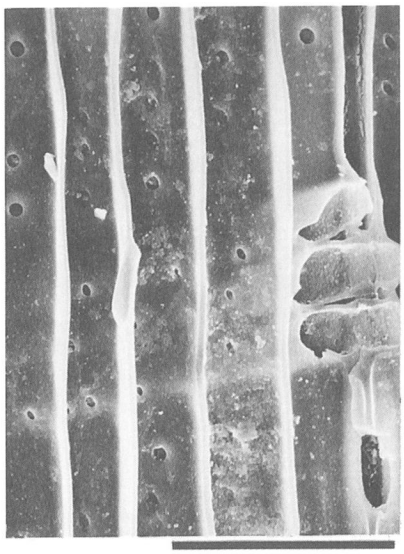
1c　マツ属複維管束亜属（放射断面）
bar:0.05mm



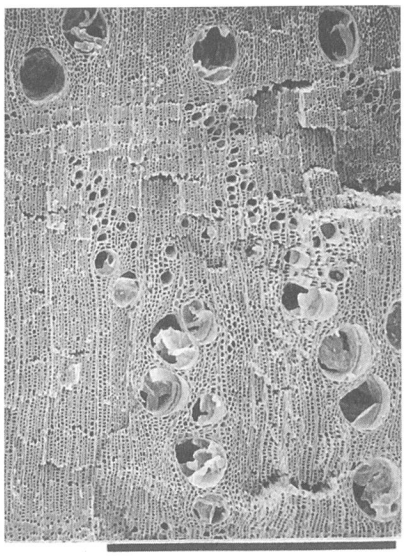
2a　ヒノキ（横断面）　bar:0.5mm



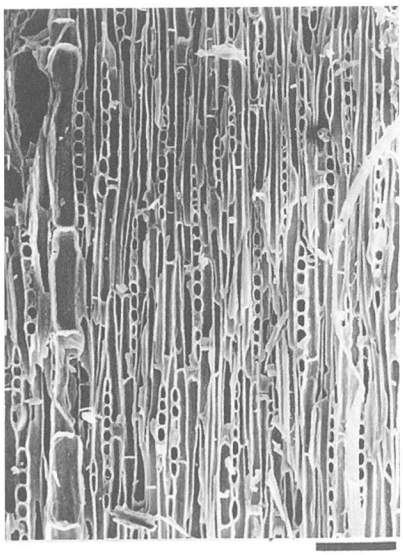
2b　ヒノキ（接線断面）　bar:0.1mm



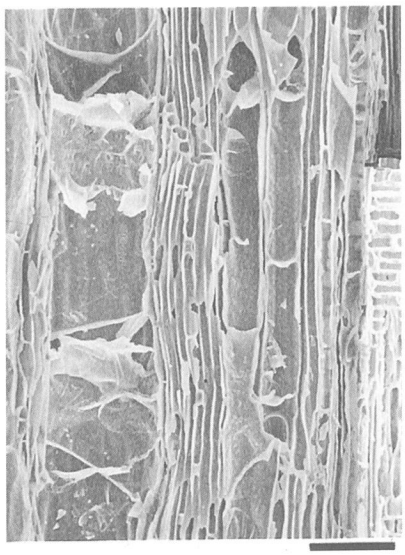
2c　ヒノキ（放射断面）　bar:0.05mm



3a　シイノキ属（横断面）　bar:1.0mm

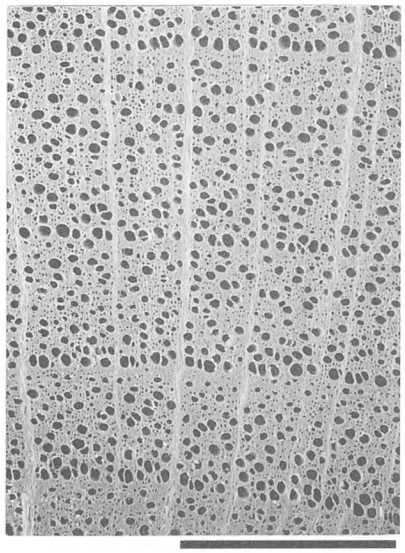


3b　シイノキ属（接線断面）bar:0.1mm

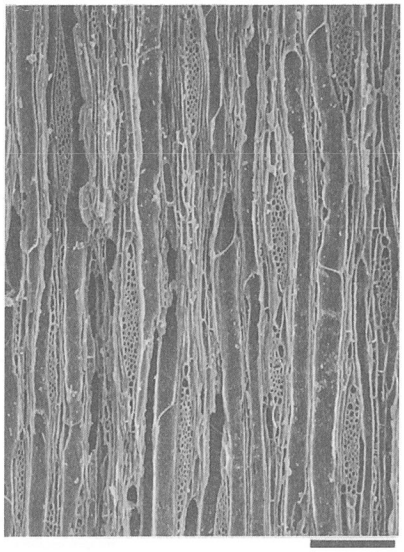


3c　シイノキ属（放射断面）bar:0.1mm

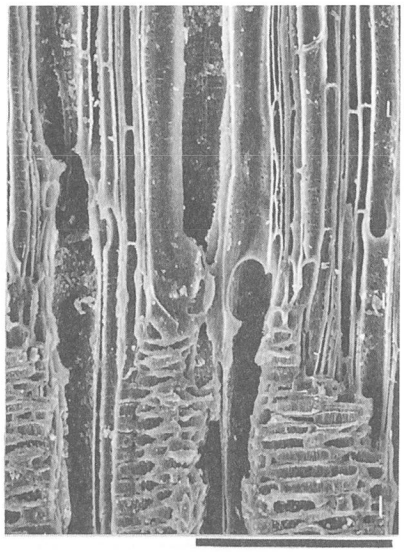
第28図　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真①



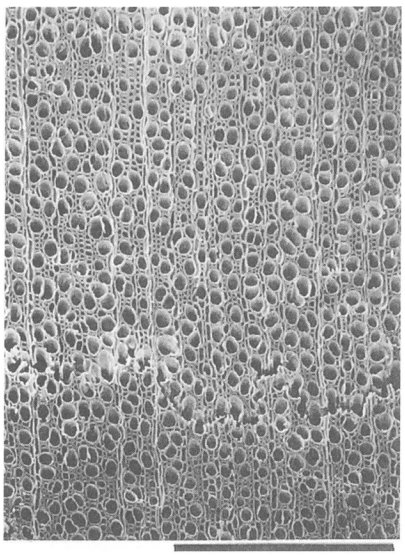
4a　カマツカ（横断面）　bar:0.5mm



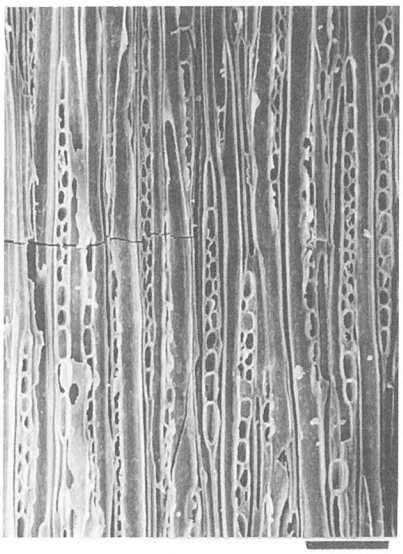
4b　カマツカ（接線断面）　bar:0.1mm



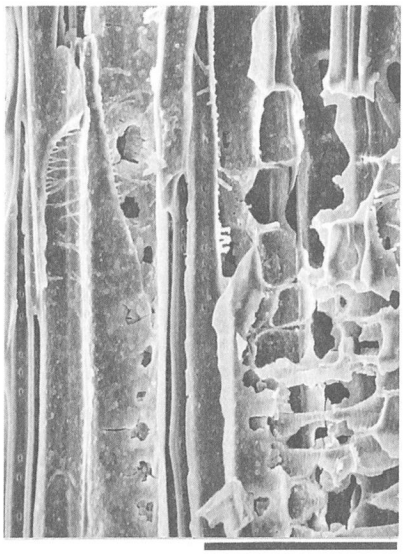
4c　カマツカ（放射断面）　bar:0.1mm



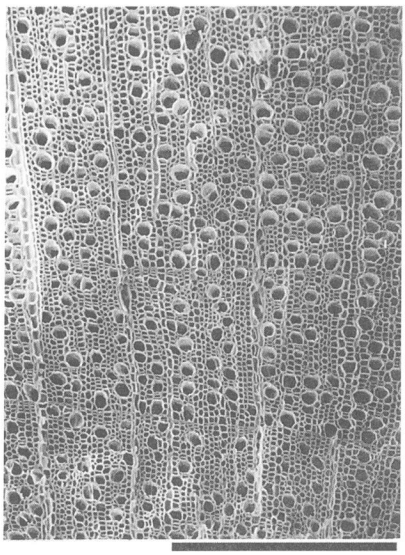
5a　ヒサカキ（横断面）　bar:0.5mm



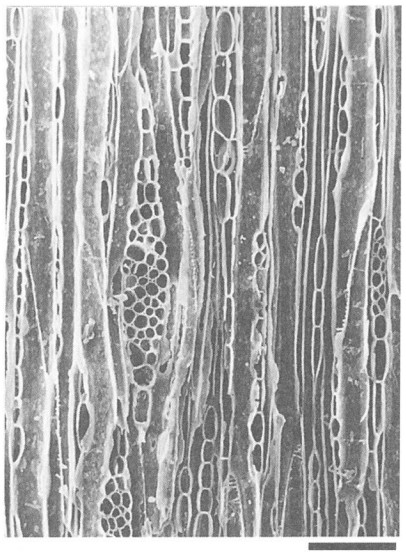
5b　ヒサカキ（接線断面）bar:0.1mm



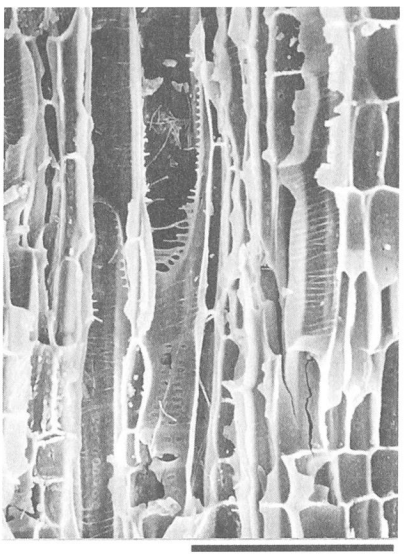
5c　ヒサカキ（放射断面）bar:0.1mm



6a　ハイノキ属（横断面）　bar:0.5mm



6b　ハイノキ属（接線断面）bar:0.5mm



6c　ハイノキ属（放射断面）bar:0.5mm

第29図　蒲ヶ谷原遺跡出土炭化材の材組織走査電子顕微鏡写真②

4　観察表

第６表　蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居の概要

住居番号	挿図	図版	竪穴住居			主柱穴			時期	備考
			平面形	長軸方向	規模（南北×東西）	長辺	短辺	柱穴の規模		
SB01	26 27	3	楕円？	東西？	4.2以上×3.1以上	3.10	1.4以上	0.30～0.35	中期後半～後期前半	
SB02	26 27	3	楕円？	東西？	6.2以上×4.0以上	3.20	2.0以上	0.30～0.35	中期後半～後期前半	貯蔵穴(SF01)あり。
SB03	26 27	－	楕円？	東西？	4.2以上×1.3以上	2.80	0.5以上	0.25	中期後半～後期前半	
SB04	28	3	楕円？	東西？	0.35以上×3.60以上	－	－	－	中期後半～後期前半	
SB05	29	3	楕円？	南北？	不明	1.8以上	2.30	0.30～0.50	中期後半～後期前半	
SB06	30	3・4	楕円？	東西？	不明	2.10	2.00	0.25～0.4	中期後半～後期前半	焼失住居の可能性あり。
SB07	31 巻頭1	5・6	楕円	南北	7.6m前後×5.7m前後	3.30	2.80	0.40～0.50	中期後半	SB08より古い。 貯蔵穴(SF02)あり。 炉跡あり。
SB08	31 巻頭1	5・6	楕円	南北	8.0×6.7	3.30	3.15	0.35～0.5	中期末～後期前半	SB07より新しく、SH02より古い。 貯蔵穴（SF03）あり。炉跡あり。
SB09	34	4	楕円？	南北？	不明	2.10	2.00	0.20～0.25	中期後半～後期前半	炉跡あり。
SB10	35	7	楕円？	南北？	不明	3.90	3.40	0.30～0.60	中期後半～後期前半	
SB11	36	8	楕円？	東西？	2.35以上×3.3以上	－	－	0.25～0.35	中期後半～後期前半	貼床。
SB12	38	－	楕円？	東西？	不明	2.70	2.50	0.30～0.60	中期後半～後期前半	
SB13	39	－	楕円？	南北？	不明	2.65 (平均)	2.55 (平均)	0.30～0.50	中期後半～後期前半	
SB14	39	－	楕円？	南北？	不明	3.50	2.90	0.30～0.40	中期後半～後期前半	
SB15	40	8・9	楕円	東西	7.2×6.3	3.25	2.65	0.25～0.30	中期後半～後期前半	排水溝(SD03)が伴う可能性あり。 炉跡あり。貼床。
SB16	42	－	楕円？	南北？	不明	3.20	2.40	0.30～0.40	中期後半～後期前半	
SB17	43	－	楕円？	東西？	不明	2.10	1.80	0.25～0.30	中期後半～後期前半	
SB18	44	－	楕円？	不明	不明	2.00	2.00	0.25～0.30	中期後半～後期前半	

単位はm。

第７表　蒲ヶ谷原遺跡の掘立柱建物の概要

遺構番号	挿図	図版	長軸方位	柱間数	規模				柱穴規模	時期	備考
					桁行	梁間	面積	桁側柱間			
SH01	45	3・10	南北	1×2	2.50	2.20～2.50	5.9	1.25	0.35～0.5	中期後半～後期前半	
SH02	46	10	南北	1×2	4.10	3.80	15.6	2.05	0.35～0.55	後期前半	SB08より新しい。
SH03	47	11	東西	1×2	5.10	3.60	18.4	2.55	0.3～0.45	中期後半～後期前半	
SH04	47 48	11	北西－南東	1×1	4.40	3.40	15.0	2.20	0.3～0.7	中期後半～後期前半	楼閣などの可能性あり。 1×2間の可能性あり。
SH05	49	12	東西	1×2	3.70	2.90	10.7	1.85	0.3～0.55	中期後半～後期前半	SH06より新しい。
SH06	49	12	東西	1×3	3.60	2.30	8.3	1.25	0.35～0.6	中期後半～後期前半	SH05より古い。
SH07	50	12	東西	1×2	5.00	3.60	18.5	2.50	0.35～0.6	中期後半～後期前半	
SH08	50	12	東西	1×2	4.50	3.85	17.3	2.25	0.4～0.5	中期後半～後期前半	

単位はm、㎡。桁側柱間は平均値。桁側柱間は、平均距離。

第８表　蒲ヶ谷原遺跡出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構名	種類	器種	特徴		法量（cm）				胎土	焼成	色調	残存部位	残存率(%)	様式	備考
						外面	内面	口径	底径	最大径	器高							
7－1	23	14	(倒木跡)	縄文	深鉢	列点文	条痕文				(5.4)	密	不良	灰黄褐	口縁部	5	粕畑式	
7－2	23	14	(倒木跡)	縄文	深鉢	列点文	条痕文				(4.9)	密	不良	灰黄褐	胴部？	5	粕畑式	
8	23	14	Tr. 2	縄文	深鉢		ミガキ		5.7		(3.0)	密	良	にぶい黄橙	底部	10		底部網代痕
10	25	14	SB01 (SF01内)	弥生	壺				6.0		(1.8)	密	良	にぶい橙	底部	20	白岩～菊川式	
15	33	17	SB07・08	弥生	壺	ハケ（羽状？）					(2.7)	密	良	褐灰	胴部？	5	白岩～菊川式	
16	33	17	SB07・08	弥生	壺	棒状浮文 三角連繋文					(2.2)	密	良	にぶい黄褐	口縁部	5	白岩式	
17	33	17	SB07・08	弥生	壺	櫛描横線文					(5.7)	密	良	灰黄褐	胴部？	5	白岩～菊川式	
18	33	17	SB07・08	弥生	壺	櫛描横線文 縦線(垂下)文					(4.8)	密	良	灰黄褐	胴部？	5	白岩式	
19	33	15・17	SB07・08	弥生	小型壺	縦ハケ 押圧横線文 櫛刺突文 羽状ハケ 板ナデ	しぼり		4.2	11.2	(12.5)	密	良	にぶい黄橙	頸～底部	100	白岩式新～菊川式古	(有東式)
20	33	15・17	SB07・08	弥生	小型壺		横ハケ			12.4	(8.3)	密	良	橙	胴部	40	白岩式新～菊川式古	(有東式)
21	33	15・17	SB07・08	弥生	壺			13.0			(11.9)	密	不良	にぶい橙	口縁～上胴部	40	白岩式新～菊川式古	
22	33	16・17	SB07・08	弥生	壺	縦ナデ 刺突文		10.2			(9.9)	密	不良	にぶい黄橙	口縁～頸部	20	白岩式新～菊川式古	(有東式)
23	33	16・17	SB07・08	弥生	壺	縦ミガキ	ナデ		5.9		(4.2)	密	良	にぶい橙	底部	90	白岩式	
24	33	16・17	SB07・08	弥生	壺	ハケ	ハケ		5.9		(4.1)	密	良	にぶい橙	底部	90	白岩式	上げ底
25	33	16	SB07・08	弥生	壺	ハケ			8.0		(1.7)	密	不良	にぶい黄橙	底部	25	白岩～菊川式	
26	33	16・17	SB07・08	弥生	壺	ハケ			6.1		(5.6)	密	不良	にぶい橙	底部	20	白岩式	
27	33	16・17	SB07・08	弥生	壺				7.2		(3.4)	密	不良	にぶい黄橙	底部	90	白岩～菊川式	底部一部凹む
28	33	16	SB07・08	弥生	壺				9.3		(3.3)	密	良	にぶい黄橙	底部	10	白岩～菊川式	
29	33	16	SB07・08	弥生	壺				6.1		(2.8)	密	良	にぶい橙	底部	20	白岩～菊川式	
30	33	16	SB07・08	弥生	台付甕						(2.5)	密	不良	にぶい黄	接合部	40	白岩～菊川式	
31	33	16	SB07・08	弥生	台付甕						(3.4)	密	良	浅黄	接合部	40	白岩～菊川式	
32	33	－	SB07・08	弥生	台付甕						(6.0)	密	良	にぶい黄橙	脚台部	10	白岩～菊川式	
36	37	14	SB11	弥生	壺	櫛描横線文 櫛描波状文 縦ハケ後ナデ					(6.0)	密	良	にぶい黄橙	頸部	5	白岩～菊川式	
38	41	18・19	SB15	弥生	高杯	縦ミガキ	(杯部)ミガキ (脚部)しぼり 指押え	25.0	12.3		18.9	密	不良	にぶい黄橙		35	白岩式新～菊川式古	
39	41	18・19	SB15	弥生	壺	櫛描横線文 研磨帯 ヘラによる直線文	板ナデ				(2.8)	密	良	褐灰	胴部？	5	白岩式	
40	41	18・19	SB15	弥生	鉢？	ハケ	ハケ	16.0			(4.5)	密	良	灰黄褐	口縁部	8	白岩式	
41	41	18・19	SB15	弥生	深鉢か甕	横方向の条痕文					(1.3)	密	良	灰黄褐	口縁部	5	白岩式	口縁端部にキザミ
42	41	18・19	SB15	弥生	甕	ハケ	ハケ 横ハケ 指押え	16.0		14.0	(14.0)	密	不良	にぶい橙	口縁～胴部	10	白岩式新～菊川式古	口縁端部にキザミ
43	41	18・19	SB15	弥生	甕	ハケ	ハケ 板ナデ？	20.6			(9.4)	密	良	にぶい黄橙	口縁部	40	白岩式新～菊川式古	口縁端部にキザミ
44	41	18・19	SB15	弥生	甕	ハケ	ハケ 指押え	26.0			(6.2)	密	良	にぶい橙	口縁部	15	白岩式新～菊川式古	口縁端部にキザミ
45	41	18・19	SB15	弥生	甕	ハケ	指押え ハケ			19.9	(14.7)	密	良	にぶい橙	口縁～胴部	10	白岩式新～菊川式古	
46	41	17・18	SB15	弥生	台付甕	ハケ	板ナデ		9.2		(9.4)	密	不良	にぶい橙	脚台部	70	白岩式新～菊川式古	
47	41	18・19	SB15	弥生	台付甕	ハケ	ハケ		8.2		(8.0)	密	良	橙	脚台部	60	白岩～菊川式	
51	53	－	SD02	弥生	壺		ハケ				(3.5)	密	不良	にぶい黄橙	口縁部	5	白岩～菊川式	
52	53	－	SD02	弥生	台付甕	ハケ					(2.8)	密	良	にぶい橙	接合部	25	白岩～菊川式	スス付着
53	56	19	SD03	弥生	壺	縦線(垂下)文 櫛描横線文					(9.2)	密	良	にぶい黄橙	頸部	5	白岩式古	黒斑
54	56	19	SD03	弥生	壺	横・斜め方向の条痕文					(4.0)	密	良	にぶい橙	胴部	5	白岩式古	

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構名	種類	器種	特徴		法量（cm）				胎土	焼成	色調	残存部位	残存率(%)	様式	備考
						外面	内面	口径	底径	最大径	器高							
55	56	20	SD03	弥生	小型壺	縦ハケ →縦ミガキ 縦ミガキ	(上部)しぼり (下部)ミガキ				(2.9) (3.9)	密	良	灰黄褐	頸～胴部	5	白岩式新～菊川式古	輪積み痕
56	56	20	SD03	弥生	小型壺		板ナデ				(7.5)	密	良	にぶい黄橙	頸～胴部	20	白岩式新～菊川式古	輪積み痕
57	56	19	SD03	弥生	甕	ハケ		25.6			(3.2)	密	良	にぶい黄橙	口縁部	5	白岩～菊川式	口縁端部にキザミスス付着
58	56	20	SD03	弥生	台付甕	ハケ 口唇部 羽状刺突文	板ナデ		8.1		(6.8)	密	良	にぶい黄橙	脚台部	90	白岩～菊川式	
59	56	19	SD03	弥生	壺	ハケ後→ 横ミガキ	ハケ 底部ミガキ		6.3		(4.7)	密	良	灰黄	底部	50	白岩～菊川式	
60	56	19	SD03	弥生	壺	ハケ	ハケ		5.8		(6.8)	密	良	灰黄	底部	100	白岩～菊川式	
61	57	20	SP07	弥生	壺	ハケ					(6.3)	密	良	にぶい黄橙	胴部？	5	白岩～菊川式	
62	57	－	SP66	弥生	壺	単節ＲＬ縄文	指押え				(3.8)	密	良	にぶい橙	胴部？	5	菊川式	
63	57	－	SP11 (SH06)	弥生	小型壺					14.2	(4.0)	密	良	にぶい黄橙	胴部	5	白岩～菊川式	
64	57	20	SP50	弥生	壺か高杯		板ナデ？				(4.6)	密	良	にぶい黄橙	胴部か杯部下半	20	白岩～菊川式	輪積み痕
65	57	－	SP21 (SH08)	弥生	壺				5.0		(1.3)	密	良	浅黄	底部	30	白岩～菊川式	
66	57	20	SP56	弥生	壺				9.0		(1.9)	密	不良	にぶい黄橙	底部	40	白岩～菊川式	
67	57	20	SP78	弥生	深鉢か壺	条痕文	ナデ		7.0		(2.2)	密	良	にぶい橙	底部	20	白岩式	
68	57	－	SP64	弥生	壺						(2.9)	密	良	にぶい黄橙	口縁部	5	白岩～菊川式	
69	57	－	SP25 (SB12)	弥生	壺						(3.2)	密	良	にぶい黄橙	口縁～頸部	5	白岩～菊川式	
70	57	－	SP49	弥生	台付甕	縦ハケ					(4.4)	密	良	にぶい赤褐	接合部	15	白岩～菊川式	
71	57	－	SP18	弥生	高杯か						(1.8)	密	良	にぶい橙	接合部	5	白岩～菊川式	
75	58	20	包含層	弥生	壺	縦ハケ 刺突文					(2.7)	密	良	灰黄褐	胴部？	5	白岩式新～菊川式古	黒斑(丸子式)
76	58	20	包含層	弥生	壺	条痕文	ハケ				(3.7)	密	良	にぶい橙	胴部？	5	白岩式	
77	58	20	包含層	弥生	壺	櫛描横線文 縦線(垂下)文					(3.7)	密	良	にぶい橙	胴部？	5	白岩式	
78	58	20	包含層	弥生	壺	条痕文					(3.1)	密	良	にぶい橙	胴部？	5	白岩式	
79	58	20	包含層	弥生	壺	羽状条痕文	ハケ				(5.4)	密	良	にぶい橙	胴部？	5	白岩式	
80	58	21	Tr. 5	弥生	深鉢	条痕文					(2.0)	密	良	にぶい橙	口縁部	5	白岩式	
81	58	20	包含層	弥生	壺	単節ＬＲ縄文 棒状浮文	単節ＬＲ縄文	13.0			(1.4)	密	良	灰黄褐	口縁部	5	菊川式	折り返し口縁
82	58	20	包含層	弥生	壺	ハケ	板ナデ			18.4	(6.6)	密	良	暗灰黄	胴部	10	白岩式	
83	58	21	Tr. 1・2 拡張部	弥生	壺	ハケ	ハケ				(2.4)	密	良	にぶい黄橙	口縁部	5	白岩～菊川式	口縁端部にキザミ
84	58	20	包含層	弥生	壺				6.4		(1.7)	密	不良	灰黄	底部	50	白岩～菊川式	
85	58	20	包含層	弥生	壺	ハケ			7.9		(2.1)	密	良	黄灰	底部	25	白岩～菊川式	
86	58	20	包含層	弥生	壺	ハケ	ハケ		9.3		(2.5)	密	良	にぶい黄橙	底部	50	白岩～菊川式	
87	58	－	包含層	弥生	台付甕						(2.4)	密	不良	にぶい橙	接合部	100	白岩～菊川式	
88	58	21	Tr. 5	弥生	台付甕						(3.2)	密	不良	にぶい黄橙	接合部	50	白岩～菊川式	

※Tr. は確認調査時の試掘溝番号。

第９表　蒲ヶ谷原遺跡出土石器観察表

遺物番号	挿図	図版	遺構名	種　類	材　質	特　徴	備　考
9	23	14	包含層	石棒	中粒砂岩	残存長14.3cm、頭部長4.5cm、頭部直径7.8cm、括れ部長3.0cm、括れ部直径7.5、身部残存長6.8cm、身部直径8.6cm、重量1440ｇ。括れ部と頭部は研磨調整。身には自然面残存。	叩石として転用か？
11	25	15	SB02内SF01	剥片石器	中粒砂岩	全長5.1cm、幅5.7cm、厚さ0.9cm、重量32ｇ	片面に自然面残る。
12	25	15	SB02内SF01	剥片石器	中粒砂岩	全長5.9cm、幅5.4cm、厚さ1.1cm、重量53ｇ	片面に自然面残る。
13	25	15	SB02内SF01	剥片石器	中粒砂岩	全長5.3cm、幅5.8cm、厚さ2.5cm、重量112ｇ	両面に自然面残る。
14	25	15	SB02内SF01	剥片石器	流紋岩？	全長6.5cm、幅6.5cm、厚さ1.3cm、重量69ｇ	片面に自然面残る。
33	33	17	SB07・08	石鏃	粘板岩	全長1.9cm、幅1.65cm、厚さ４㎜、重量約１ｇ。基部凹基式。	
34	33	17	SB07・08	剥片石器	中粒砂岩	全長7.8cm、幅5.1cm、厚さ1.2cm、重量51ｇ	片面に自然面残る。
35	33	17	SB07・08	剥片	粘板岩	最大長2.7cm、最大幅2.1cm、厚さ6.5㎜、重量４ｇ	
37	41	19	SB15	叩石	含礫粗粒砂岩	全長9.7cm、幅4.3cm、厚さ2.8cm、重量187ｇ	両小口に敲打痕あり。
48	41	19	SB15	剥片石器	中粒砂岩	全長4.6cm、幅4.9cm、厚さ1.3cm、重量35ｇ	片面に自然面残る。
49	41	19	SB15	剥片石器	中粒砂岩	全長7.1cm、幅7.2cm、厚さ1.1cm、重量53ｇ	
50	41		SB15	剥片	中粒砂岩	全長3.4cm、幅3.05cm、厚さ４㎜、重量３ｇ	片面に自然面残る。
72	57	21	SP56	叩石	粗粒砂岩	全長11.7cm、幅6.5cm、厚さ4.2cm、重量462ｇ	両小口および片側側面に敲打痕あり。
73	57	21	SP72	叩石	チャート	全長8.5cm、最大幅5.4cm、厚さ1.8cm、重量131ｇ	小口の片側のみに敲打痕あり。
74	57	21	SP60	剥片	黒耀石	全長1.95cm、幅1.55cm、厚さ７㎜、重量2.5ｇ	
89	58	21	包含層	剥片	粘板岩	全長1.6cm、幅1.2cm、厚さ３㎜、重量0.6ｇ	片面に自然面残る。
90	58	21	包含層	剥片	黒耀石	全長2.2cm、幅2.5cm、厚さ9.5㎜、重量4.5ｇ	
91	58	21	包含層	剥片	珪質凝灰岩	全長2.3cm、幅2.8cm、厚さ6.5㎜、重量４ｇ	
92	58	21	包含層	剥片	珪質凝灰岩	全長3.25cm、幅2.85cm、厚さ９㎜、重量10ｇ	
93	58	21	包含層	三叉形石器	中粒砂岩	全長8.1cm、幅7.9cm、厚さ2.7cm、重量121ｇ	一部に自然面残存。用途不明。

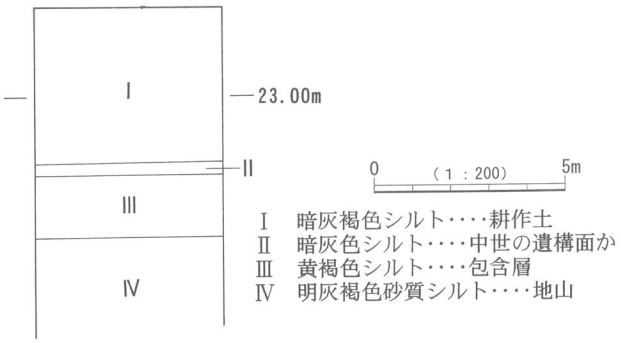
第３節　大溝遺跡

１　概要と基本土層（第59・60図）

(1)　概要

立地　大溝遺跡は、相良町須々木の駿河湾に面する丘陵の裏側の、南側に向かって緩やかに傾斜する斜面（谷部）に立地しており、現在は棚田や畑地として利用されている。この谷は須々木川が開析したものである。

大溝遺跡の近くには、遺跡はほとんど確認することはできず、東側の駿河湾に面する尾根上に、上ノ山古墳（第20図91）や向田古墳（90）などの数基の古墳や須々木遺跡(92)、雨ヶ谷坂遺跡(93)が確認されるのみである。相良町中央部の萩間川流域や、相良町南部の筬川流域と比較すると、遺跡の密度が非常に低いといえる。

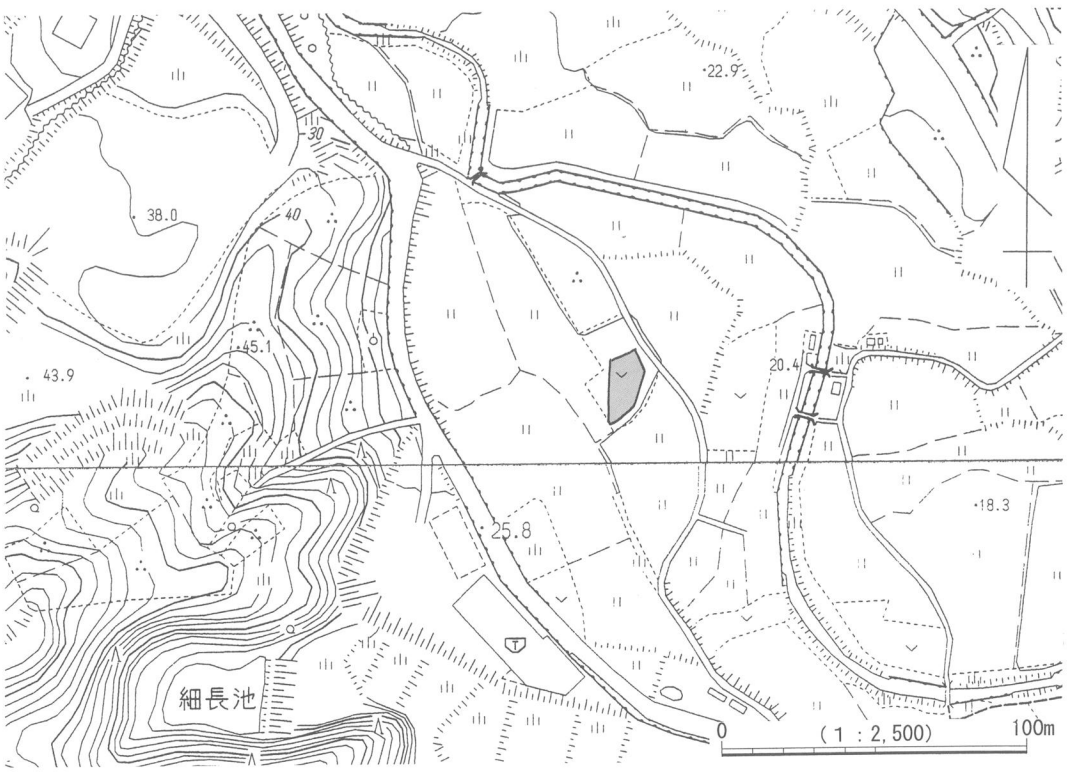


第59図　大溝遺跡基本土層図

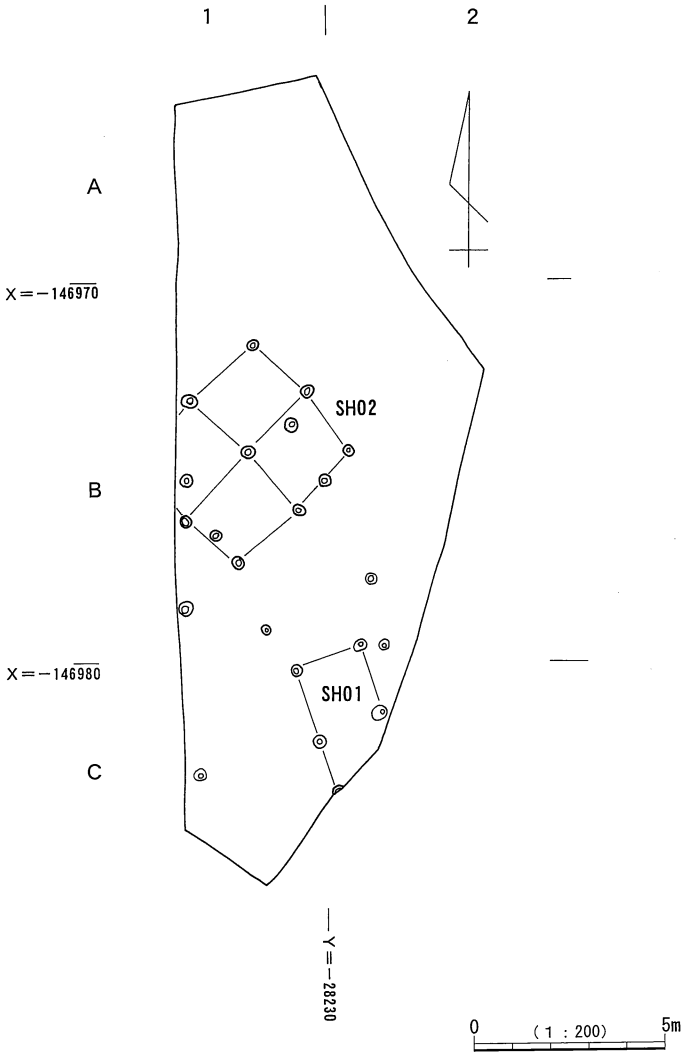
概要　大溝遺跡では、掘立柱建物２棟が出土した。

(2)　基本土層（第59図）

基本土層は、上層より、表土である現在の水田面・耕作土（Ⅰ層）、その下位に中世の遺構面の可能性がある暗灰色シルト層（Ⅱ層）、古墳時代終末期以降中世以前の包含層である黄褐色シルト層（Ⅲ層）、遺構が掘り込まれた明灰褐色砂質シルトの地山（Ⅳ層）へとつづく。



第60図　大溝遺跡の本調査対象範囲



第61図　大溝遺跡全体図

2　掘立柱建物

大溝遺跡では、掘立柱建物２棟と柱穴数基を確認した。調査区の南半部分で出土しており、遺跡は調査区外の南から南西側に広がると想定できる。

(1)　１号掘立柱建物（SH01，第61・62図，第10表，図版22・23）

概要　SH01はＢ１・Ｂ２、Ｃ１・Ｃ２グリッドに位置している。SH02との切り合い関係はない。

構造　SH01は長軸を南北に向ける。柱間は１×２間以上で、南側は調査区外である。規模は桁行3.4m以上、梁間1.9m、面積約6.4㎡以上である。桁側の柱間は北側から1.9m、1.4m以上である。柱穴は不整形な円形で、直径0.3～0.4mである。柱や柱痕が残存するものは確認できなかった。

出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がないことから、時期を決定することはできない。確認調査（Tr.６）や本調査で包含層より出土した土器をみると、古墳時代終末期～奈良時代と推測する須恵器や土師器が出土しており、SH01はその時期に比定できる可能性がある。

(2)　２号掘立柱建物（SH02，第63図，第10表，図版22・23）

概要　SH02はSH01と重複するような状況はない。

構造　南西隅部が調査区外であり、柱間は最低２間（北東－南西）×２間（北西－北東）で、総柱建物である。南隅角部柱穴の南西側にある柱穴が、この建物に伴うものと仮定すれば、２間（北東－南西）×３間（北西－南東）以上の総柱建物となる。

規模は、北東－南西がやや長く、桁行（北東－南西）4.2m以上、梁間（北西－南東）4.0m、面積16.8㎡をはかる。柱間の間隔は、桁側で北西側から2.1m、2.1m、梁側で北西側から2.0m、2.0mである。柱穴は不整形な円形であり、直径0.3～0.4mをはかる。柱や柱痕が残存するものは確認できなかった。

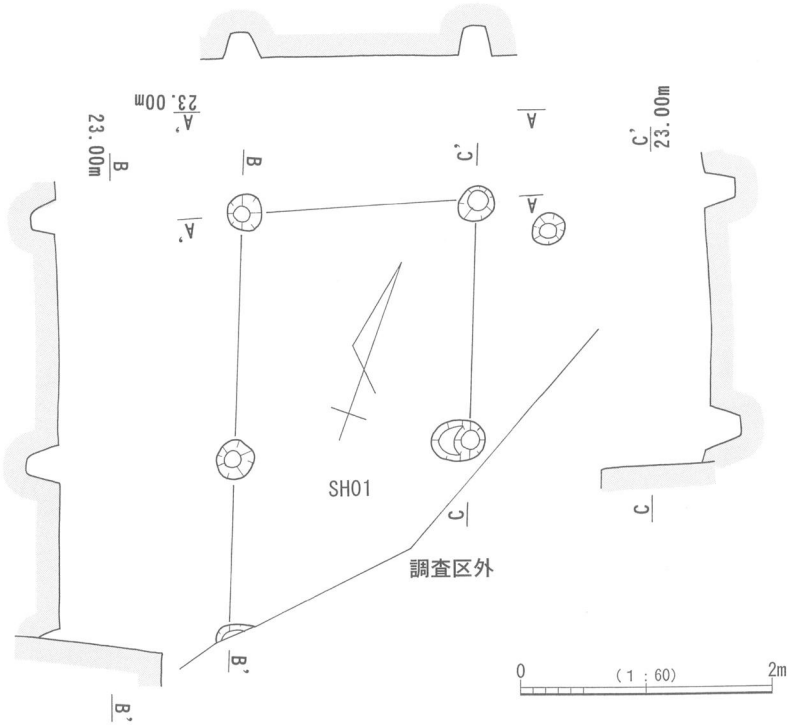
出土遺物　出土遺物はない。

時期　出土遺物がないことから、時期を決定することはできない。確認調査（Tr.６）や本調査で包含層より出土した土器をみると、古墳時代終末期～奈良時代と推測する須恵器や土師器が出土しており、SH02はその時期に比定できる可能性がある。

3　出土遺物（第４図，図版21，第11表）

本調査では須恵器と土師器の破片が出土した。このうち土師器は大部分が甕の小片である。器表面が摩滅しており、図示することはできなかった。須恵器も小片であり図示できなかった。

本調査のTr．６から須恵器杯身が２点出土している（第４図１・２，12頁参照）。これらの須恵器は遠江編年Ⅳ期前半、７世紀前半に位置づけることができる。



第62図　大溝遺跡SH01実測図

4　観察表

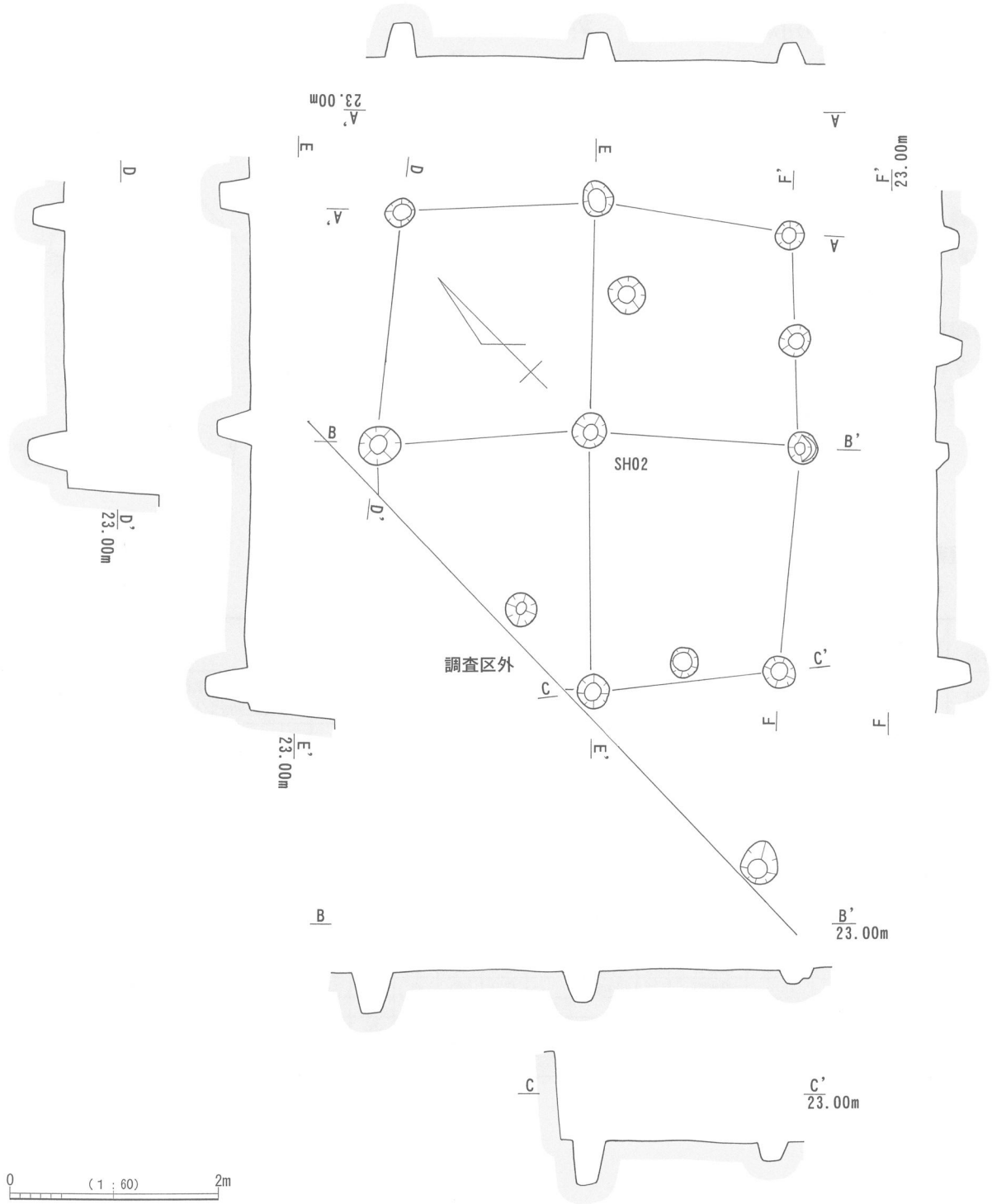
第10表　大溝遺跡の掘立柱建物の概要

遺構番号	挿図	図版	長軸方位	柱間数	規模				柱穴規模	時期	備考
					桁行	梁間	面積	柱間規模			
SH01	62	22 23	南北	１×２以上	3.4以上	1.9	6.4㎡以上	1.9	0.3～0.4	古墳時代終末期～奈良時代？	
SH02	63	22 23	南北？	２×２以上	4.2以上	4.0	16.8㎡以上	2.0～2.1	0.3～0.4	古墳時代終末期～奈良時代？	柱穴が一直線に並ばないところがある。

単位はm。

第11表　大溝遺跡出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	遺構名	種類	器種	法量（cm）			胎土	焼成	色調	残存部位	残存率（%）	備考
						口径	底径	器高						
1	4	21	Tr．6	須恵器	杯身	10cm前後		(2.0)	密	良	灰白	口縁部	5	
2	4	21	Tr．6	須恵器	杯身	10cm前後		(3.3)	密	良	灰	口縁～胴部	15	
3	4	21	Tr．19	山茶碗	碗		6.2	(2.0)	密	良	灰白	底部	50	
4	4	21	Tr．9	山茶碗	小碗	11.8	5.9	3.9	密	良	灰		5	底部ソダ痕
5	4	21	Tr．19	山茶碗	碗	15.9		(1.8)	密	良	灰	口縁部	8	
6	4	21	Tr．20	かわらけ	小皿		5.2	(1.1)	密	良	黄橙	底部	25	



第63図　大溝遺跡SH02実測図

第Ⅳ章　蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡の評価

第１節　蒲ヶ谷原遺跡の評価

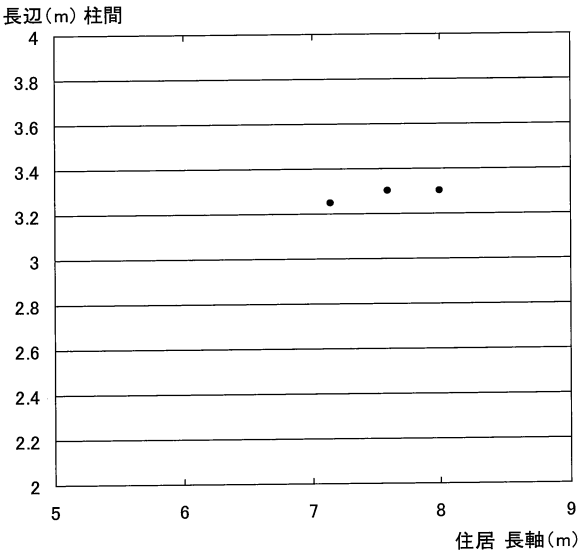
蒲ヶ谷原遺跡では、竪穴住居18軒、掘立柱建物８棟、土坑４基、溝３条、柱穴多数が出土した。また、縄文土器、石棒、弥生土器、叩石、剥片石器、剥片が出土した。これらの資料を基礎に蒲ヶ谷原遺跡の評価を試みたい。

１　遺構について

(1)　竪穴住居について（第64・65図）

住居の規模について　竪穴住居は、壁溝の存在により住居規模が判明したものが３軒あり、その主柱穴の長辺と住居の長軸長の相関関係を示したのが第64図である。また、主柱穴の長辺と短辺の相関関係を表したものが第65図である。主柱穴間の規模と住居規模の相関関係から蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居の規模を復元し、それを元に規模について考えておく。

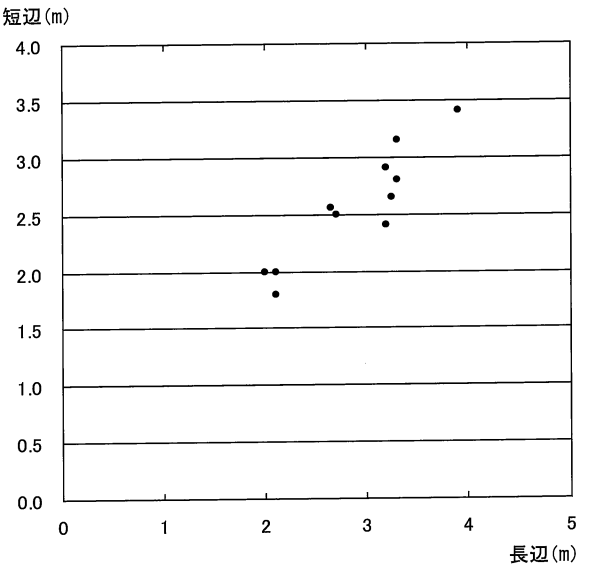
まず、第65図をみると、竪穴住居の柱間により規模差が確認でき、①長辺・短辺２m前後のもの、②長辺2.7m、短辺2.5m前後のもの、③長辺3.0～3.5m、短辺2.5～3.2m前後のもの、④それ以上のものの４つの規模におおよそ区分することができる。住居規模の判明している３軒は、③にあたり、③に当たる住居の規模はおおよそ7.2～8.0mである可能性が高い。この場合、柱間の長辺の2.2～2.5倍が住居の長軸長であることから、①は4.4～5.0m前後、②は長軸長6.0～6.8m前後、④は長軸長8.6m前後である可能性が高い。



第64図　蒲ヶ谷原遺跡竪穴住居柱間と住居規模の関係

使用された柱について　蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居に使用された柱について考えておきたい。竪穴住居18軒の柱穴の規模は最小で約0.25mであることから、これよりも細い柱が利用された可能性が高く、柱穴が丸いことから直径20cm程度の丸太が使用された可能性が高いだろう。

ここで、樹種同定（第Ⅲ章第２節４参照）の結果をみると、SB07・08で採集した炭化材は、ハイノキ属、SB15から採集したそれは、ヒサカキ、ヒノキである。このうちヒサカキ、ハイノキ属のミミズバイは相良町周辺の現在の植生（相良町1993）と一致しており、原生林を使用した可能性が高いだろう。一方、ヒノキは現在の主要な植生ではなく、直接は比較できないが、蒲ヶ谷原遺跡では手近なヒノキ、ヒサカキ、ミミズバイなどの樹木を柱として使用して竪穴住居を構築していた可能性が高い。



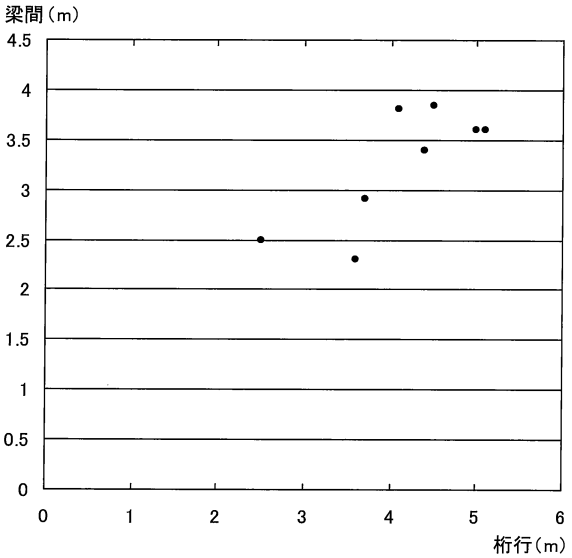
第65図　蒲ヶ谷原遺跡竪穴住居柱間規模比較図

住居の平面形について　蒲ヶ谷原遺跡で出土した竪穴住居のうち、平面形態が判明するものはすべて楕円形（小判形）であった。蒲ヶ谷原遺跡で出土した18軒のうちの形態が判明したものは３軒であり、推測の域を出ないが、主柱穴の配置方法を考慮すると、大部分が楕円形の住居であった可能性が高い。

ここでは遠江の弥生時代の竪穴住居と比較してみよう。

袋井市鶴松遺跡の事例を中心に遠江の弥生時代の竪穴住居の平面形態を概観した松井一明氏によれば、遠江においては、弥生中期中葉に方形であったものが、中期後葉には楕円形（長楕円形）に変化し、後期前半には楕円形の住居が減少するとともに、隅丸長方形が出現し増加する。後期後半には円形あるいは隅丸方形に変化し、古墳時代前期には方形となることが指摘されている（松井1992）。また、炉の位置も住居の中央にあったものが、後期後半には、住居の隅に偏る傾向にあることが指摘されている。

蒲ヶ谷原遺跡は中央に近い位置に炉を有する楕円形住居であり、松井氏の指摘と比較すると中期後半～後期前半の住居とすることができる。蒲ヶ谷原遺跡で出土した弥生土器は中期後半～後期前半に位置づけることができることから、その証左となり、松井氏の指摘する東遠江の様相と合致するといえ、ひいては天竜川以東の東日本の同時期の竪穴住居の平面形態の動向と軌を一にしている（松井1992）。



第66図　蒲ヶ谷原遺跡掘立柱建物規模比較図

(2)　掘立柱建物について（第66図）

規模について　掘立柱建物は８棟確認することができ、１×１間１棟（１×２間の可能性あり）、１×２間６棟、１×３間１棟であり、大型の建物は存在しない。これらの建物の桁行と梁間の相関関係を示したのが第66図である。第66図をみると８棟の掘立柱建物には規模差が確認でき、①桁行４m以下、梁間３m未満の建物と、②①以上の建物に区分することができる。建て替えられたSH03・04、SH05・06、SH07・08はほぼ同規模で建て替えられている。

使用された柱について　蒲ヶ谷原遺跡の掘立柱建物の柱穴は、最小のもので約0.3mであり、これよりも細い柱が使用されていた蓋然性が高く、柱穴が竪穴住居と同じく円形であることから、直径25cm程度の丸太が使用された可能性が高い。柱穴からみると、竪穴住居よりもやや太い柱が使用された可能性がある。柱には竪穴住居と同様、遺跡周辺の原生林が利用されたと推測する。

(3)　竪穴住居と掘立柱建物の関係

柱穴のみで竪穴住居と想定したSB05やSB10などを楕円形の竪穴住居として復元したもの（註10）を第67図に示した。第67図にみられるように、竪穴住居18軒と掘立柱建物８棟には重複関係があり、柱穴は多数確認できるものの、明確な区画の指標となる柵列などが確認できないため竪穴住居と掘立柱建物の関係は不明である。しかし、５箇所に掘立柱建物が確認でき、竪穴住居がおおよそ６～７箇所に重複して分布していることから、おおよそ竪穴住居１～２軒に対し、掘立柱建物１棟で構成されていた可能性が高い。

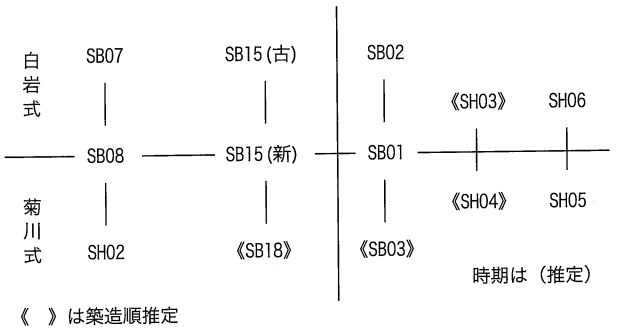
この場合には、SB12あるいはSB15とSH08、SB16とSH05・SH06、SB10とSH03・04などが、関連性が高いといえようか。

第67図　蒲ヶ谷原遺跡竪穴住居復元配置図

(4)　蒲ヶ谷原遺跡の遺構の変遷

重複関係　竪穴住居は、SB06～SB08の３軒が重複関係にあり、最低２回は建て替えが行われたことが判明し、さらにSB08の後、SH02が築造されている。SB06とSH02は重複関係にないことから、同時期に併存していた場合、SB07・08周辺では最低２回の建て替えが行われていたことが判明する。また、同じようにSB01～03は重複関係にあり、築造順序は明確ではないが、最低２回の建て替えが行われたことが判明する。さらにSB13・14・17も重複関係にあり、最低２回の建て替えが行われたことが判明する。SB15（古）、SB15（新）、SB18も重複関係にあり、これも２回の建て替えが行われている。したがって、蒲ヶ谷原遺跡の竪穴住居は多いもので２回建て替えられている。

一方、掘立柱建物８棟のうちSH03とSH04、SH05とSH06、SH07とSH08が重複関係にある。したがって、これらの３箇所では建て替えが行われたことが明らかであり、掘立柱建物は最低１回の建て替えが行われたことが判明する。なお、SH03、SH05、SH08は主軸方位が一致しており、同時期に建てられた可能性が高い。



第68図　蒲ヶ谷原遺跡遺構変遷図

したがって、蒲ヶ谷原遺跡では、弥生中期後半でも古い時期から後期前半までの間に竪穴住居は２回程度、掘立柱建物は１回の建て替えが行われたことが判明する。つまり、竪穴住居が２回建て替えられたのに対し、掘立柱建物は１回の建て替えだったと想定できる。これは、竪穴住居１～２軒に対し、掘立柱建物が１棟であることも証左となり、この結果６～７軒の竪穴住居（６家族）が２回建て替えられ18軒に、４～５棟の掘立柱建物が１回建て替えられて８棟になったとするのが妥当であろう。

時期区分　時期が判明するものは、第68図に示したように、SB07・08、SH02で、SB07（中期後半）→SB08（中期末～後期前半）→SH02（後期前半）であり、SB15（古）（中期後半）→SB15（新）（中期末～後期前半）という変遷が判明しており、蒲ヶ谷原遺跡の遺跡変遷は１段階＝中期後半、２段階＝中期末～後期前半、３段階＝後期前半と考えることができる。

自然科学分析との比較　SB15で採集した炭化材は紀元前40～１年前後、SB15の壁溝内から出土した炭化材は紀元前85～55年と分析結果が出た（57･58頁）。これは、SB15が建て替えが行われたことを実証しているといえよう。SB07・08から出土した炭化材は紀元前90～60年との分析結果がでており、SB15の壁溝から出土した炭化材の年代に近く、SB07とSB15（古）は弥生時代中期後半である可能性が高いだろう。

ただし、今回の結果は、遠江で考えられている弥生時代中期から後期の年代観よりも50～100年程度古い年代を示す結果となっている。ここで注目すべきは小笠町川田・東原田遺跡である。この遺跡から出土した弥生時代後期とされる独立棟持柱建物（SH10）の柱根の分析結果が紀元前150～西暦50年に位置づけられており（小笠町教委2001）、これ（後期）が西暦50年に近いと仮定すると、中期は紀元前後以前となり、おおよそ蒲ヶ谷原遺跡の自然科学分析と一致する。しかし、これも現在の考古学的に導き出された弥生時代の年代観とは年代的な開きがあるといえる。

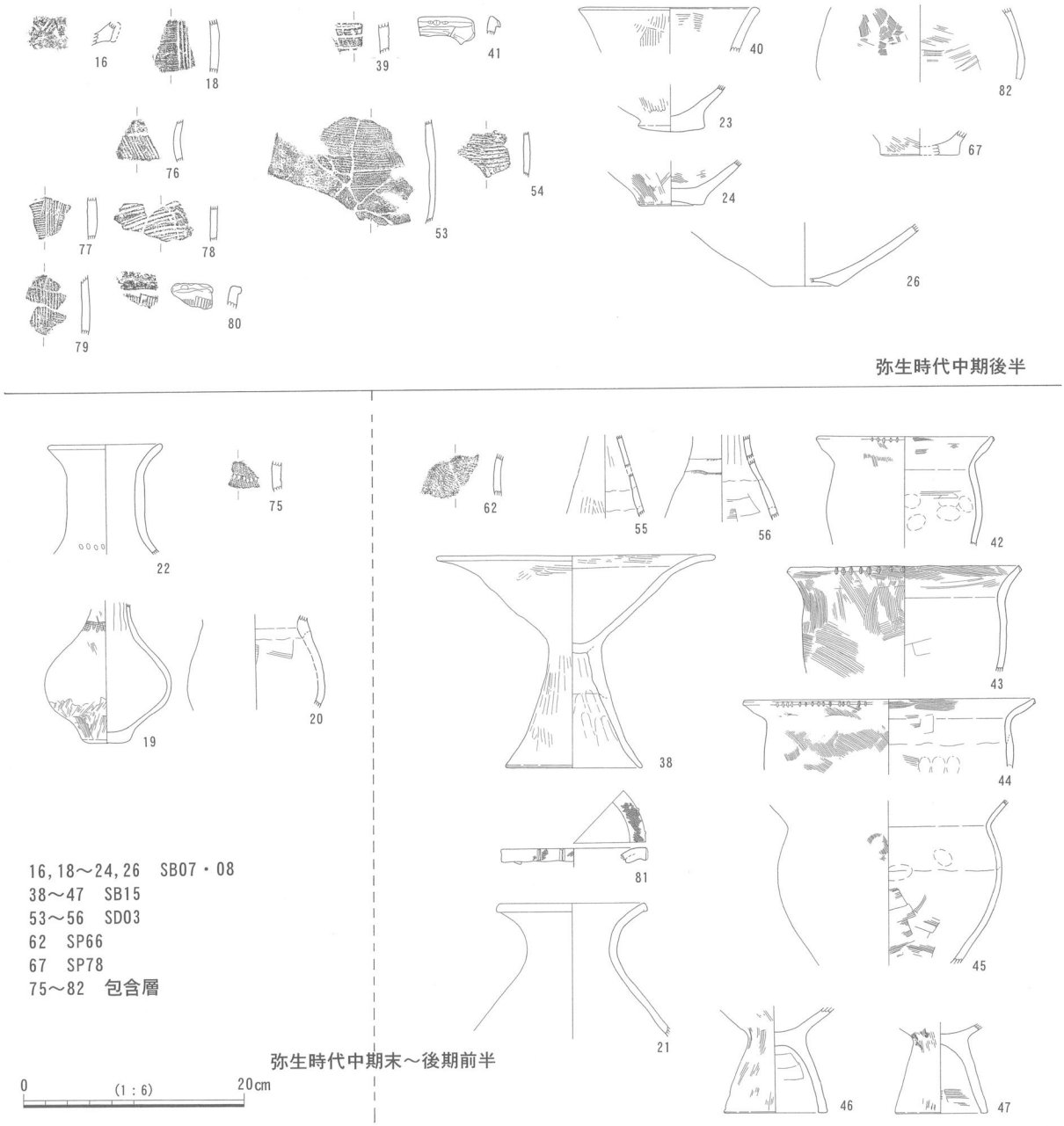
筆者には、放射性炭素14分析を肯定的・批判的に検討することができないため、今後は他遺跡の状況を含めて、土器編年を中心に導き出された年代観と比較・検討する必要がある。また、放射性炭素14の分析が進む九州や近畿地方の弥生時代の遺跡との比較も重要となってくるであろう。

2　遺物について

(1)　弥生土器について

蒲ヶ谷原遺跡からは、白岩式土器～菊川式土器が出土している。蒲ヶ谷原遺跡から出土した土器を、それぞれの特徴から時空間的位置づけを考えておきたい。

器種構成　蒲ヶ谷原遺跡から出土した弥生土器は壺、台付甕・甕、高杯、鉢、深鉢（あるいは平底甕，以下深鉢）である。しかし、遺跡の遺存状況が良好ではないことから、完全には実情を示しているとはいえないが、出土器種の中で、高杯は２点、鉢１点、深鉢は１点と非常に少ない。一方、壺は口縁部と底部で数えて21点（破片を含めれば30点以上）、台付甕は口縁部と台部で数えて11点と、他の器種と比較して、多いといえ、主要器種は壺と台付甕（甕）であったといえよう。また、白岩式段階では、高杯は出土しておらず、壺、鉢、深鉢、甕で構成され、菊川式段階になって、高杯が出現している。



第69図　蒲ヶ谷原遺跡出土弥生土器比較図

したがって、蒲ヶ谷原遺跡では、中期後半（白岩式段階）は壺が主体で、後期前半（菊川式段階）は壺と台付甕が主体で、どちらの時期も高杯、鉢、深鉢は客体的といえよう。

時期的位置づけ　蒲ヶ谷原遺跡から出土した弥生土器のうち白岩式土器（註11）を、第69図上段にまとめた。器種としては、壺、鉢、深鉢（甕？）がこれにあたる。壺は上げ底で、頸部～胴部にかけて櫛描横線文→縦線（垂下）文を多用している（53など）。この文様は萩ヶ谷正宏氏分類の丁字文複帯Ｂ類に位置づけることができ、白岩式でも古い要素とされる（萩ヶ谷2000）。また、頸部や胴部の調整は櫛状工具による条痕文（54など）やミガキが施されている。

したがって、これらの土器はその特徴から萩ヶ谷氏編年白岩式１段階（様相１）に位置づけることが可能である（萩ヶ谷2000）。この時期の遺跡としては、磐田市野際遺跡Ｅ地点２号土坑、同権現山遺跡１・２号方形周溝墓、袋井市～掛川市に渡る山下遺跡SX14、菊川町鹿島遺跡SZ３・SZ６が挙げられており（萩ヶ谷2000）、これらの遺跡に併行すると推測する。

一方、下段に図示したのは、白岩式から菊川式への移行期に当たる土器群である。このうち81は菊川式土器である。壺、高杯、台付甕が出土している。

菊川式の指標とされる壺の口縁部の折り返しや、頸部の太頸化、刺突文・縄文を施文することなどは菊川式の特徴を備えている。台付甕が11点以上出土している。これらは、球胴であり、頸部は緩やかな「く」字形を呈しており、菊川式古段階の様相を示している。さらに、81や62は、縄文を多用しており、菊川式の様相と合致する。しかし、壺21は、太頸化しているものの、口縁部は僅かな折り返しに留まっており、高杯38も、接合部に羽状文を施さず、口縁部が明瞭な鍔状となっていないことなど、菊川式でもそれほど新しくない様相といえよう。つまり、これらから下段の土器は白岩式～菊川式古段階の移行期あるいは菊川式古段階に位置づけることができよう。

また、下段左側に図示したものは、形態は駿河の有東式に近いが、無文の傾向があることから、白岩式～菊川式の移行期に位置づけ、右側の白岩式～菊川式古段階と併行すると考えるのが妥当であろう。

系譜　SB15から出土した白岩式の壺（39）はヘラ状工具による横線文の間に研磨を施しており、三河の瓜郷式の様相を呈しており、その地域の影響を受けているといえる。

第69図下段左側に示した４点は駿河の有東式土器の形態的特徴を備える。まず、壺（22）は頸部がやや膨らむ点や、SB07・08から出土した壺（20）は底部から胴部の形状などが大井川以東の弥生時代中期の有東式土器の影響を受けたと推測できる。これと類似する土器が静岡市能島遺跡や川合遺跡から出土している。壺（19）も底部から胴部への立ち上がりが、有東式土器に近い形状を呈する。

一方、SB15から出土した高杯（38）は脚部に縦ミガキ調整を施しており、菊川式でも西遠江の山中式土器の影響を窺うことができる。

したがって、蒲ヶ谷原遺跡出土の弥生土器は、白岩式段階では西遠江以西の影響を受け、菊川式古段階では、西遠江地域の影響を受けたものと、駿河の有東式土器の影響を受けているものが確認でき、白岩式、菊川式土器という東遠江の様式を維持しながらも、近接する西遠江と駿河地域の影響を受けている。つまり、弥生土器からみると、駿河湾を介して駿河地域との関係を持ち、陸上、遠州灘を介して西遠江以西の地域との関係を有していたものと考えることができる。

(2)　剥片石器について

蒲ヶ谷原遺跡では、自然礫を打ち欠き、板状にされた剥片が６点出土している。これらは板状に打ち割られ、刃状にされており、さらに加工を加えれば刃部として機能すると想定できる。また、SB02の貯蔵穴SF01から４点まとめて出土しているものの、この４点の母石は出土しておらず、単純に母石から割れて剥片になったわけではなく、剥片が住居内に置かれていたことになる。したがって、単純に剥片と規定することはできず、なんらかの用途をもった石材として保持していたと推測できる。この形状からみると、石包丁などの代わりとして用いられた剥片石器である可能性が高いだろう。

剥片石器は、SB02（４点）、SB07・08（１点）、SB15（２点）から出土している。残存状況が良好な竪穴住居から出土しており、各住居が使用のため保有していたとするのが妥当であろう。

３　蒲ヶ谷原遺跡の位置づけ

(1)　居住人数

竪穴住居の重複関係を考慮すると、存続の期間に２回の建て替えや重複が確認できることから、単純に３で割ると、同時期に竪穴住居６軒、掘立柱建物３棟が併存していたことになり、竪穴住居１軒に５人居住していたとすれば、今回の調査区約1,100㎡に30人程度が居住していた可能性が高い。ただし、重複関係のない住居も確認することができることから、その場合を考慮すると、最大で竪穴住居９軒が併

存していた可能性があり、45人程度が居住していた可能性がある。この場合には、1,100㎡の中に、竪穴住居が軒を連ねるような状態となってしまうため、やはり竪穴住居６軒程度（６家族）が併存し、30人前後が居住していたと考えるのが妥当であろう。

また、蒲ヶ谷原遺跡の北西側に平坦地が広がることから、集落はさらに大きかった蓋然性が高く、集住度も高いことから、大規模集落であった可能性を想定できる。

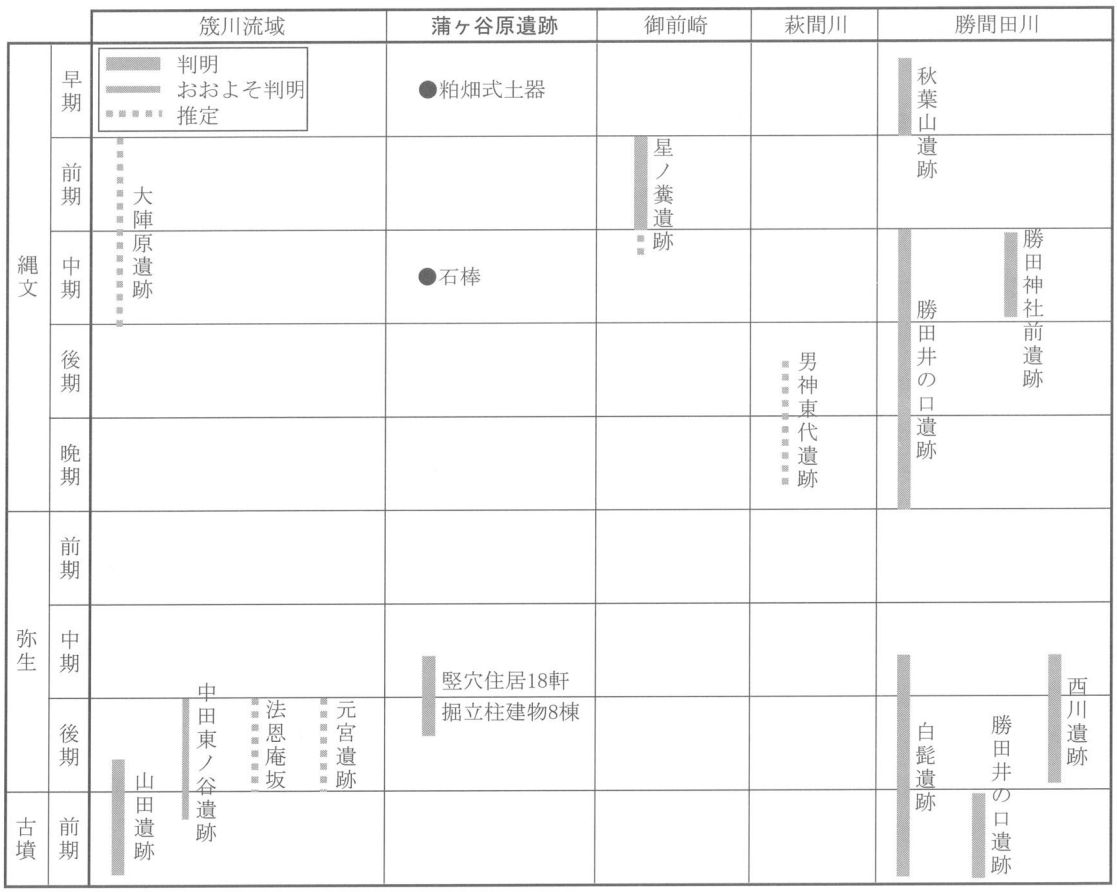
(2) 丘陵上に経営された遺跡

蒲ヶ谷原遺跡は、周囲よりも小高い丘陵の先端に占地しており、地下水が湧き出すような場所はなく、水を確保するためには、平地部まで降らなければならなかったであろう。したがって、通常の生活にはやや不向きな面がある。

したがって、戦争に備えて高地に登ったかどうかは別問題として、今回の調査区は周囲が崩落し、さらに住居の周囲が茶樹の改植のためかなり深くまで掘削されているため、住居群を取り囲むような大型の溝などは確認できなかったが、蒲ヶ谷原遺跡は周囲との境界が明確な小高い尾根上に集落を営むことで、周囲との隔絶性を増し、その場に住む集団のまとまりを意識し、堅固なものとする目的をもって営まれたとも推測できよう。

(3) 周辺の遺跡との関係

蒲ヶ谷原遺跡は弥生時代中期後半～後期前半に営まれた集落であり、また他の出土遺物からみると、縄文時代早期後半と中期にも集落が所在した可能性が高い。蒲ヶ谷原遺跡の変遷を第70図に図示した。ここでは、周辺の遺跡に正式調査された遺跡が少なく様相が不明瞭である現状で、周辺の遺跡との動向を考え併せ、蒲ヶ谷原遺跡の位置づけについて見ておきたい。



第70図　南遠地域東部における主な遺跡の変遷

縄文時代　蒲ヶ谷原遺跡に初めて人為が及んだのは、縄文時代早期であり、粕畑式土器が出土しており、遺構は出土しなかったが、居住が行われていた可能性が高い。縄文時代前期の遺物は出土していないことから、早期段階で一旦放棄されたと推測できる。この時期には、蒲ヶ谷原遺跡に対峙する御前崎の丘陵上に星ノ糞遺跡が営まれる。星ノ糞遺跡はほぼ前期で断絶している。

一方、中期になると再び、蒲ヶ谷原遺跡に人影が見え隠れする。時期は特定できないものの大型の石棒が出土していることから、この時期に位置づけるのが妥当であろう。居住が行われていたか明瞭ではないが、なんらかの人為が及んでいたことは明らかである。

しかし、後・晩期における人為の痕跡は不明である。また、蒲ヶ谷原遺跡の周辺の遺跡の時期が明瞭ではないが、法恩庵坂遺跡や鎮守山遺跡が縄文時代の遺跡として周知されている。

したがって、縄文時代は、長期にわたって継続的に営まれた遺跡は少ないことが予想でき、各時期で居住地を移動しながら、生活を営んでいた可能性が高い。その中で、蒲ヶ谷原遺跡は最も早く人為が及んでおり、これは駿河湾と遠州灘を結ぶルートの要衝にあったためと考えることができる。そして何らかの理由で、一旦放棄された後、中期になって再びこの地に人影が戻ってきたといえるだろう。

弥生時代　蒲ヶ谷原遺跡の周辺では弥生時代に位置づけられる遺跡が幾つか周知されている。しかし、当遺跡周辺では、蒲ヶ谷原遺跡が最も早く形成されている。弥生時代中期後半に平地を見渡す丘陵上に集落が形成され、後期前半まで継続的に営まれている。一方、蒲ヶ谷原遺跡から北西に2.5km離れた筬川流域の山田遺跡（旧浜岡町）では、弥生時代後期後半～古墳時代中期まで営まれている。

したがって、弥生時代も居住地を変えながら、生活を営んでいた可能性が高く、蒲ヶ谷原遺跡は弥生時代中期後半に集落が形成され、遺跡数が増加する後期後半には放棄され、近接する法恩庵坂遺跡などへ移り住んだ可能性が高いといえる。蒲ヶ谷原遺跡は、遠州灘沿いから駿河湾の海岸沿いに牧之原台地を抜けるルートの中間地点（要衝）に位置する遺跡と言え、このような地理的要因から、この場所に占地されたと想定でき、それは土器の様相（第２項（１）参照）にも如実に現れているといえる。

第２節　大溝遺跡の評価

大溝遺跡は、２棟の掘立柱建物が出土したが、遺構に伴う遺物がなく、時期を直接決定することができない。確認調査時に出土した須恵器杯身（第４図１・２）がこの建物の試掘溝からの出土であり、SH01・02は古墳時代終末期前半、７世紀前半まで遡る可能性がある。

また、この他、確認調査対象地の斜面上部Tr.19・20、Tr.６よりも斜面下位にあるTr.９から山茶碗やかわらけが出土しており、周囲に鎌倉時代以降の遺跡が所在することは明らかである。

大溝遺跡から北側に尾根を一筋挟んだ萩間川流域は、縄文時代から近世まで継続して人為が及んでいる一方、相良町南部から御前崎にかけても縄文時代から近世までの遺跡が知られている。大溝遺跡が所在する須々木地区は、海岸沿いの丘陵上に向田古墳（第20図90）、上ノ山古墳（同91）や須々木遺跡（同92）など数遺跡が周知されるに過ぎず、駿河湾沿岸から尾根を挟んで内側に入ると、人為が継続的には及んでいなかったことが遺跡の分布からも明らかであった。

しかし、大溝遺跡の発見により、萩間川や駿河湾を直接望まない内地部分でも古墳時代終末期以降鎌倉時代まで断続的に集落が営まれていたことが明らかとなった意義は大きい。周囲に遺跡が少ないことは、生活や居住の場所としてはそれほど適している場所とは考えにくく、今後は、このような人為がそれほど及んでいない場所に築かれた集落の位置づけについて考える必要がある。新田開発などに伴う集落と考えることも可能であるが、このような遺跡の類例の増加を俟ちたい。

第Ⅴ章　結語

蒲ヶ谷原遺跡は、縄文時代早期、中期、弥生時代中期後半～後期前半に営まれた集落遺跡である。

蒲ヶ谷原遺跡は南遠地域東部、榛原郡南部において本格的に調査が実施され、様相が明らかになった初めての弥生時代の遺跡である。今までは採集資料も少なく、この地域の弥生時代の様相はまったく不明と言っていいような状況であった。相良町の東西である旧浜岡町や榛原町では、南谷遺跡や、西川遺跡、白髭遺跡などの資料によりある程度様相は判明していたが、弥生時代中期となると資料が少なく、様相は不明であった。

しかし、今回の蒲ヶ谷原遺跡の調査により、弥生時代中期後半には榛原郡と小笠郡の境にある地域で集落が営まれていたことが判明し、この集落の竪穴住居の形態は東遠江の様相と同様であることが判明した。また、弥生土器は、西の地域と、東の地域両方からの影響を受けており、蒲ヶ谷原遺跡を経営した集団は、東遠江、御前崎を挟んで遠州灘と駿河湾に挟まれるという地理的状況と同じく、西の文化と東の文化の両方を受け入れ、折衷させるような集団であったと考えることができる。

一方、大溝遺跡は、須々木川上流の緩斜面に形成された集落遺跡であり、２棟の掘立柱建物が出土した。時期は特定できないが、古墳時代終末期～鎌倉時代の一時期の建物と推測できる。

大溝遺跡は、萩間川、駿河湾を直接望まない、海岸線から内陸に入った位置で確認された初めての集落遺跡であり、古墳時代終末期～鎌倉時代にかけて断続的に営まれていた集落と考えることができる。しかし、周囲には遺跡はなく、通常の遺跡とは考えにくく、単純に生活を営むために集落を構えたとするよりは、何か別の目的を持った集団が営んだ集落といえるのではなかろうか。今後は、このような遺跡の少ない場所に営まれた集落の類例を調査し、大溝遺跡が形成された意味を考える必要があろう。

30　蒲ヶ谷原遺跡出土叩石

註

1　袋井市教育委員会　松井一明氏のご教示による。
2　相良町教育委員会　中川律子・松下善和氏のご教示による。
3　相良町教育委員会　中川律子・松下善和氏のご教示による。
4　縄文土器の型式（様式）に関しては、当研究所評議員　向坂鋼二先生にご教示いただいた。
5　石材の鑑定は、静岡大学名誉教授　伊藤通玄先生のご鑑定による。
6　以下、他の主柱穴のみ確認した竪穴住居も同様の理由により、住居の形状は円形よりも楕円形の可能性を想定した。
7　以下、同様の理由により、出土遺物が出土していない竪穴住居や掘立柱建物は弥生時代中期後半～後期前半の一時期に築造されたと考える。
8　弥生土器に関しては、磐田市教育委員会　竹内直文氏にご教示いただいた。
9　調査担当者によると、SH01の調査は２日間という短期間で実施したため、時間がなく現地で測量調査後の確認作業ができなかったため、SH01の平面形が台形になってしまったのは測量ミスの可能性があり、調査段階の記憶では実際の平面形は台形ではなく長方形に近かったと報告を受けている。
　したがって、SH01の平面形は長方形であった可能性が高い。
10　住居規模はSB08を元に復元した。
11　蒲ヶ谷原遺跡出土の弥生土器全体の時期的な位置づけや系譜について、磐田市教育委員会　竹内直文氏にご指導いただいた。

参　考　文　献

報告書

小笠町教育委員会編・発行　2001　『川田・東原田遺跡』（静岡県小笠町）
相良町編・発行　1993　『相良町史』通史編上巻
相良町教育委員会編・発行　1998　『花ノ木遺跡』
相良町教育委員会編・発行　1999　『小堤山横穴群』
相良町教育委員会編・発行　2000　『大寄横穴群・山下遺跡』
相良町教育委員会編　2001　『金山遺跡』　相良町教育委員会・静岡県牧の原農業用水建設事務所
相良町教育委員会発行　2004　『天ノ川遺跡発掘調査現地説明会資料』
静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行　2002a　『星久保古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行　2002b　『勝田井の口遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所発行　2002　『年報』18（平成13年度事業）
静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行　2004　『石畑Ｉ遺跡』
浜岡町教育委員会編・発行　1999　『山田遺跡』
浜岡町教育委員会編・発行　2000　『比木城山遺跡』
本川根町教育委員会編・発行　2003　『ヌタブラ遺跡発掘調査報告書』（静岡県本川根町）

論文

大谷　宏治　2002　「［資料紹介］相良町小堤山１号横穴墓・稲荷山１号墳出土鉄製品」『研究紀要』９　静岡県埋蔵文化財調査研究所
久野　正博　1991　「三河・西遠江の後期弥生土器編年と地域性」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』　第８回東海埋蔵文化財研究会
佐藤由紀男　1986　「遠江の弥生時代中期後葉の土器」『東日本における中期後半の弥生土器』　北武蔵古代文化研究会ほか
佐藤由紀男　2000　「遠江・駿河（中期）」『ＹＡＹ！　弥生土器を語る会20回到達記念論文集』　弥生土器を語る会
鈴木　敏則　2000　「遠江・駿河（後期）」『ＹＡＹ！　弥生土器を語る会20回到達記念論文集』　弥生土器を語る会
中嶋　郁夫　1988　「いわゆる『菊川式』と『飯田式』の再検討」『転機』２　転機刊行会
中嶋　郁夫　1991　「遠江における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』　第８回東海埋蔵文化財研究会
萩野谷正宏　2000　「『白岩式土器』の再検討」『転機』７　転機刊行会
松井　一明　1992　「考察－中遠地域における竪穴住居の編年的様相」『鶴松遺跡Ｖ』　袋井市教育委員会
松井　一明　1993　「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会

図　版

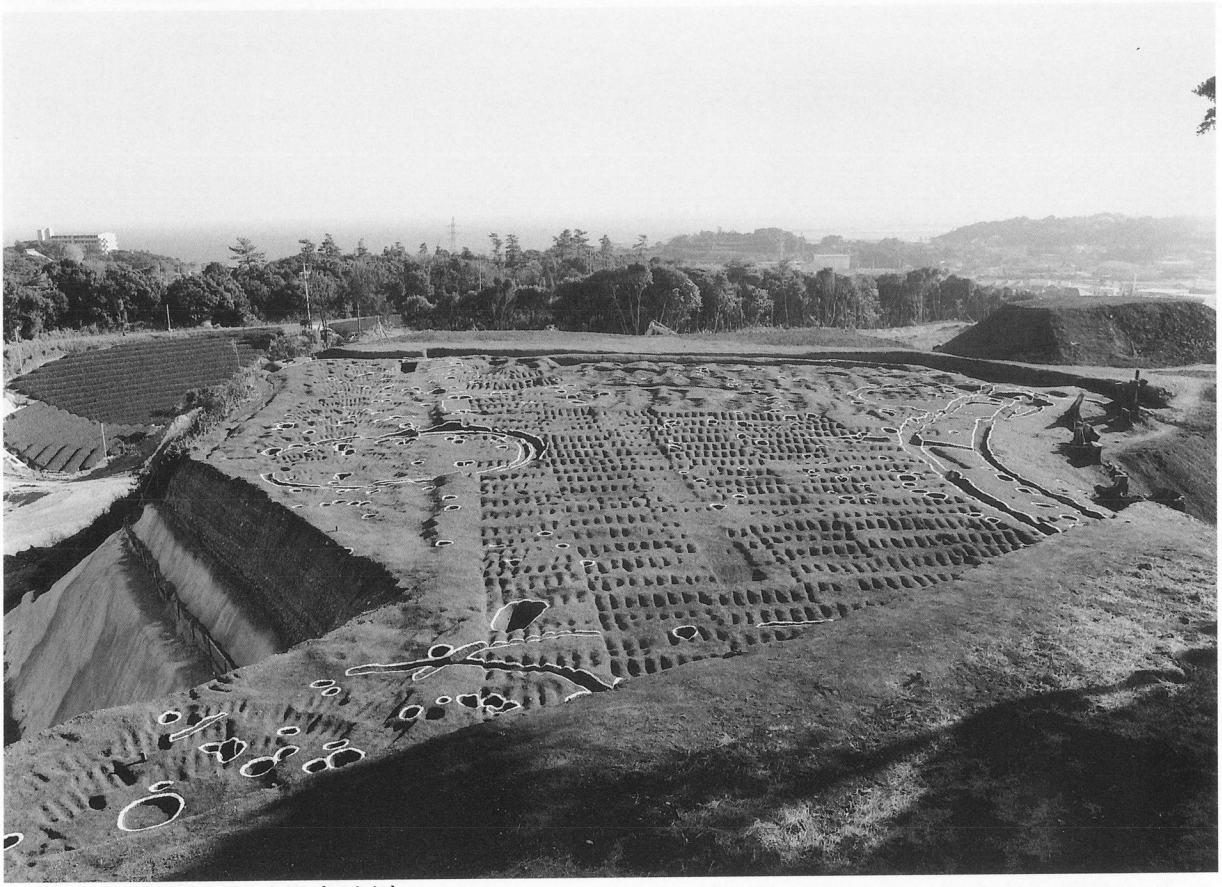
蒲ヶ谷原遺跡調査前の状況

図版１　蒲ヶ谷原遺跡

1　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（南より）

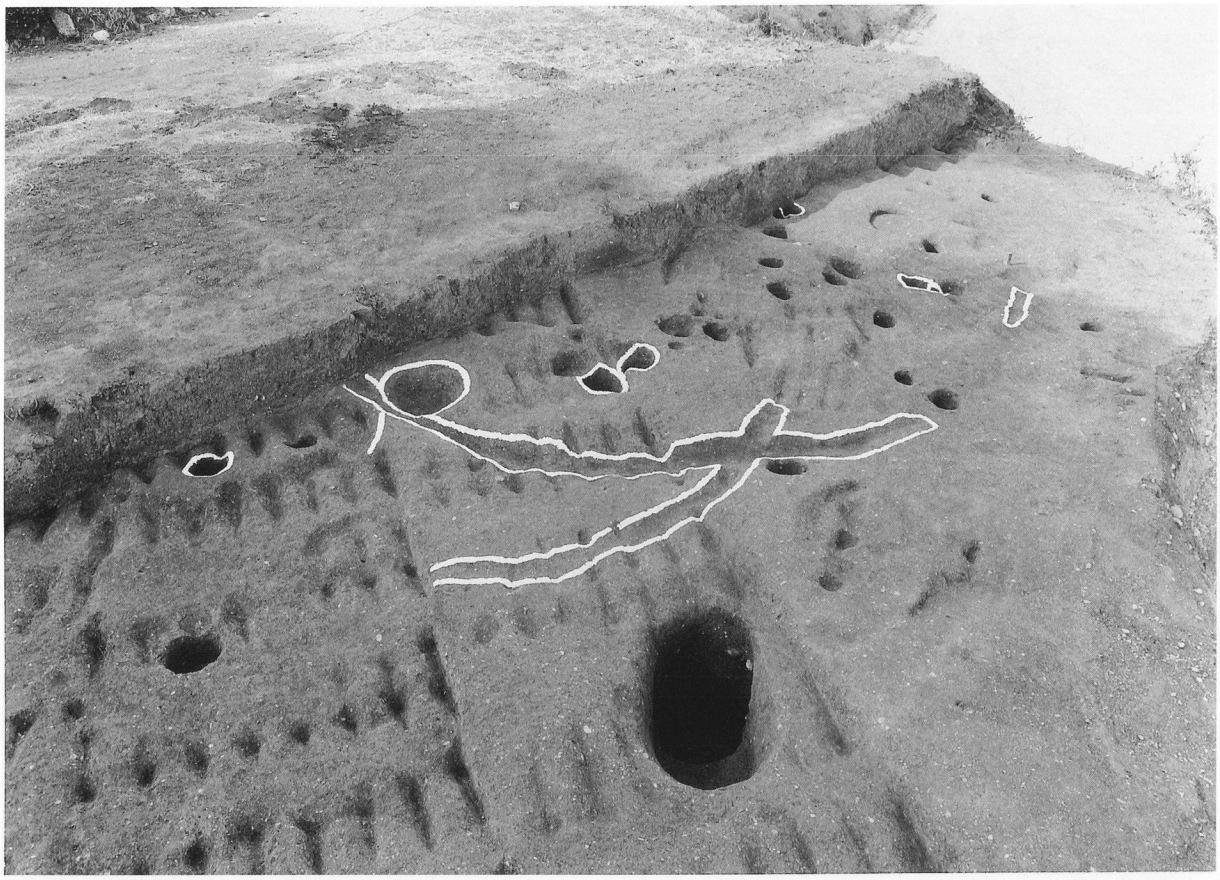
2　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（東より）

１　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（東南より）



２　蒲ヶ谷原遺跡弥生時代全景（西より）

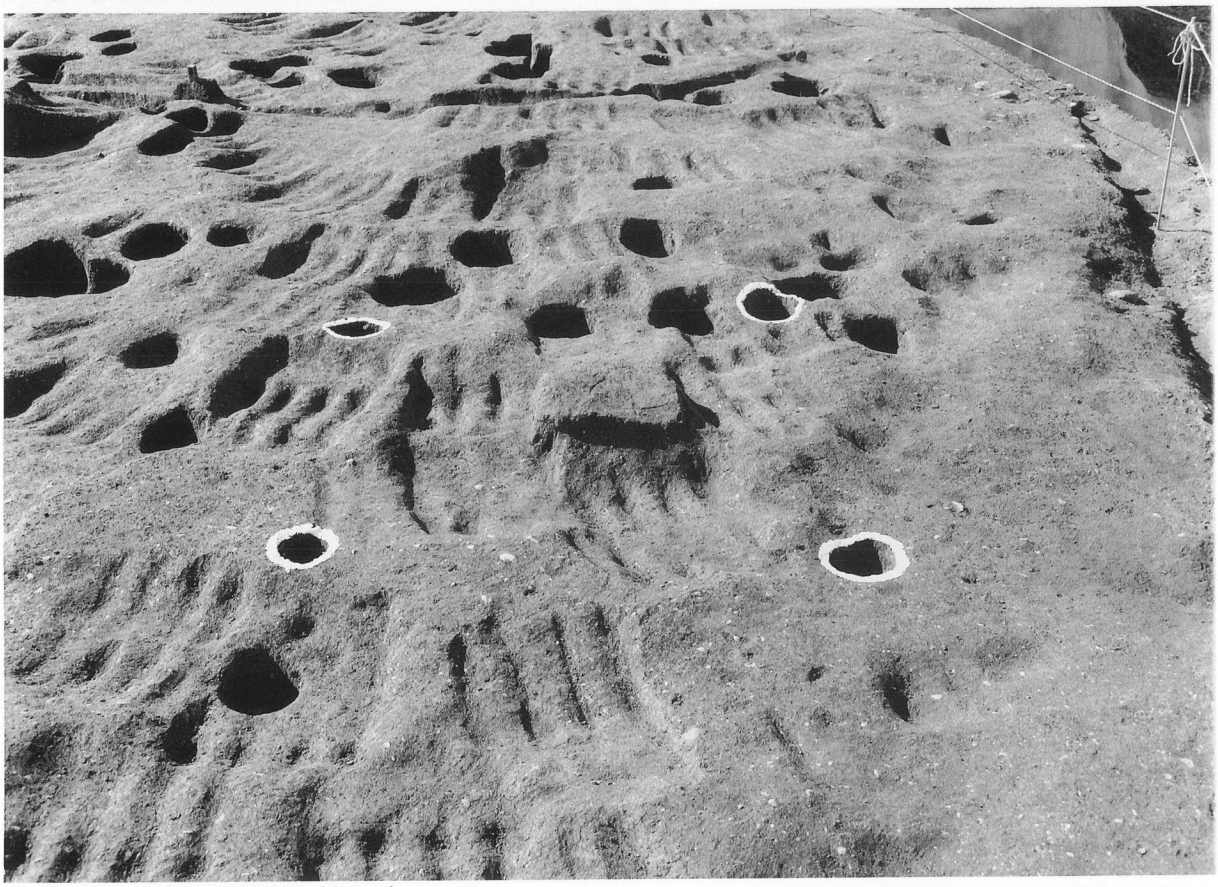
図版３　蒲ヶ谷原遺跡　　SB01・02，SB04～SB06・SH01



1　蒲ヶ谷原遺跡SB01・02完掘状況（東より）

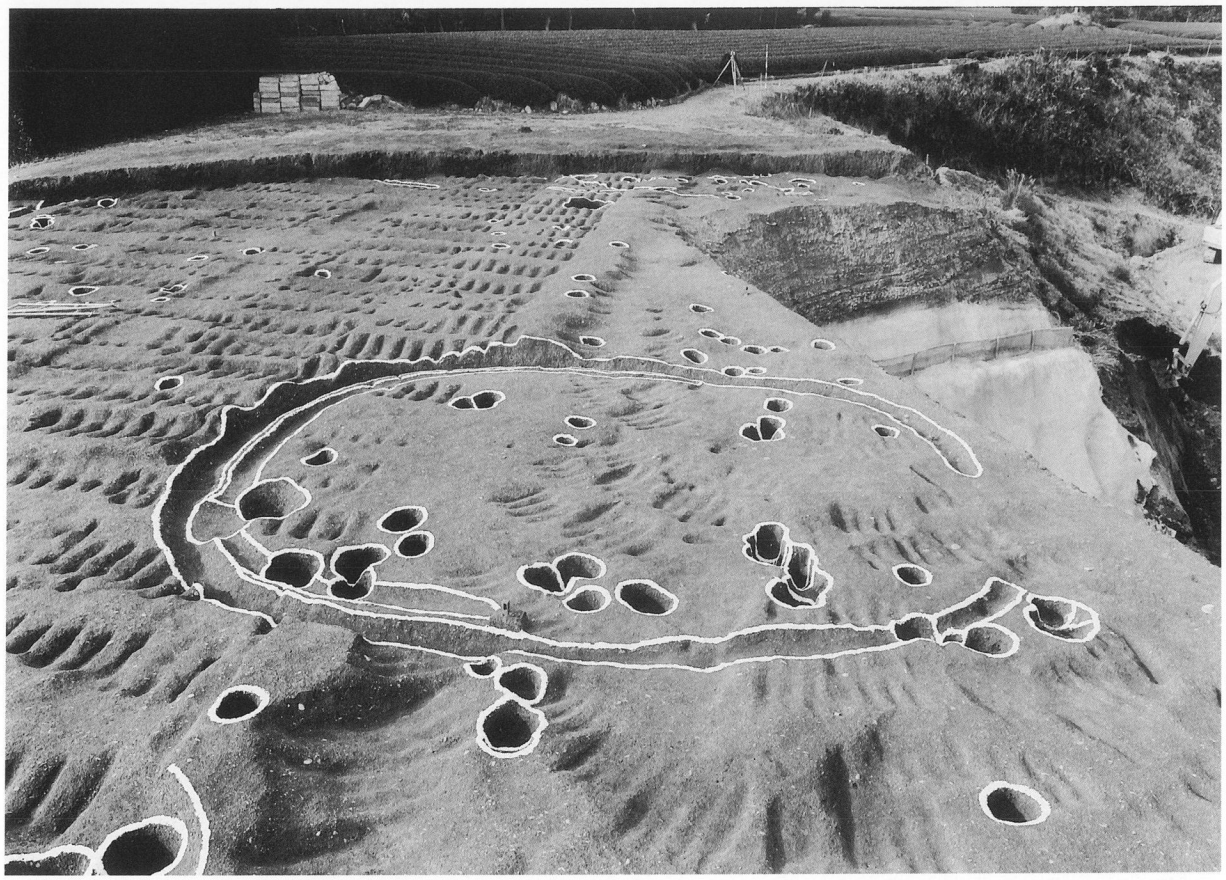
2　蒲ヶ谷原遺跡SB04～SB06，SH01完掘状況（東より）

1　蒲ヶ谷原遺跡SB06完掘状況（西より）



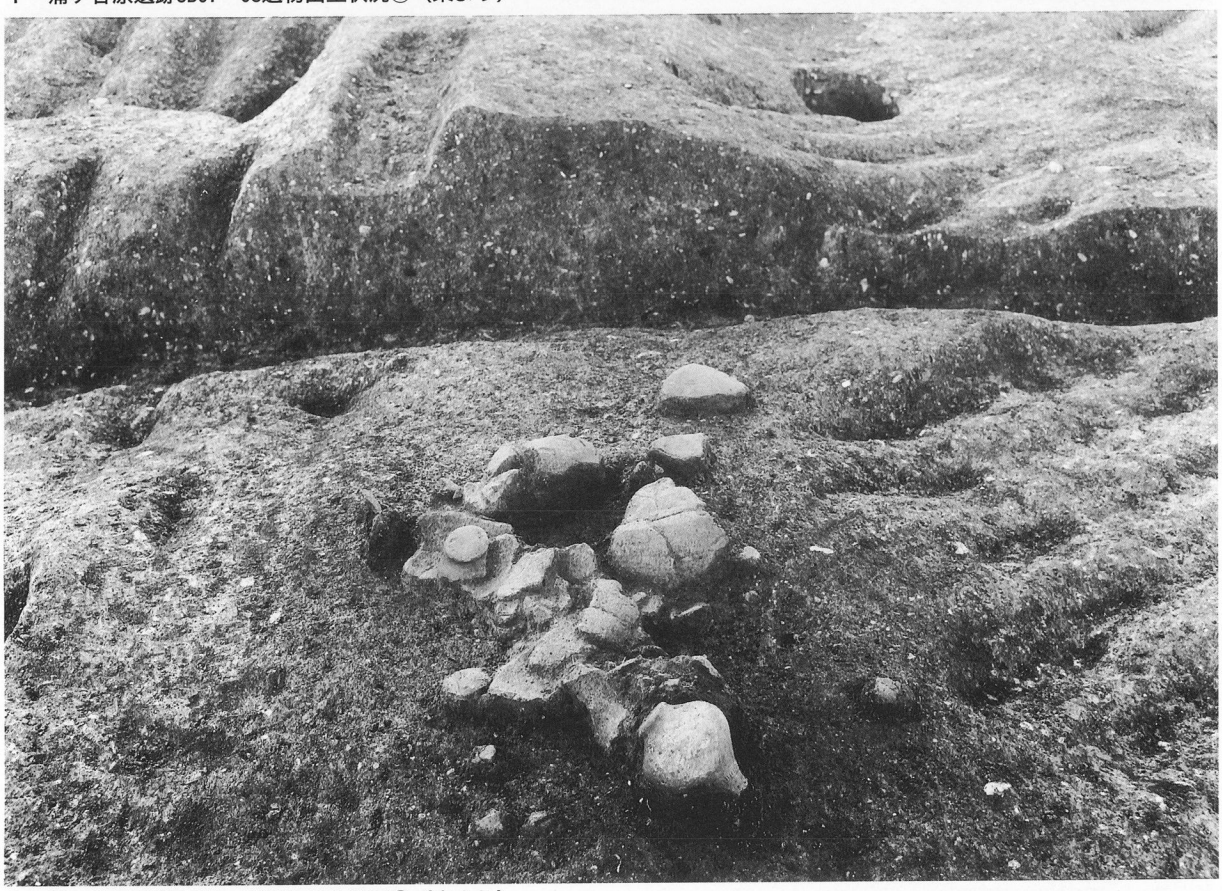
2　蒲ヶ谷原遺跡SB09完掘状況（東より）

1　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08完掘状況（南より）



2　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08完掘状況（東より）

1　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08遺物出土状況①（東より）

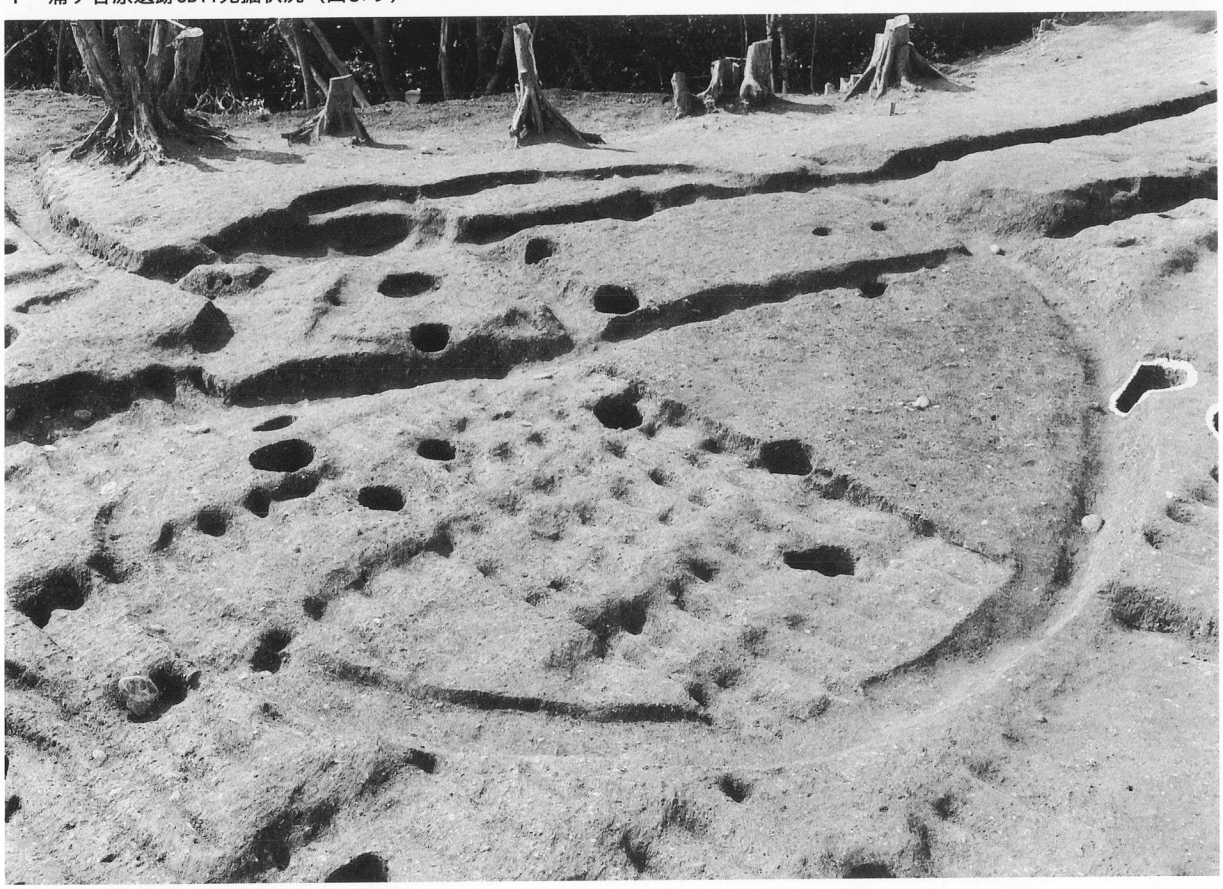


2　蒲ヶ谷原遺跡SB07・08遺物出土状況②（東より）

1　蒲ヶ谷原遺跡SB10完掘状況（南より）

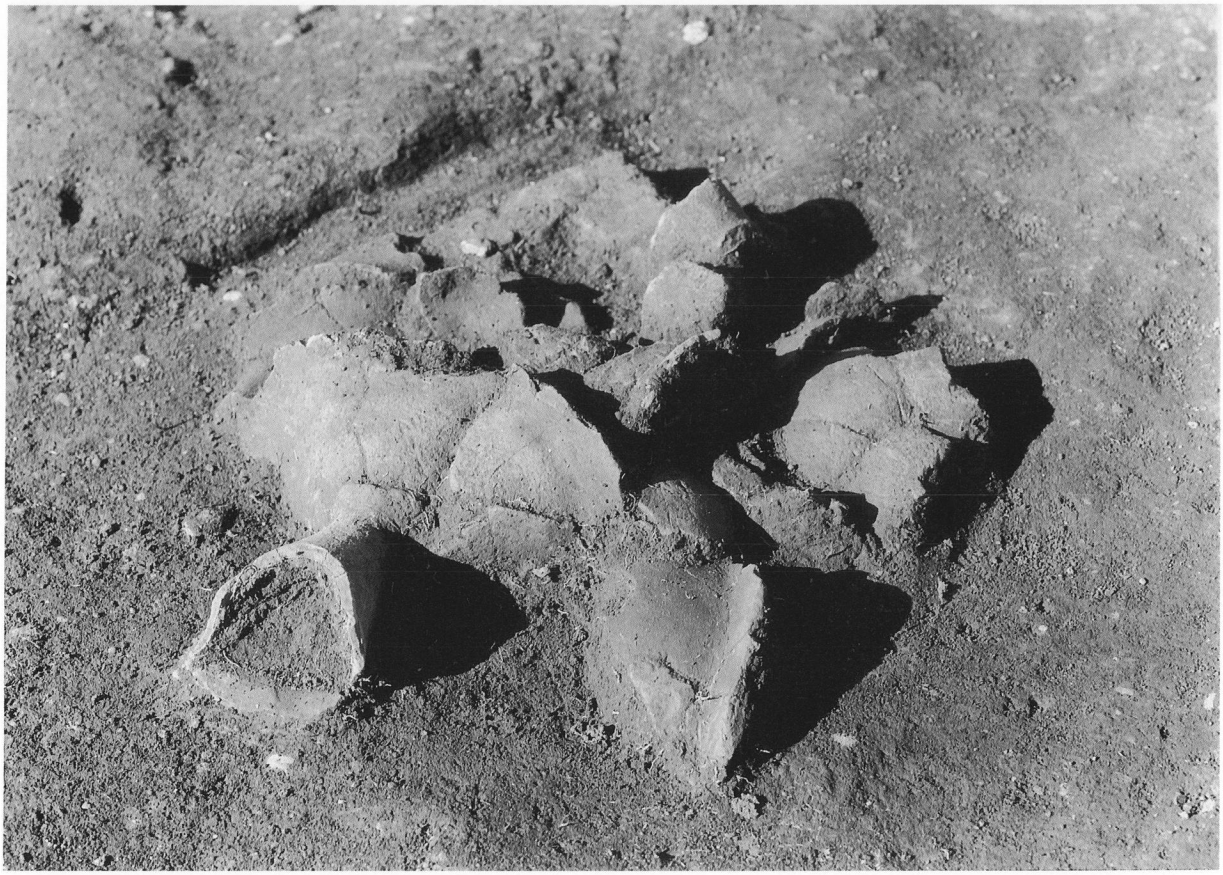
2　蒲ヶ谷原遺跡SB10完掘状況（西より）

1　蒲ヶ谷原遺跡SB11完掘状況（西より）



2　蒲ヶ谷原遺跡SB15完掘状況（北より）

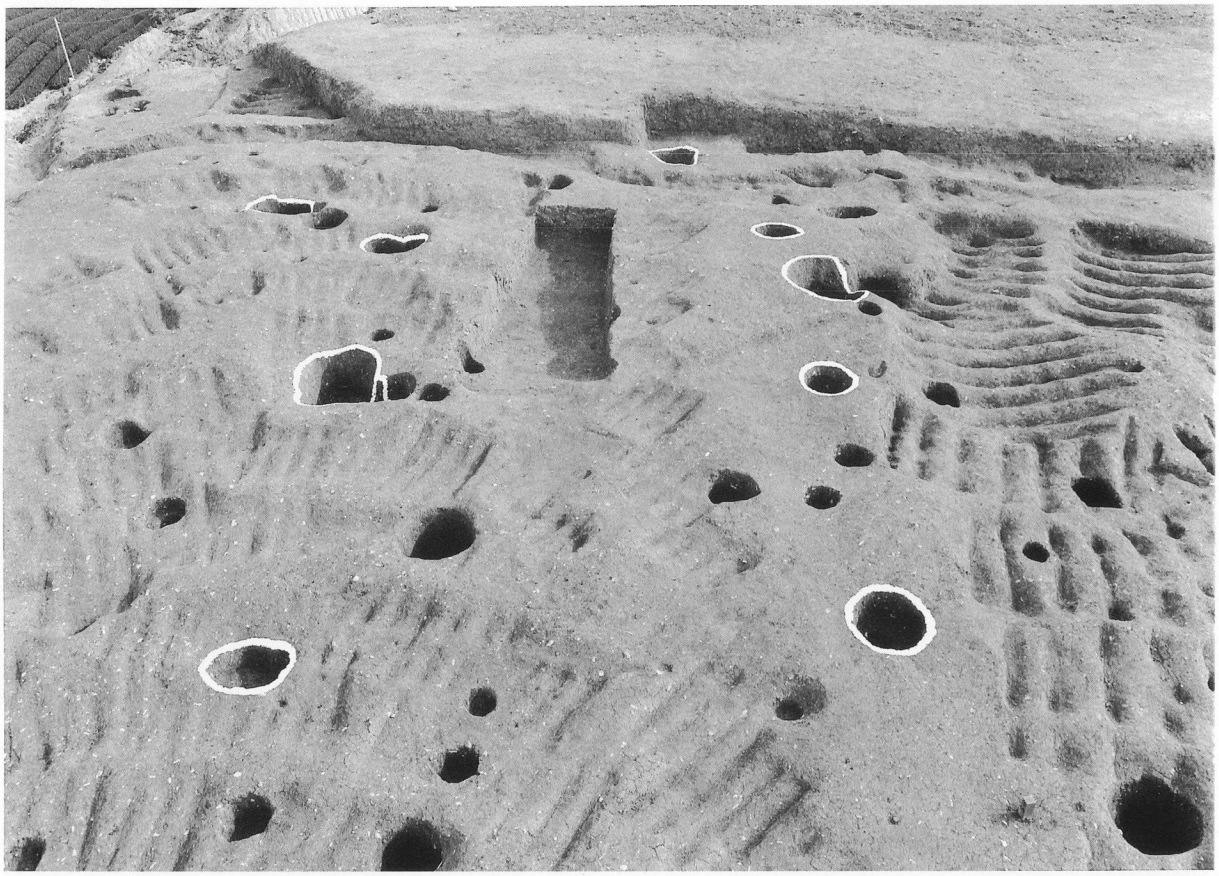
1　蒲ヶ谷原遺跡SB15遺物出土状況遠景（北東より）



2　蒲ヶ谷原遺跡SB15遺物出土状況近景（東より）

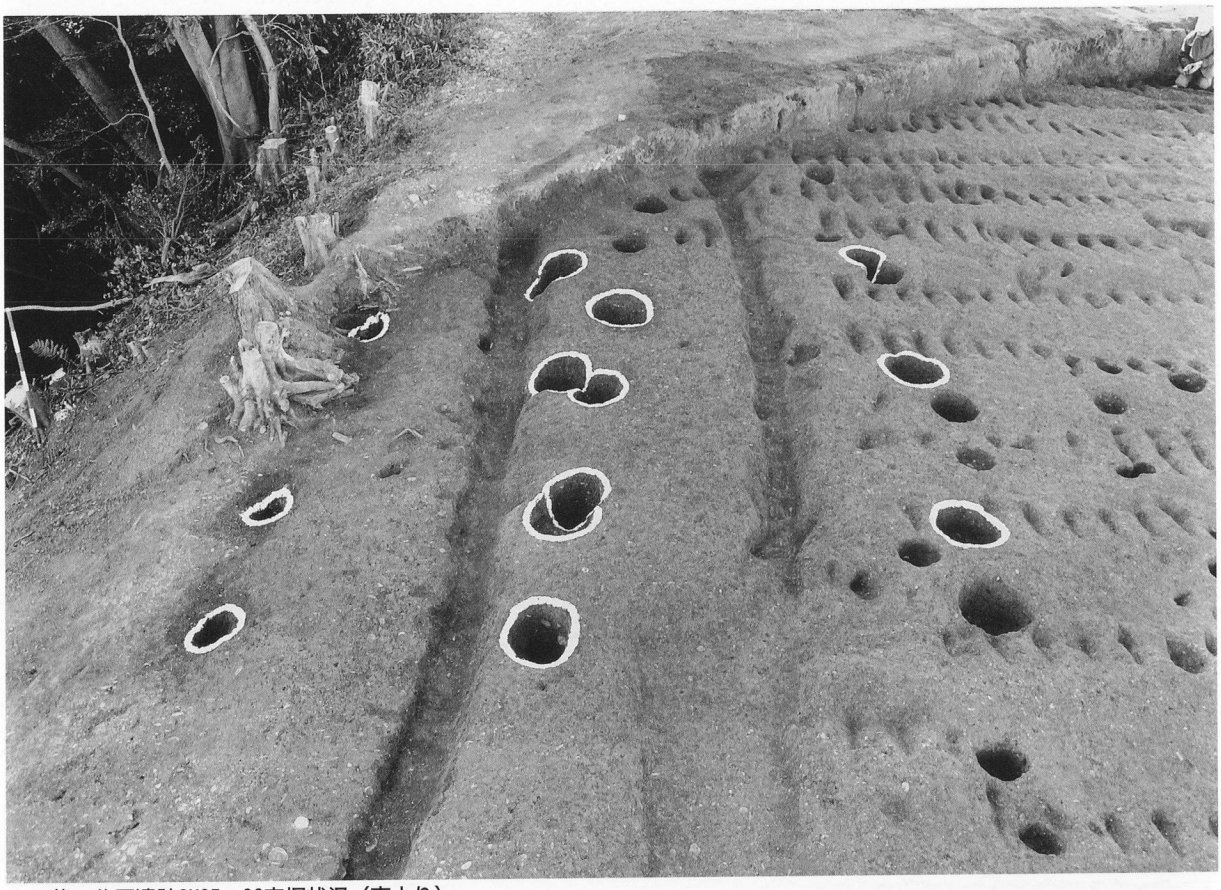
1　蒲ヶ谷原遺跡SH01完掘状況（南より）

2　蒲ヶ谷原遺跡SH02完掘状況（東より）



1　蒲ヶ谷原遺跡SH03・04完掘状況（西より）

2　蒲ヶ谷原遺跡SH04完掘状況（西より）



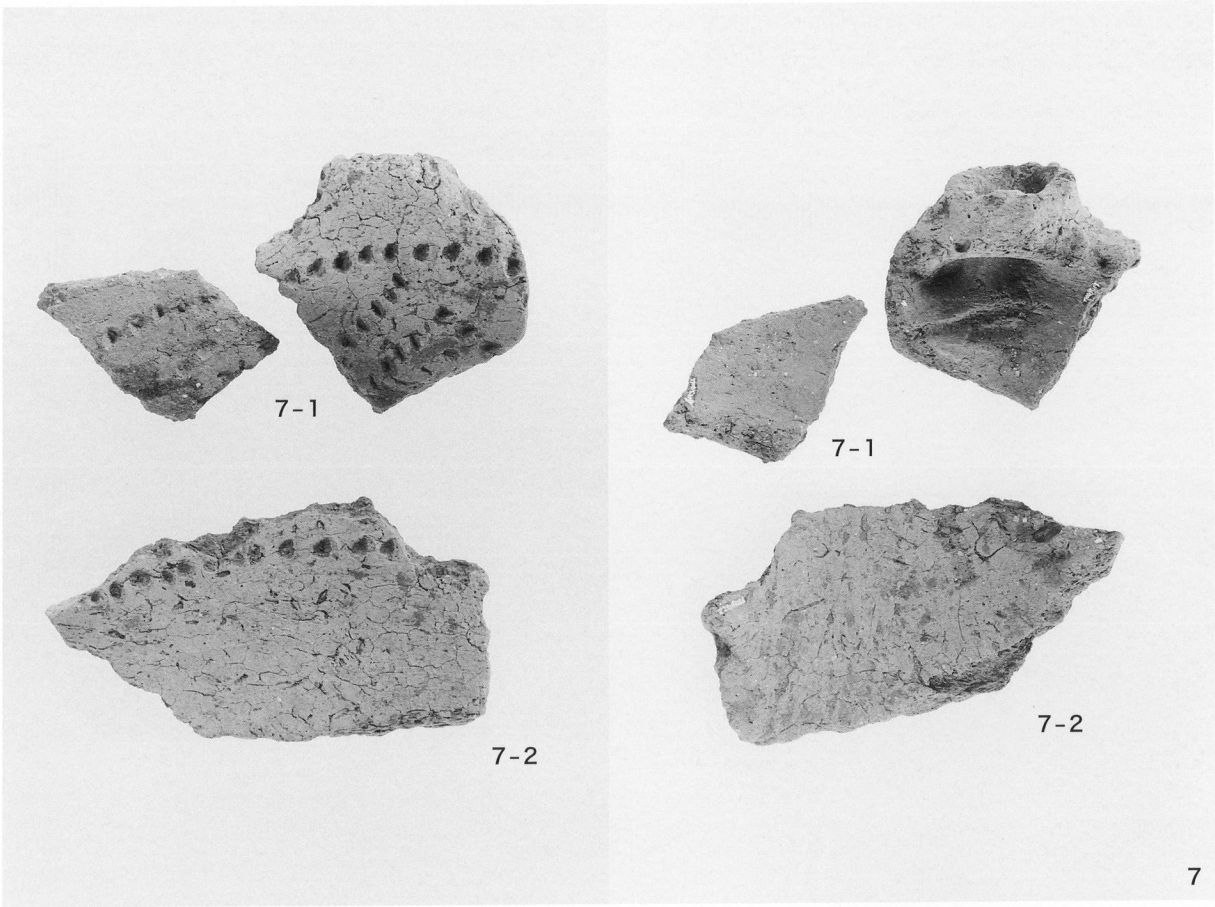
1　蒲ヶ谷原遺跡SH05・06完掘状況（東より）

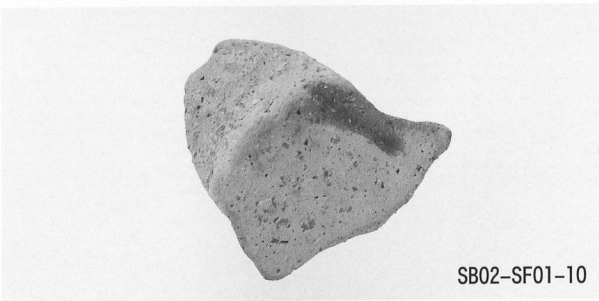
2　蒲ヶ谷原遺跡SH07・08完掘状況（西より）

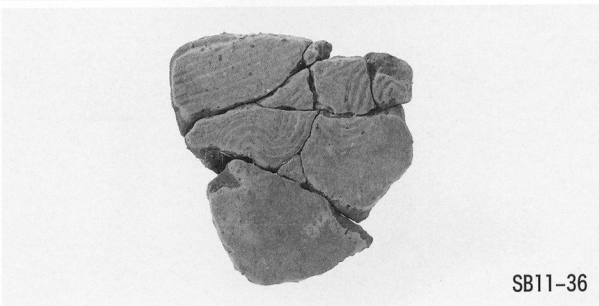
図版13　蒲ヶ谷原遺跡　SD02，SF04

1　蒲ヶ谷原遺跡SD02完掘状況（北より）

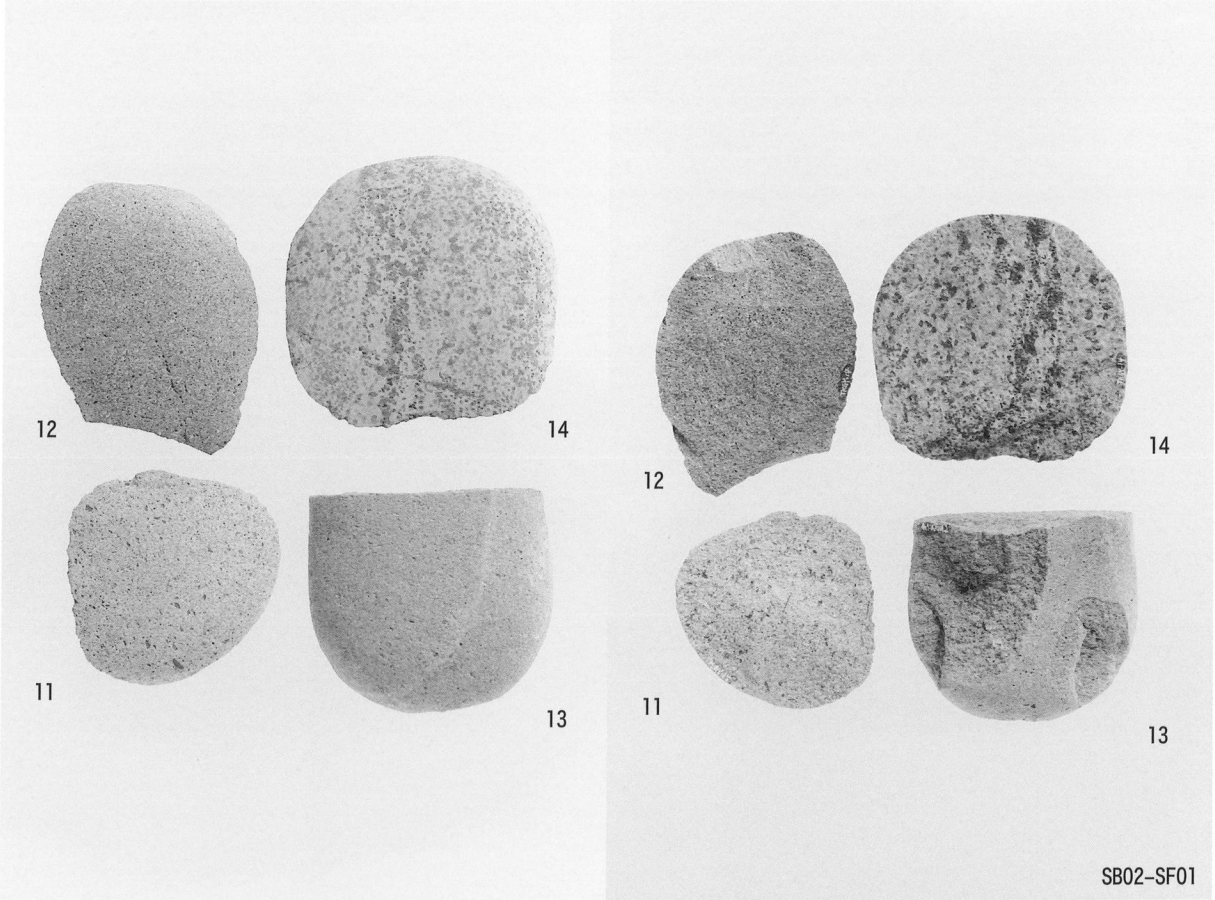
2　蒲ヶ谷原遺跡SF04完掘状況（南より）



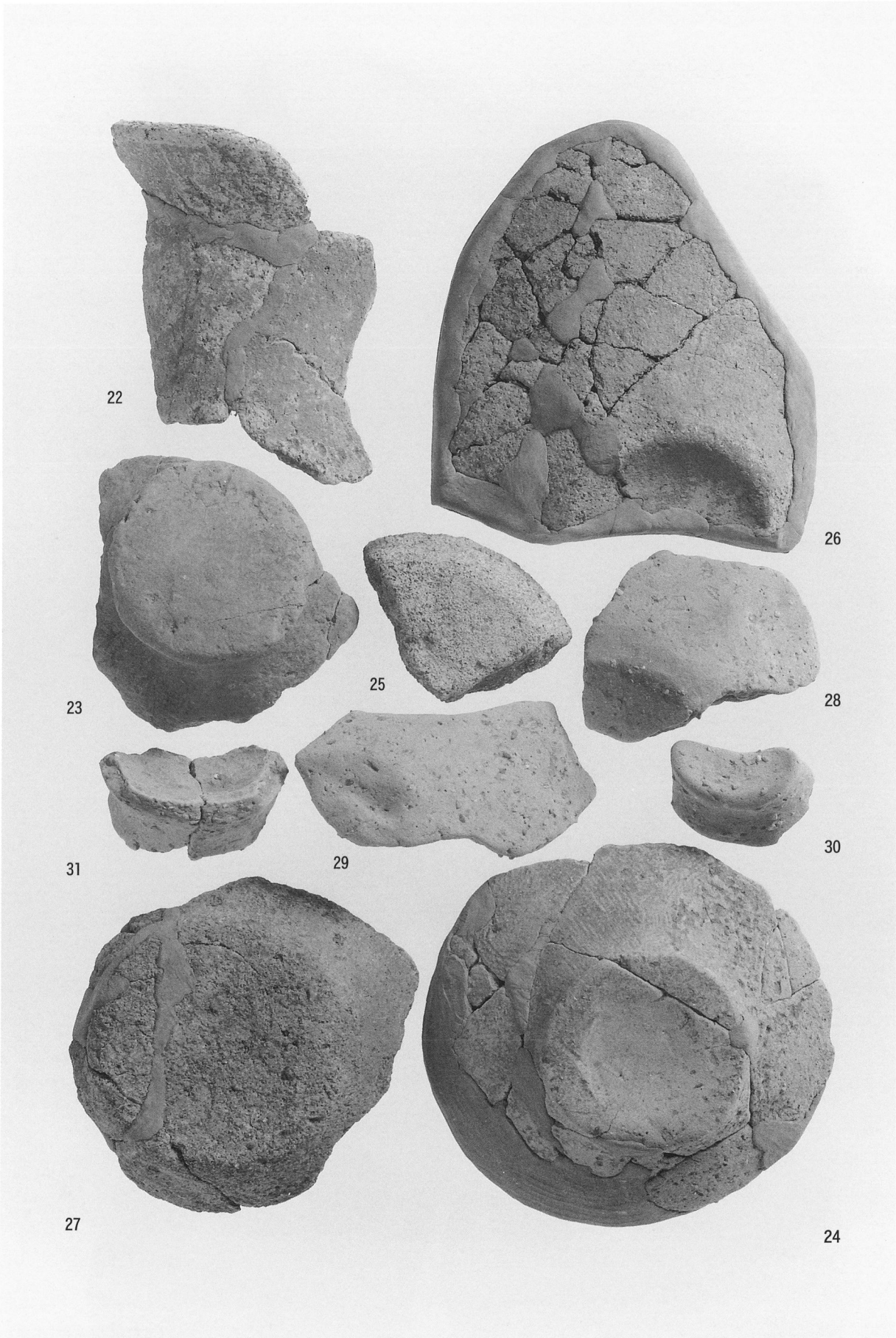




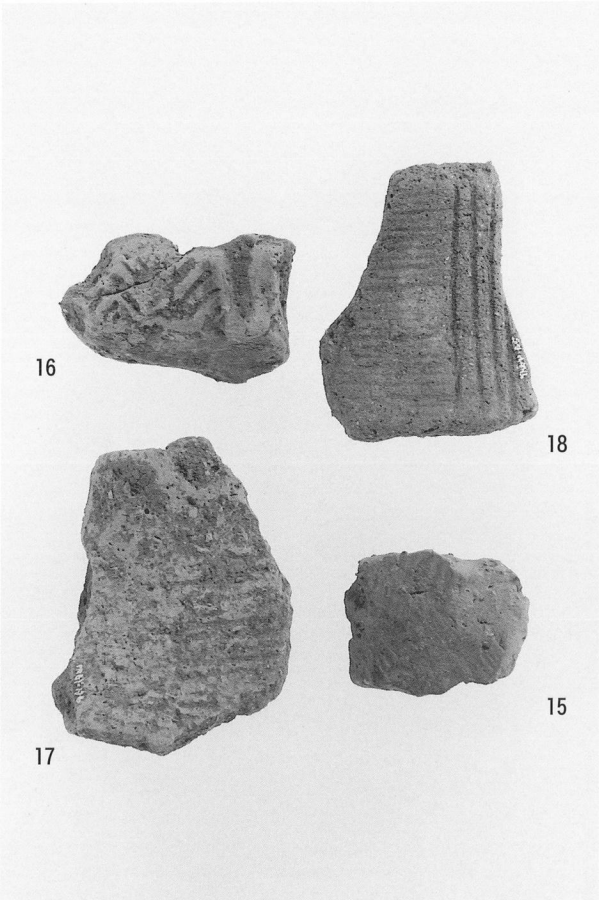
蒲ヶ谷原遺跡出土遺物①

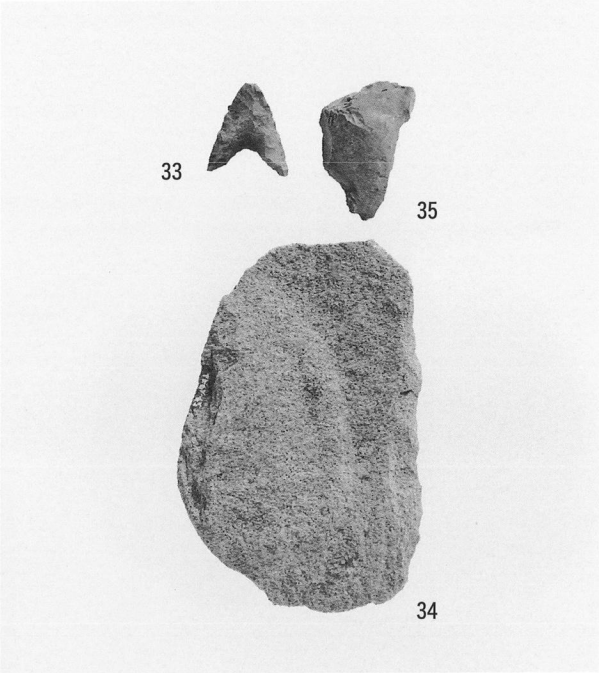


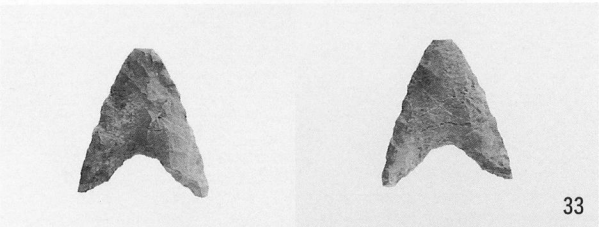
蒲ヶ谷原遺跡出土遺物②



蒲ヶ谷原遺跡出土遺物③

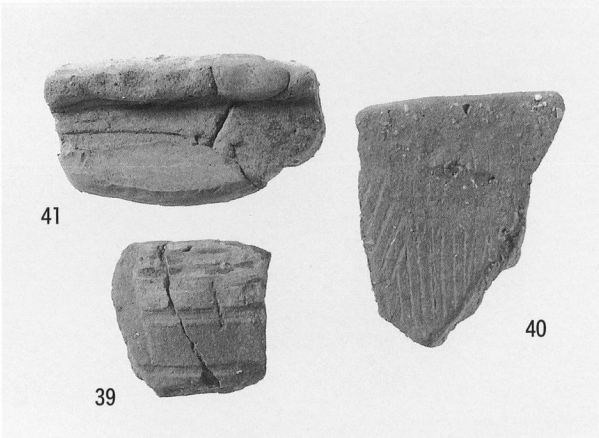


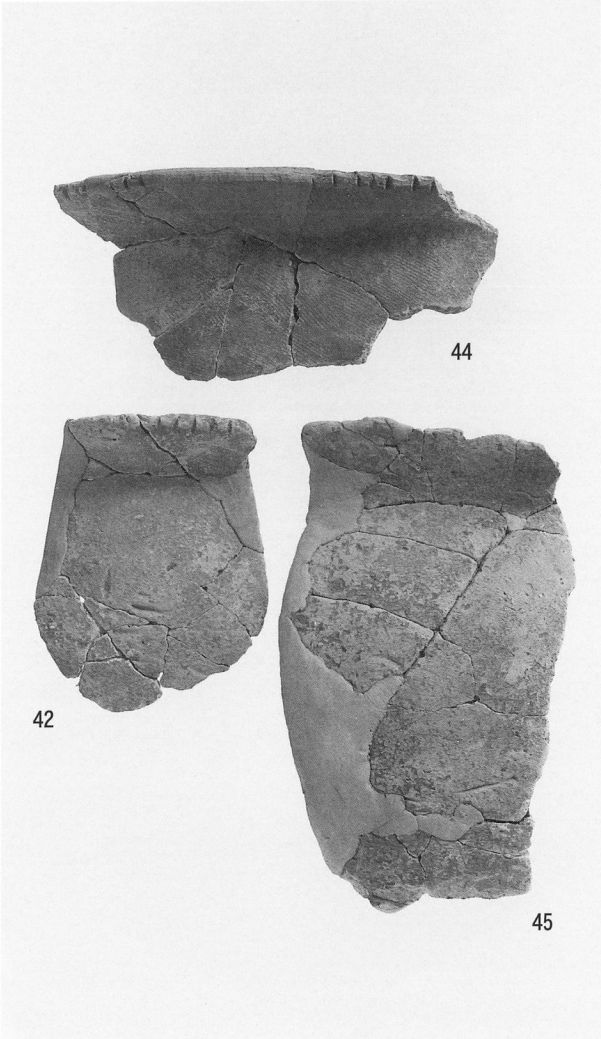




SB07・08出土土器　（台付甕のみSB15出土）

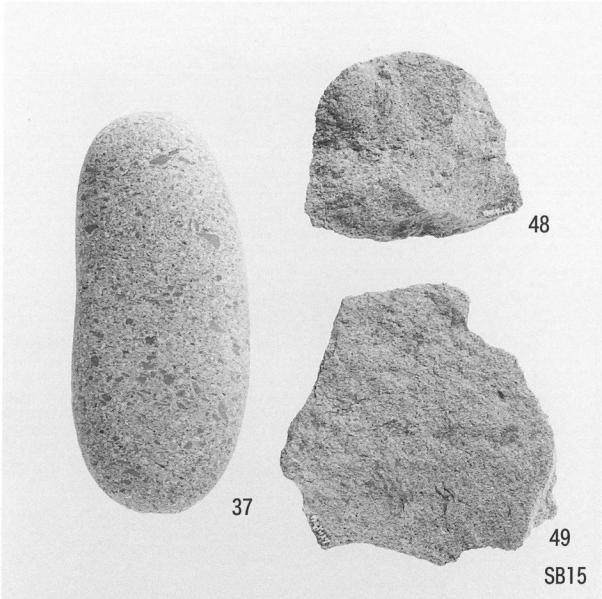
蒲ヶ谷原遺跡出土遺物④

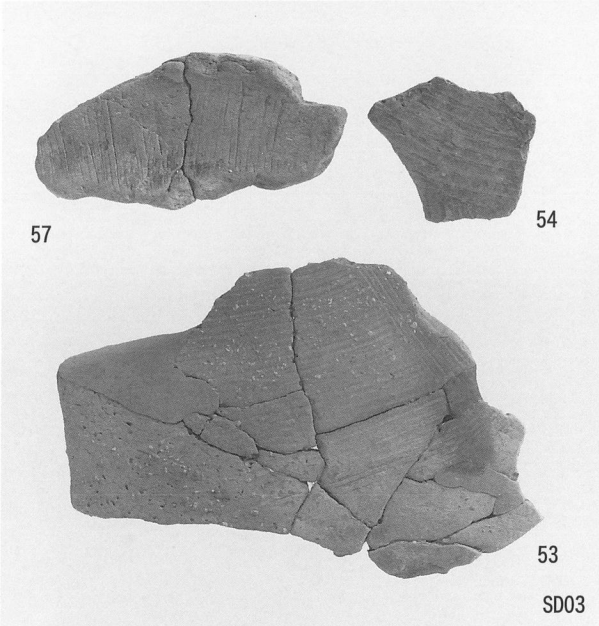




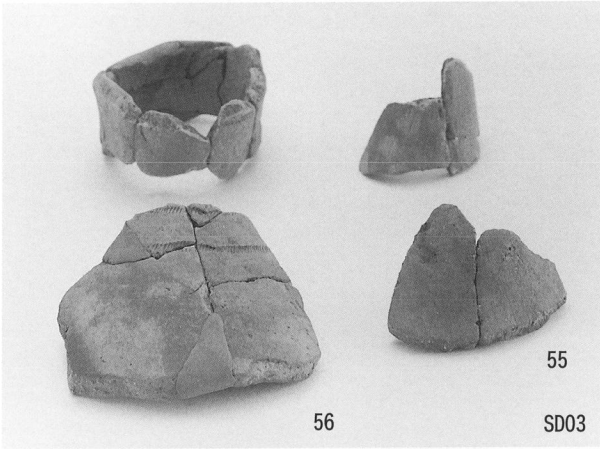
蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑤

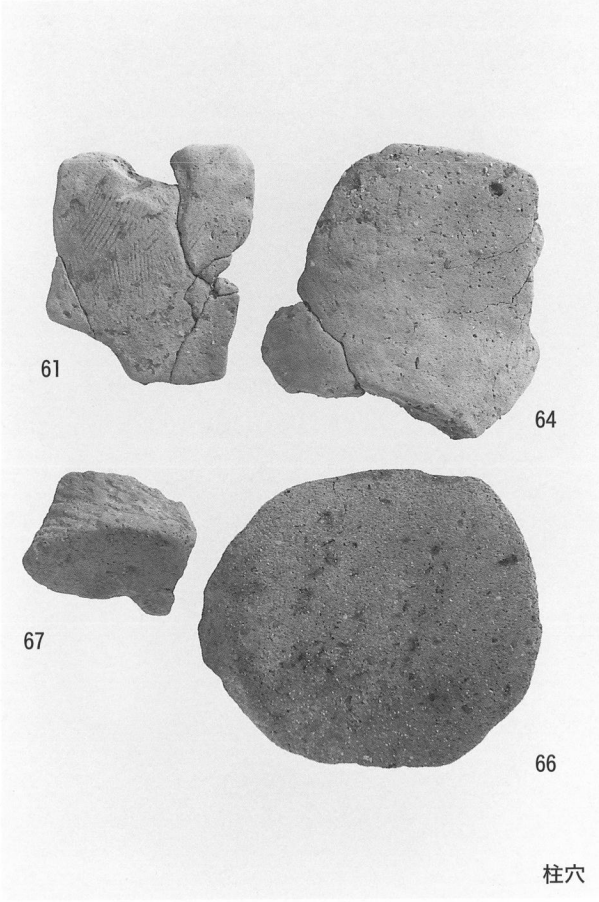
SB15出土土器

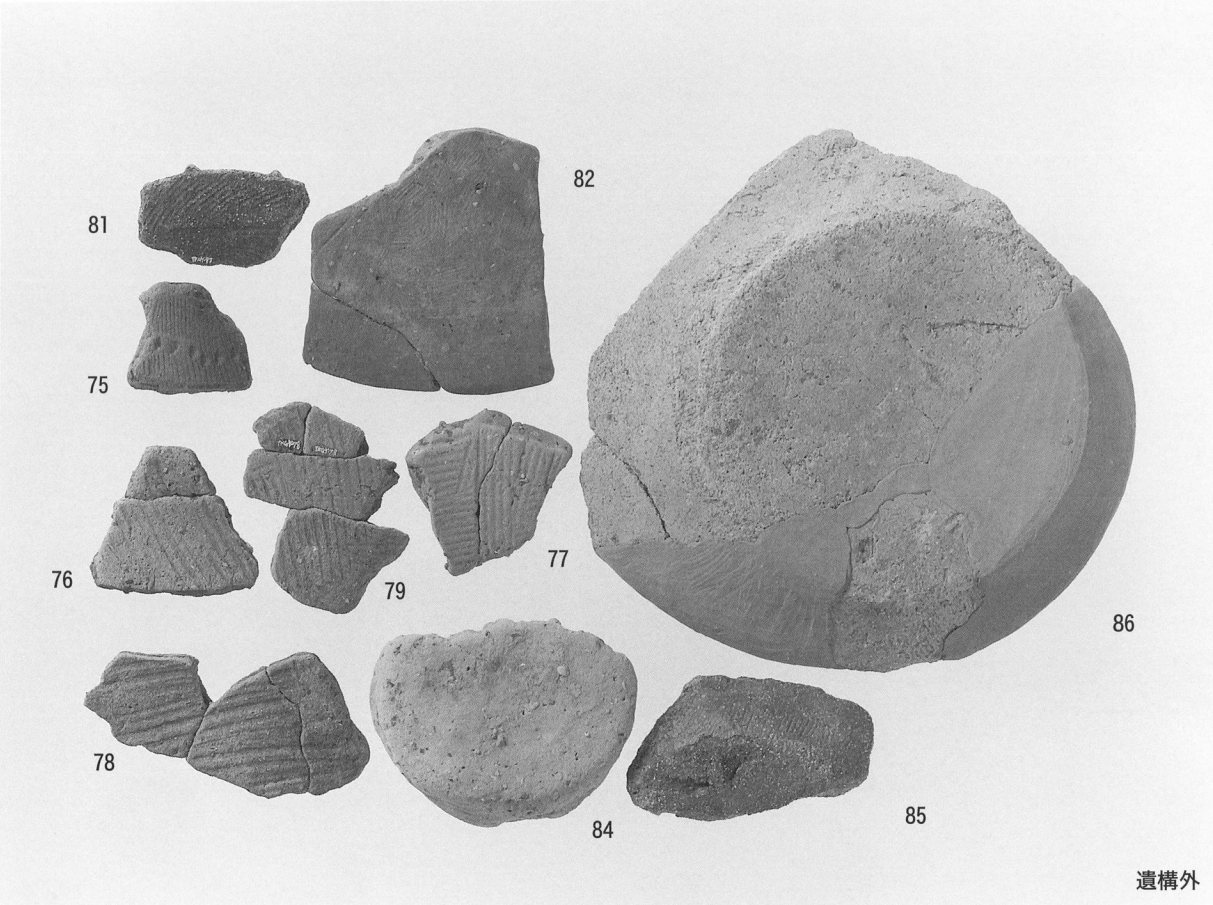




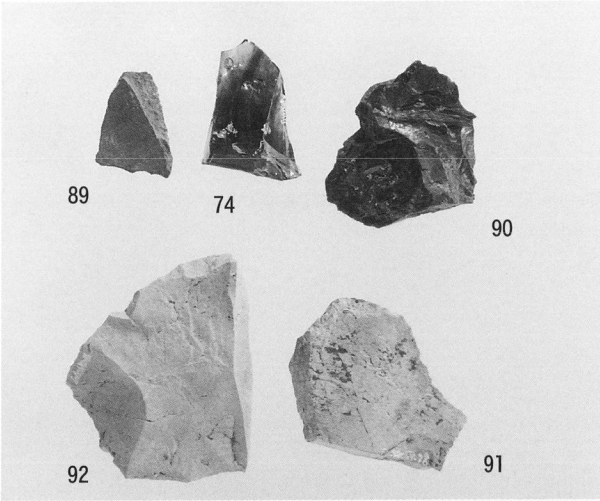
蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑥

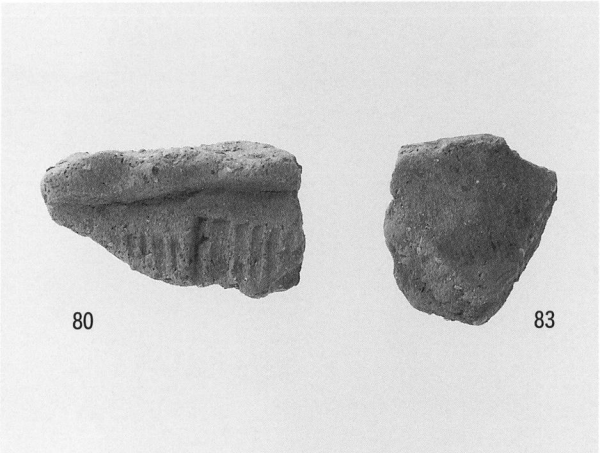


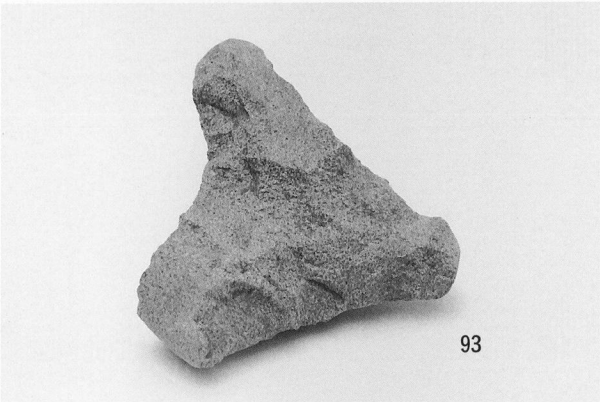


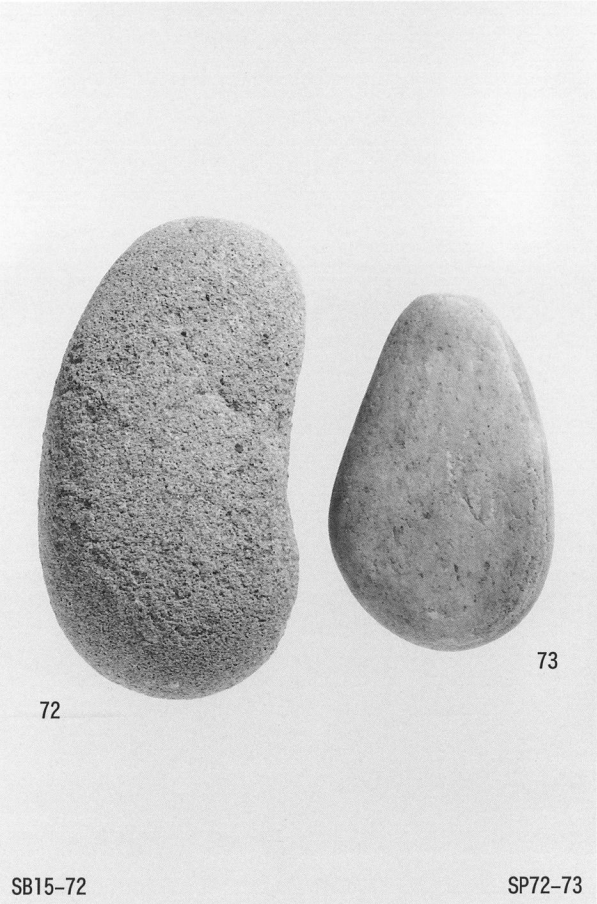


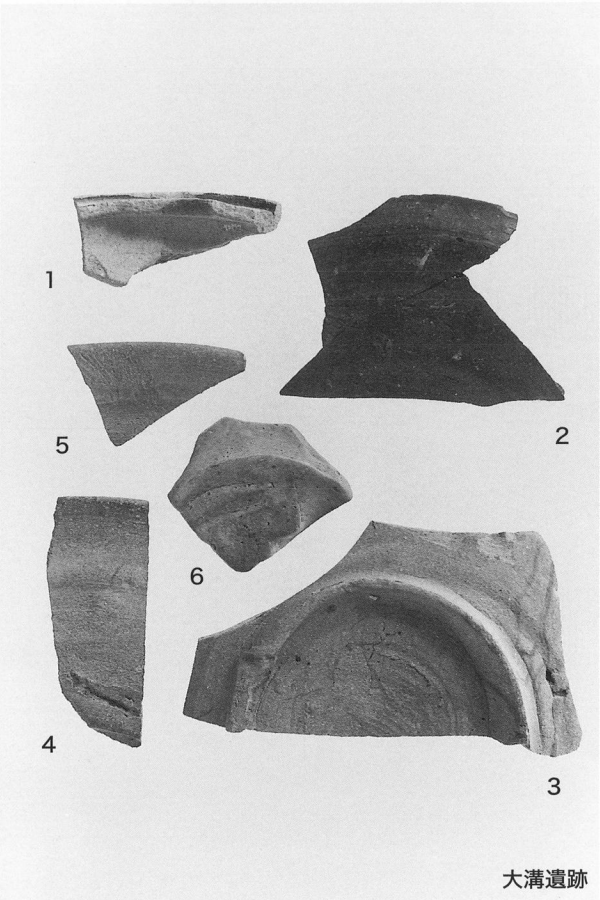
蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑦









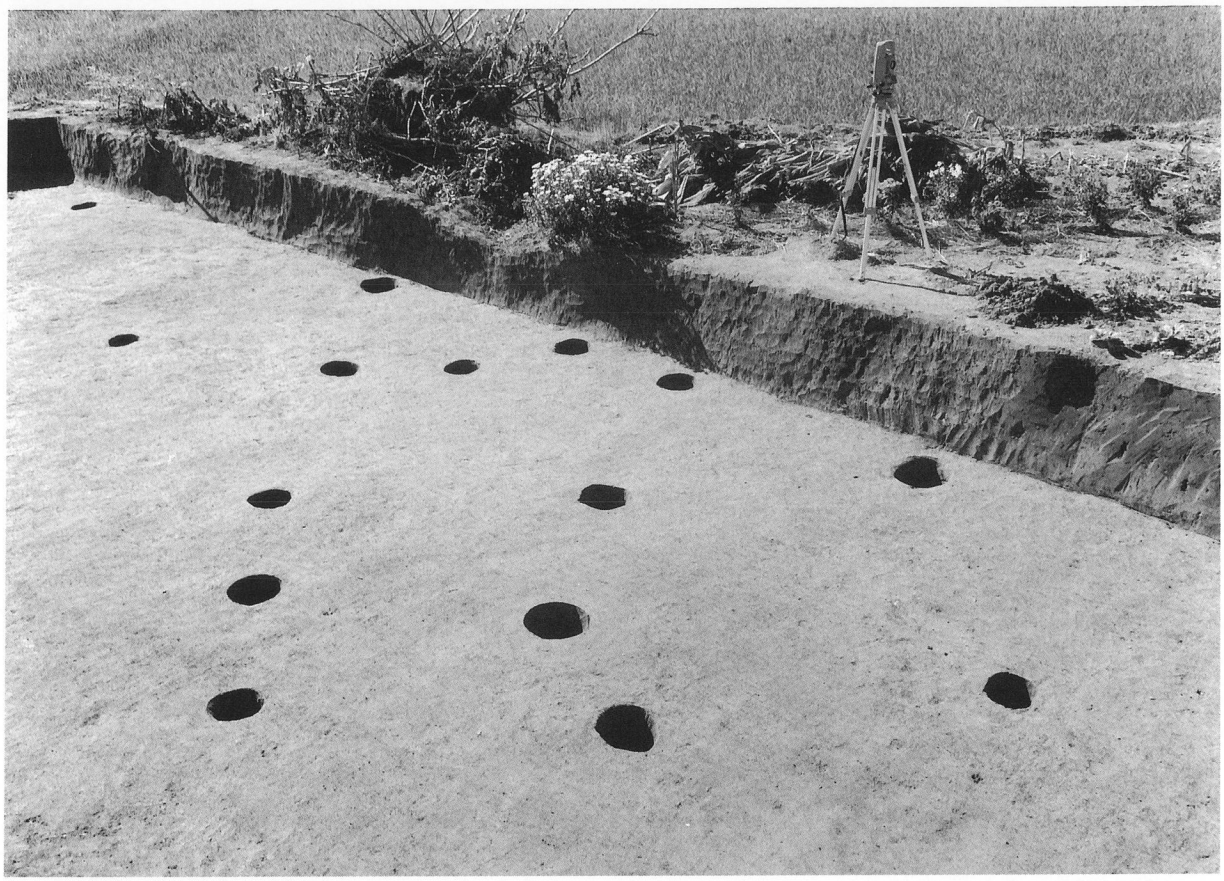


蒲ヶ谷原遺跡出土遺物⑧・大溝遺跡出土遺物

1　大溝遺跡調査前の状況（南西より）

2　大溝遺跡完掘状況（北より）

1　大溝遺跡SH01・02近景（北東より）



2　大溝遺跡 SH02近景（北東より）

報告書抄録

ふりがな	かばがやはらいせき・おおみぞいせき
書名	蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡
副書名	平成13年度（国）150号線道路改良（地域連携２Ｂ）（地域高規格）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第153集
編著者名	大谷宏治（編集）　山形秀樹　植田弥生
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	静岡県静岡市谷田23番20号
発行年月日	2004年９月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
蒲ヶ谷原遺跡（かばがやはらいせき）	静岡県（しずおかけん） 榛原郡（はいばらぐん） 相良町（さがらちょう） 地頭方（じとうがた） 745－1 他	22422	149	世界測地系 34°38′01″ 旧日本測地系 34°37′49″	世界測地系 138°11′01″ 旧日本測地系 138°11′12″	20010726～20010727および20011101～20020228	表面積 1,100㎡	平成13年度（国）150号線道路改良（地域連携２Ｂ）（地域高規格）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
大溝遺跡（おおみぞいせき）	静岡県（しずおかけん） 榛原郡（はいばらぐん） 相良町（さがらちょう） 須々木（すすき） 字大溝（あざおおみぞ） 地先	22422	148	世界測地系 34°40′40″ 旧日本測地系 34°40′28″	世界測地系 138°11′19″ 旧日本測地系 34°40′28″	20011001～20011031	表面積 200㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蒲ヶ谷原遺跡（かばがやはらいせき）	集落	縄文時代	なし	縄文土器２点・石棒１点	縄文時代早期後半の粕畑式土器、中期の石棒出土。
	集落	弥生時代	竪穴住居18軒・掘立柱建物８棟・溝３条・土坑４基・柱穴多数	弥生土器65点・剥片石器７点・打製石鏃１点・叩石３・剥片７点・不明石製品１	弥生時代中期後半～後期前半の集落。
大溝遺跡（おおみぞいせき）	集落	古墳時代（終末期）～奈良時代	掘立柱建物２棟・柱穴数基	須恵器２点以上・土師器１点以上	古墳時代後期後半（終末期）以降の集落。
		中世	なし	山茶碗３点以上・かわらけ１点以上	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第153集

蒲ヶ谷原遺跡・大溝遺跡

平成13年度　(国) 150号線道路改良 (地域連携２Ｂ)
(地域高規格) 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年９月13日発行

編集発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422－8002　静岡市谷田23番20号
ＴＥＬ　(054)262－4261㈹
ＦＡＸ　(054)262－4266

印 刷 所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
ＴＥＬ　(0548)32－0851